

令和2年度

厚生労働省
老人保健
健康増進等事業

ここがあるので 地域が豊かになる 住民主体の居場所 ガイドブック

地域特性を踏まえた
生活支援ニーズへの対応及び
地域活動の継続に係る調査研究事業

一般社団法人
全国食支援活動協力会

はじめに

少子高齢化社会と言われているわが国ですが、今後、国全体としても、各地域においても本当に大きな変動の時期に差しかわかろうとしています。総人口の減少とともに、働いて社会を支える世代である「生産年齢人口」（15-64歳）の減少も進んでおり、現在は総人口の60%弱を占めていますが、2040～2050年代には総人口の52%程度となり、これ以降、人口の中の世代別の割合は、老年人口比率（高齢化率）が約38%、年少人口比率（0-4歳）は約10%の割合で、超高齢社会の状況のまま、安定して推移すると予想されています〔国立社会保障・人口問題研究所、日本の将来人口推計（平成29年推計）〕。

家族構造も20世紀の状況から大きく変化しました。3世代同居の割合は減り、独居や老々世帯が増え、これまで当たり前のように家族が担っていた高齢者との社会的関係や生活の支援は失われやすい状況になっています。高齢になって一人暮らしになっても地域で暮らし続けるためには、社会参加ができる環境をつくり、孤立や孤独を防ぐことが必要ですし、地域の中で高齢者の生活の基盤を支援する機能は今後ますます必要になっていきます。しかし、人口構造の推移は地域によって大きく異なっており、さらに近所の人同士の関係や社会資源も異なっています。

そこで、介護保険制度の地域支援事業のなかに生活支援体制整備事業が位置づけられ、生活支援コーディネーターの皆様は日々、「総合事業の通所型サービスBを作りたい」「介護予防を担うグループ活動を作りたい」「ちょっとした困りごとに対応する訪問支援の担い手を増やしたい」といった、それぞれの地域で必要とされている活動の開発に取り組んでおられると思います。一方で、ボランティア活動、住民参加型活動としての担い手がなかなか見つからない、引き受けてくれないという問題に直面している地域も多いのではないのでしょうか。

この手引きでは、それぞれの地域の状況にあった居場所づくりを進めていくための参考となるように、参加型の居場所を基盤として生活支援等を行う活動に発展していったさまざまな事例を紹介しています。皆様の活動に参考にしていただき、各地域で多くの参加型の居場所を作る上での手がかりになれば幸いです。

2021年3月

地域特性を踏まえた生活支援ニーズへの対応及び
地域活動の継続に係る調査研究事業研究委員会委員長
日本大学文理学部

内藤佳津雄

ここが
地域が豊かになる
住民主体の居場所
ガイドブック

目次

はじめに	P01
多機能な住民主体の居場所イメージ	P04
アセット重視の考え方	P06
1 インデックスから探す	P08
2 居場所の機能から探す	P10
基本情報一覧	P12
事例1 地域食堂ゆめみ〜る	P14
事例2 あかねサロン・ふれあいサロン	P18
事例3 美まもりやまカフェ	P22
・世田谷区の三者連携の取り組み	P26
事例4 ユニバーサルステーション	P28
・あらかわ子ども応援ネットワークについて	P32
事例5 ほっとさこんやま	P34
・「カフェ型中間支援機能」について：横浜市での取り組み	P38
事例6 常設型地域の茶の間 実家の茶の間・紫竹	P40
事例7 常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	P44
・「地域の茶の間」支え合いのしくみづくり	P48
事例8 コミュニティカフェ・ふらっと	P50
事例9 東灘こどもカフェ「木洩童（こもれど）」	P54
事例10～13 島根県雲南市の住民主体の居場所「交流センター」	P58
事例10 新市交流センター	P60
事例11 鍋山交流センター・安らぎ広場	P63
事例12 中野交流センター	P66
事例13 波多交流センター・はたマーケット	P69
・雲南市地域自主組織とその可能性	P72
事例14 まちのお茶の間 アテラーノ旭	P74
事例15 奈半利町あったかふれあいセンター	P78
事例16 農村交流施設 森の巣箱	P82
・あったかふれあいセンター／集落活動センター	P86
参考 地域特性の考え方	P88
委員名簿	P92

多機能な住民主体の居場所 イメージ

「いつ来てもいい・何をしてもいい」

「誰でも利用できる・気軽に参加できる」

「人とつながりが持てる・仲間ができる」

「経験や能力を活かすことができる」



こんな居場所が、住民自身の自発性を持って動き出したらどんなことが期待できるでしょうか。

多様な関係者と地域資源が結びつく

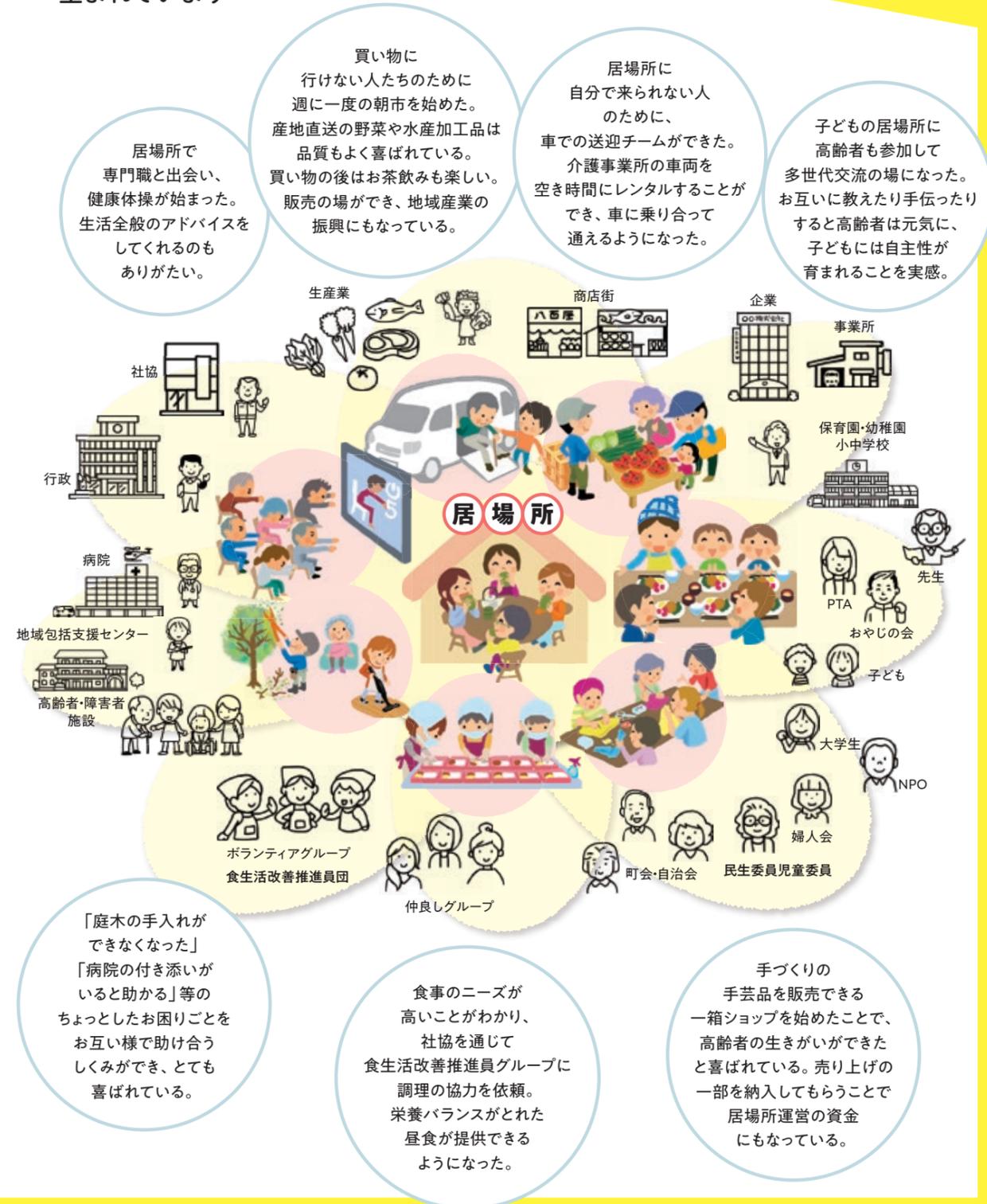
住民活動の基本は、担い手と受け手が同じ立場で共にいられる「お互いさまの関係づくり」です。誰でも参加でき安心して過ごせる居場所には、様々な人々が関わり、多くの地域資源が結びつくことになるでしょう。なぜなら、福祉の制度だけではまかなえない毎日の暮らしのニーズが、そこで達成できるからです。

多機能に向かう住民主体の居場所

人々が集う地域の居場所は、交流を深めたり参加の場になるだけでなく、地域の様々な情報や課題を把握するプラットフォームとなります。その情報や課題が多様な関係者・地域資源と結びつくことで、新しい活動やしくみが創出する土壌となるでしょう。

本誌では、居場所を利用する人・活動を担う人を起点に、地域全体に機能を広げ豊かに展開している事例を、アセット重視の考え方※ P6に基づいて、地域の特徴や関係者・地域資源との関係とともに示しました。新しい活動やしくみが生み出されるために重要となる公的機関の役割についても整理しました。

例えば、実際にこんな取り組みが生まれています



アセット重視の考え方

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
祐成保志

アセット重視の考え方は、健康・福祉の分野で、専門家主導に対する反省と、住民の力への着目から生まれてきたものです。

専門家主導の考え方では、「ないもの」（弱み、できないこと）が焦点となります。とりわけ、急を要し、重大なものが優先されます。病気や身体・認知機能が低下した、またそのおそれがあると判断される場合に、必要なサービスが提供されます。これは、問題を抱えた人に的を絞って、サービスやお金などの資源を集中的に投入するという手法です。必要の有無や大小について判断を行うのは専門家です。

専門家主導の考え方が想定する住民像は、サービスの受け手です。住民は消費者の立場に置かれ、主体的な参加の度合いは低くなります。また、取り組みの時間幅は、問題が解消されるまでの期間に限られます。さらに、サービスを評価する際には、客観性が重視されます。「なぜ病気になるのか?」、そして「いかにして素早く治療するか?」が、専門家主導の考え方の基本的な問いです。

これにたいして、アセット重視の考え方は、「あるもの」（強み、できること）に目を向けます。アセットは次のように定義されます。「個人、家族、コミュニティが自由に使える集合的な資源であり、健康に対するマイナスの影響から人々を保護し、健康・福祉を向上させ、生きる上での選択肢を拡大させるもの」*1。

この意味でのアセットは、物やお金に限定されません。誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、首尾一貫感覚といった心理的な資源や、知識、経験、技能、社会関係資本といった社会的な資源も、大切な構成要素です。そして、アセットが集合的な資源であるという点も見逃せません。それらは、隣人や友人との「つながり」（関係性）のなかに蓄えられることによって、力を発揮します。

アセット重視の考え方の前提には、住民自身が、健康・福祉を維持・向上するための力を持っているという見方があります。想定される住民像は、サービスの受け手や消費者というより、共同で問題の解決をはかる仲間（共同生産者）です。住民参加の度合いは高く、専門家が関わりつつ、住民が主体となって進める場面が多くなります。「なぜ健康になるのか?」、そして「いかにして長く健康を保つか?」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

アセット重視の考え方は、専門家主導の考え方とは対照的です（表1参照）。ただし、両者は対立するものではありません。それらが、いわば車の両輪のように相互に補完しあうことで、社会の健康・福祉が向上するといえます。

表1 専門家主導とアセット重視

	専門家主導	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

アセット重視の考え方では、コミュニティに根ざすことや、コミュニティが主導的な役割を担うことが期待されます。ただし、これはすべてを住民まかせにするということではありません。公的機関には、条件を整えるという重要な役割があります（表2参照）。住民自身がすでに有益な活動を行っていることを認識し、住民が重視している価値や、住民が生きている物語を共感的に理解することが、その第一歩です。

表2 アセット重視の考え方のもとづく公的機関の役割*2

- ①健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。
- ②住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。
- ③住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。
- ④個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。
- ⑤困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。
- ⑥相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。
- ⑦その地域でうまくいっていることの価値を認める。
- ⑧健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。
- ⑨コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

アセット重視の考え方は、もともと欧州で提唱されました。しかし、アセットという言葉そのものは使われなくとも、共通する考え方のもとづく実践や支援が、すでに各地でひろがりつつあります。皆さんの身近なところにも、その兆しや種を見つけることができるはずで、条件の異なる地域での居場所づくりを紹介する本ガイドブックが、そのための手がかりとなることを願っています。

*1 Garven, F., J. McLean and L. Pattoni, 2016, Asset-Based Approaches: Their rise, role and reality, Dunedin Academic Press, p.29.

*2 同書, pp.35-36



地域が豊かになる
住民主体の居場所があったらいいな
でも、どうしたらいいのかな？
参考になる事例を知りたいな、

1 インデックスから探す (事例ページ右端)

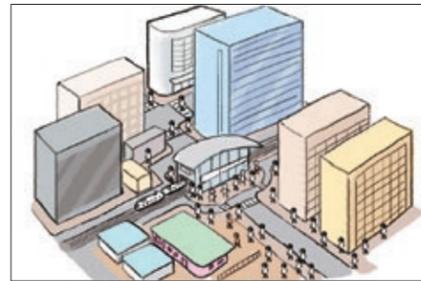
地域の特徴

産業の移り変わりや住宅の開発等での人口増減、買い物や通勤等の環境、住んでいる人たちの構成等で、地域にある活動やアセットは様々です。読みたい事例を特徴の地域から探せるように、8つのタグをつけました。

※本誌でいう地域とは、居場所に徒歩で通える程の周辺地域、又は、居場所の成り立ちに深く関わる地域を指しています。

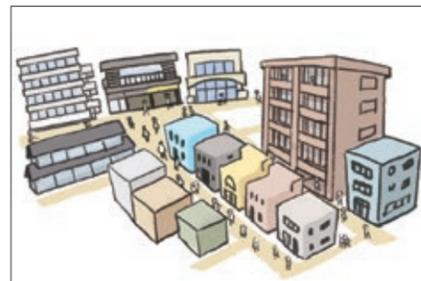
①人口集中と都市化の進んだ地域

住宅が密集していて、第三次産業(商業、飲食、金融等)で働く人が多い地域。本誌の事例では、大都市の市街地だけでなく周辺部(郊外)も含まれました。



②都市化が進んだ地域

「①人口集中と都市化の進んだ地域」程は家が密集していないけれど、第三次産業で働く人が多い地域。本誌の事例では、地方都市にある居場所がこの地域に含まれました。



③その他の市街地及び郊外

「①人口集中と都市化の進んだ地域」や「②都市化が進んだ地域」には含まれない市街地と郊外。本誌の事例では、地方の役所や主要な駅が近くにある居場所がこの地域に含まれました。



④農山村地域

農業や林業に携わる人が多く、住宅がまばらな地域。



(地域分類の詳細は P88-89 を参照ください。)

このガイドブックでは、地域のアセットをつなげて地域を豊かにしている、16の事例をご紹介します。

2通りの方法で、読みたい事例から読み始めることができます。

探す方法は
2つあるよ！

①インデックスから探す (事例ページ右端)

ココ↓



②居場所の機能 から探す

6つの
アイコンが
あるよ！



⑤高齢化が進んだ地域

高齢化は課題とされる一方で、「元気高齢者」は地域の重要なアセットでもあります。ここでは、高齢化率(65歳以上の人口割合)が35%以上の地域にインデックスをつけました。

⑥新住民が多い地域

新住民が多いと、つながりがつくられにくい一方で、新しいものが生まれやすい面もあります。ここでは全住民の4分の1以上が、同じ自治体に住んで5年未満の地域にインデックスをつけました。

⑦長く住んでいる人が多い地域

長く住んでいる住民が多い地域では、付き合いの長い仲良しグループや深い信頼関係がアセットになることがあります。ここでは、「同じ自治体に住んで20年以上」の人と「生まれた時からその自治体に住んでいる人」を合わせると、6割以上になる地域にインデックスをつけました。

⑧人が減っている地域

2005年から2015年の10年間で人口が1割以上減った地域にインデックスをつけました。

※数値は全て2015年国勢調査を参照しました。

立ち上げ期を支えた支援者

どんな人に応援されて居場所が立ち上がったかを知ると、居場所の成り立ちへの理解は深まります。事例ページの「カギとなるアセット」に居場所を支援する人たちについて記載していますが、特に「立ち上げ期」を支えた支援者を、

自治体 地域包括支援センター 社会福祉協議会 生活支援コーディネーター
中間支援 NPO 町会・自治会 地域の有志

の7つのインデックスにしました。

団体の法人格

運営団体の法人格から居場所の性質をみることもできます。本誌の事例から

任意団体 認可地縁団体 NPO 法人 社会福祉法人

と4つの法人格をインデックスにしました。

2 居場所の機能から探す

本誌では、訪問した事例で見つけた居場所の機能を、誰もが住みやすい地域に資する機能という観点から6つの分類で整理します。居場所においては、ひとつの活動に複数の機能が見いだせることがほとんどですが、ここでは活動の主な機能を1つ又は2つまでに絞って紹介します。

①交流（心地よい距離で人とのつながりが持てる機能）

人と出会い、一緒に時間を過ごすことは居場所の本質的機能です。趣味や活動に取り組む仲間づくりから「気にする」「気にされる」といった緩い関係性まで、居場所での交流が人と人とのつながりを育ててくれます。工夫を凝らしたプログラムが用意される居場所もあれば、あえてプログラムをつくらないことで、「誰が来てもよい」「何もなくてよい」安心してその場に居られる価値を提供する居場所もあります。対象も高齢者から子どもまで様々です。

②よろず情報・相談

住民にとって、専門職や公的な窓口への相談はなかなかハードルが高く感じられるものです。専門職や公的な存在でなくても、信頼できる人がいる居場所は大変心強い存在です。誰が来てもいい居場所では、相談という形になる前のつづきも気軽に話すことができるため、早期解決にもつながります。

そのような居場所の性質を活かし、公的な情報の周知や専門職への橋渡し役も務めています。

③健康寿命をのばす

高齢者のための体操教室等、認知症予防・介護予防のための取り組みは、社会福祉協議会や生活支援コーディネーター等の協力や専門職との連携で、多くの居場所において行われています。

アイコン	タイトル	団体名	ページ
交流	顔見知りが増えていく仲間づくり	地域食堂ゆめみ〜	P16
	子どもの食と学習支援「かえる食堂」	地域食堂ゆめみ〜	P16
	高齢者と孫世代の多世代交流	あかねサロン・ふれあいサロン	P20
	福祉作業所と連携したカフェ運営で交流	美まもりやまカフェ	P24
	多世代の関わりが自然に生まれる居場所	ユニバーサルステーション	P30
	小中学生の学習支援「さくら教室」	ほっとさこんやま	P37
	多世代交流「日曜ほっと」	ほっとさこんやま	P37
	人が来やすく、居やすくなるための工夫	常設型地域の茶の間 実家の茶の間・紫竹	P42
	空き時間・空きスペースは、会員の交流に開放	コミュニティカフェ・ふらっと	P52
	自由が魅力。自然に仲間が増える	東灘こどもカフェ「こもれど」	P56
	「笑んがわ市」で産直市と交流の復活	中野交流センター	P68
	多世代で行う防災訓練(法恩寺地区サテライト)	奈半利町あったかふれあいセンター	P80
	合宿やツーリングの宿泊客で賑わう宿泊所の運営	農村交流施設 森の巣箱	P85
	相談から始まった、精神障害のある若者たちの社会経験の場	地域食堂ゆめみ〜	P17
	よろず情報相談	社協・行政・地域包括の三者で連携支援	美まもりやまカフェ
子どもから高齢者まで相談に応じる		ユニバーサルステーション	P30
専門職と相談を重ね、相談スキルをアップ		常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	P46
カフェだから気軽に寄れる「相談窓口」		コミュニティカフェ・ふらっと	P52
どんな相談も受け入れる		まちのお茶の間 アテラーノ旭	P76
健康寿命をのばす	調理スタッフOGが利用者兼お手伝い	あかねサロン・ふれあいサロン	P20
	体操しながらみんなで見守り	美まもりやまカフェ	P24
	自治会役員や民生委員児童委員で見守り	ほっとさこんやま	P36
	作業療法士等の専門職による生活改善指導	常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	P46
	水道メーター検針の仕事と兼ねて、各家訪問見守り	鍋山交流センター・安らぎ広場	P64
	地元看護師が健康を見守る「ちよんてごチーム」の結成	鍋山交流センター・安らぎ広場	P65
	ご当地体操「すきすき中野「長寿」体操」	中野交流センター	P67
日常生活支援	緊急連絡先を記載した「お守りカード」で見守り	農村交流施設 森の巣箱	P84
	配食時に見守りとニーズ対応	地域食堂ゆめみ〜	P16
	「朝市」開催による買い物支援	地域食堂ゆめみ〜	P17
	庭仕事のお手伝い「グリーンサポート」	あかねサロン・ふれあいサロン	P21

④日常生活支援

生活支援サービスには、主に、1) 会食、2) 配食、3) 買い物支援、4) 移動支援、5) 家事援助が挙げられますが、日常のちょっとした困りごとをお互いに助け合うしくみづくりとして、独自に住民情報を集約したり、交換チケットの導入等、住民の信頼関係をベースにした試みも行われていました。

上述の日常的なサービスのほか、子どものための学習支援や、緊急時対策として生活困窮世帯を対象にしたフードパントリーを始めた居場所もありました。

⑤出番としごと（役割を得てやりがいを持てる機能）

多くの居場所の運営は住民の互助によって成り立っています。また、得意なことを活かしてそれを必要としている住民の手助けをしたり、居場所はどんな人にも出番や役割を見つけやすい場所です。住民手づくりの雑貨や加工食品を販売したり、子どもや若者が就労体験を目的に軽作業に参加したり、といった取り組みも生まれています。

⑥地域づくり（コミュニティを豊かに育む機能）

居場所には地域の生活ニーズに関する情報が集まりやすく、地域の福祉計画や制度設計に地域住民の意向を反映させることが期待できる居場所もありました。

テーマ型NPOによる居場所では、地域住民や自治会・町会活動に場所貸しすることでテーマに拘らない関係性をつくったり、地域のお祭り等に積極的に参加することで、地域に多層的なつながりを育むことに貢献していました。

また、旧小学校の校舎を活用していたり、地域で唯一の商店が居場所にある等、居場所そのものが住民の物理的・心理的な拠点となっている地域では、居場所は唯一無二であり、地域に欠かせない場所になっていると言えます。

日常生活支援	買い物や通院の移動支援「おでかけワゴン」	ほっとさこんやま	P36	
	住民相互の助け合いのしくみづくりにチケットを活かす(参加回数券・実家の手)	常設型地域の茶の間 実家の茶の間・紫竹	P43	
	食生活改善推進員による、塩分控えめ栄養バランスの良い食支援	常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	P46	
	会員同士による「たすけあい事業」	コミュニティカフェ・ふらっと	P52	
	「剪定・大工」「介護」をお手伝い「なんでもお手伝いセンター・見守りクリーン」	東灘こどもカフェ「こもれど」	P57	
	「お願い会員」「まかせて会員」の「近助」支援体制	新市交流センター	P61	
	小中学生が楽しみにする高齢者の買い物サロン	新市交流センター	P62	
	「笑んがわ市」で産直市と交流の復活	中野交流センター	P68	
	「はたマーケット」で買い物と交流の復活	波多交流センター・はたマーケット	P70	
	地域内交通「たすけ愛号」	波多交流センター・はたマーケット	P71	
	配食時の見守りや、お手紙によるつながりづくり	まちのお茶の間 アテラーノ旭	P76	
	必要な人が利用できる地域ぐるみの介護・子育て	奈半利町あったかふれあいセンター	P80	
	不登校の子どもや、高校の中退防止支援「あったか塾」	奈半利町あったかふれあいセンター	P81	
	出番としごと	保育園グッズづくりで高齢者が大活躍	美まもりやまカフェ	P25
		農との連携で、おこづかいかせぎ	ユニバーサルステーション	P31
地域でまわる寄付循環		常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	P47	
お客さん一人から講座開催「みんなの出番づくり」		東灘こどもカフェ「こもれど」	P56	
子どもの清掃活動「クリーンクルー」		東灘こどもカフェ「こもれど」	P56	
地域づくり	水道メーター検針の仕事と兼ねて、各家訪問見守り	鍋山交流センター・安らぎ広場	P64	
	稼げるデイサービス シシトウ選果	農村交流施設 森の巣箱	P84	
	場所貸しから広がる仲間づくり	あかねサロン・ふれあいサロン	P20	
	場所貸しから生まれる応援者	ユニバーサルステーション	P30	
	「居場所づくり」は、地域との「関係づくり」から始める	常設型地域の茶の間 実家の茶の間・紫竹	P42	
	「入りにくい」の声からできた「土間ショップ」	コミュニティカフェ・ふらっと	P53	
	新拠点「安らぎ広場」づくり	鍋山交流センター・安らぎ広場	P65	
	ご当地体操「すきすき中野「長寿」体操」	中野交流センター	P67	
	「笑んがわ市」で産直市と交流の復活	中野交流センター	P68	
	「はたマーケット」で買い物と交流の復活	波多交流センター・はたマーケット	P70	
	地元を離れた応援者をつなげる地域通信「はただより」	波多交流センター・はたマーケット	P71	
	地域の高齢者をつなげる人気イベント「鬼の福分け」	まちのお茶の間 アテラーノ旭	P77	
	誰にでも役割がある、全住民が支える地域づくり	農村交流施設 森の巣箱	P84	

基本情報一覧

居場所名	居場所の所在地	運営団体	組織の法人格
地域食堂ゆめみ〜る	北海道登別市幌別町	特定非営利活動法人ゆめみ〜る	NPO法人
あかねサロン・ふれあいサロン	宮城県仙台市若林区遠見塚	認定特定非営利活動法人あかねグループ	NPO法人
美まもりやまカフェ	東京都世田谷区代田	新代田地区社会福祉協議会	任意団体
ユニバーサルステーション	東京都荒川区町屋	子ども村:中高生ホッとステーション	任意団体
ほっとさこんやま	神奈川県横浜市旭区左近山	特定非営利活動法人オールさこんやま	NPO法人
常設型地域の茶の間 実家の茶の間・紫竹	新潟県新潟市東区紫竹	実家の茶の間	任意団体
常設型地域の茶の間 にしかんの茶の間	新潟県新潟市西蒲区巻甲	ボランティア団体 Rera	任意団体
コミュニティカフェ・ふらっと	新潟県三条市本町	認定特定非営利活動法人地域たすけあいネットワーク	NPO法人
東灘こどもカフェ 「木洩童(こもれど)」	兵庫県神戸市東灘区甲南町	東灘こどもカフェ	任意団体
新市交流センター	島根県雲南市木次町新市	地域自主組織 新市いきいき会	任意団体
鍋山交流センター・安らぎ広場	島根県雲南市三刀屋町乙加宮	地域自主組織 躍動と安らぎの里づくり鍋山	任意団体
中野交流センター	島根県雲南市三刀屋町乙中野	地域自主組織 中野の里づくり委員会	任意団体
波多交流センター・はたマーケット	島根県雲南市掛合町波多	地域自主組織 波多コミュニティ協議会	認可地縁団体
まちのお茶の間 アテラーノ旭	高知県高知市元町	特定非営利活動法人アテラーノ旭	NPO法人
奈半利町あったかふれあいセンター	高知県安芸郡奈半利町乙	社会福祉法人 奈半利町社会福祉協議会	社会福祉法人
農村交流施設 森の巣箱	高知県高岡郡津野町床鍋	森の巣箱運営委員会	任意団体

立ち上げ期の 主な支援者	運営団体が提供している 生活支援サービス						
	会食・ 居場所 での食事	配食	買物 (直販) 支援	買物 (同行) 支援	送迎・ 移動 支援	ホーム ヘルプ	
登別市社会福祉協議会	○	○	○	※	○		※買物(同行)支援は社協事業に協力。
—	○	○		※	○	○	※ヘルパーに依頼すれば、買物同行も可能。
世田谷区社会福祉協議会 まちづくりセンター 地域包括支援センター	※						※福祉作業所がコーヒー・菓子を販売。
荒川区社会福祉協議会 あらかわ子ども応援ネットワーク	○	※					※フードパントリーを実施。
左近山連合自治会	○			○	○		
新潟市	○					○	
新潟市 西蒲区支え合いのしくみづくり推進員	○					○	
—	○	○	※1	※2		○	※1「土間ショップ」で野菜や干物を販売。 ※2ヘルパーに依頼すれば可能。
地域の中間支援NPO (NPO法人コミュニティ・ サポートセンター神戸)	○	○		※		○	※ヘルパーに依頼すれば可能。
雲南市		○		○		※	※お願い会員・まかせて会員制度で ちょっとした家事を頼むことは可能。
雲南市			※		○	○	※ファミリーマートの移動販売と連携。
雲南市	○	○	○		※		※「笑んがわ市」への送迎。
雲南市	○		○		○		
—	○	○	○	※		○	※ヘルパーに依頼すれば可能。
高知県 奈半利町	○	○		※	○		※送迎を利用した買い物は可能。
—	○		○		※		※代表個人が実施。

地域食堂ゆめみ～る

【運営】 特定非営利活動法人 ゆめみ～る

社協が推進する住民による福祉計画づくりをきっかけに生まれた、民設民営の地域食堂。

こんな居場所

- ▶ 国道沿いのお食事処風地域食堂
- ▶ 退職男性が打つ手打ちそばが人気
- ▶ 2階は子どものためのスペース



お客さんの一人がお土産に持ってきたトウモロコシがすぐに茹でられてほかのお客さんにふるまわれたり、とても和やかな雰囲気。



敷地内にあるプレハブが朝市の会場になったり、1階の窓から見える畑も活動場所のひとつだったり等、気軽に寄れる場所がいくつもあります。



現在の活動

- 地域食堂**
 - ・ 定食 (600円) 手打ちそば等、1日 20～30 食程度。
- 配食サービス**
 - ・ 土曜以外毎日、昼と夜弁当を配達。高齢者の自宅へ見守り配食 50～60 食。デイサービスや病院 (透析患者) 30 食程度。
- ふれあいいきいきサロン (高齢者サロン)**
 - ・ 会食や趣味の会を都度開催。
- ふれあい子育てサロン**
 - ・ 2階スペースを活用、遊びや会食を都度開催。
- 朝市 (買い物支援)**
 - ・ 食堂の隣にプレハブを建て、毎週土曜に朝市開催。
 - ・ 近隣の農家からの野菜が中心。
- 放課後児童クラブ**
 - ・ 低学年の子どもを親のお迎えまで預かり (利用児童 5人)。
- 子どもの食と学習支援「かえる食堂」**
 - ・ 第2、第4土曜に開催。子どもは無料、大人 300円。
- 放課後子ども教室**
 - ・ ゆめみ～るのスタッフが学校の空き教室を使って放課後週 2 回開催。
 - ・ 月 1 回程度、ゆめみ～るで料理や農作業体験のプログラム。
- フードバンクゆめみ～る**
 - ・ フードバンク活動を実施。子どもの食支援を目的として、母子世帯や子ども食堂・地域食堂へ食材提供。
 - ・ フードドライブ活動を実施。スーパー等の食品小売業者や農業生産者からの食材提供や、一般家庭からの食材を持ち寄る拠点となっている。

「地域食堂ゆめみ～る」ができるまで

・社協が福祉計画を策定する際に、町内会等へ参加を呼びかけたのが始まり

2005年 (平成 17)、登別市社会福祉協議会は地域福祉実践計画策定に際し、町会、民生委員児童委員、子ども・障害者・高齢者の事業所関係者等に声をかけ、「福祉のまちづくり推進委員会」(翌年から「きずな推進委員会」)を発足させました。委員長は、連合町内会会長で現ゆめみ～る副代表の山田正幸さんでした。

当時、福祉は行政や社協が行うものだという考えが一般的でしたが、「地域の福祉計画は住民自らが考えて実行すべきでは」という問いかけに、次第にその考え方に賛同する住民が出てきました。そこで、「福祉のまちづくり推進委員会」が中心となり、アンケートを行ったり、座談会を重ねて「どんなことに困っているか」のニーズを調査したところ、高齢者は「行くところがない」「人と話をする機会がない」「どこかへ行きたくても移動の足がない」という、3つの課題があることが浮かび上がりました。

・「みんなの集まる場が必要」。でも、どうやったらできるのか？

この課題解決のためには「みんなが集まれる居場所があるといい」という意見が打ち出され、設立に向けて具体的な検討を始めました。しかし、実現化に向けては「場所」「費用」「人」が大きな壁となり、町内会で運営を担うことなどとてもできない雰囲気でした。

・「大事なことから」と場所の提供者が現れ、民設民営の居場所が誕生

そのような中、連合町内会副会長をつとめていた対馬敬子さんの夫が「大事なことから」と応援してくれ、元コンビニエンスストアだった空き店舗を購入・改装して、居場所として活用できることになりました。その厚意に応えるべく、家賃を払えるよう、収益事業として「食堂」を行おうと考えました。地域住民 100 人の賛助会員を得て NPO 法人を設立し、2008年 (平成 20) 11月に地域食堂ゆめみ～るをオープンしました。

■ 幌別鉄南地区の概要 ■

- ・ 住民人口：2,195人 1,054世帯
- ・ 高齢化率：34.3% (738人)
- ・ 15歳未満の子ども数：209人
※以上は 2015年国勢調査より。
- ・ 周辺施設：東小学校 (生徒数約 80人)
- ・ 町内会数：8

ゆめみ～るのある幌別鉄南地区は大正・昭和初期には国道沿いに食堂や映画館がある繁華街でした。市の山側が、隣の室蘭市のベッドタウン化して郊外型店舗が増え、10年程前には地区内に生鮮食品を扱う店舗がなくなり買い物にも不自由になりました。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と都市化の進んだ地域

都市化が進んだ地域

その他の市街地及び郊外

農山村地域

高齢化が進んだ地域

新住民が多い地域

長く住んでいる人が多い地域

人が減っている地域

自治体

地域包括支援センター

社会福祉協議会

生活支援コーディネーター

中間支援NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁団体

NPO法人

社会福祉法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

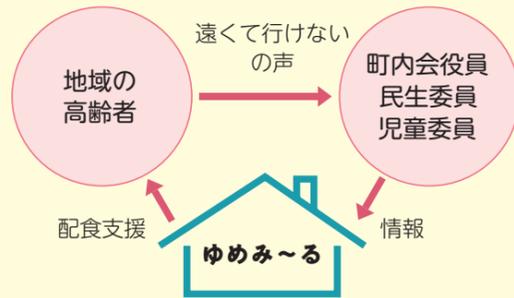
「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

- 交流** **顔見知りが増えていく仲間づくり**
- ・月曜から土曜まで、いつ来ても誰かがいて交流ができます。食べ終わっても数時間雑談をする人、何も注文しないで話だけをに来る人もいます。居場所参加者からの発案で麻雀を定期的に行ったり、ここで知りあい友人になる等、孤立予防の仲間づくりが行われています。

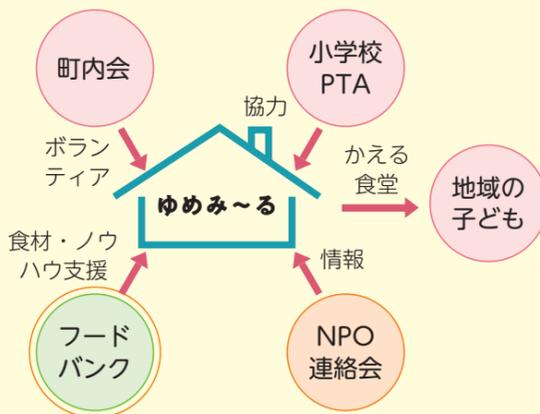
居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

- 日常生活支援** **配食時に見守りとニーズ対応**
- ・町内会や民生委員児童委員から「食べに行きたいが、遠くて行けない人がある」ことを伝えられ、配食サービスを始めました。
 - ・配食は手渡し基本で、必ず本人に会って様子を確認します。応答がない時は何回も電話や訪問をし、民生委員児童委員や町内会役員に連絡することもあります。これまでも、家の中で倒れていたたり、亡くなっていたことがありました。
 - ・利用者の自立を妨げることのないよう、ご飯が炊ける人は「おかずだけ」の注文を受ける等、相談に応じています。



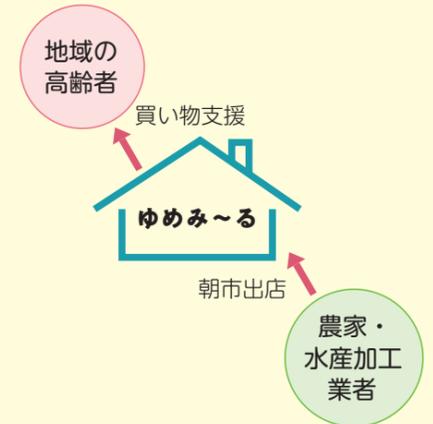
- 交流** **子どもの食と学習支援「かえる食堂」**
- ・登別市の NPO 連絡会で、子どもの貧困を学習したことがきっかけで、子ども食堂の検討が始まりました。
 - ・町内会婦人部経由で若手の住民に声をかけると、子どもを対象にした活動に興味がある新しい顔ぶれが集まりました。
 - ・子ども食堂の運営ノウハウを持つフードバンク事業を行う NPO と知り合い、食材の提供だけでなく、学習支援のアドバイスを受けています。
 - ・元々、ゆめみ～ると地元小学校とは放課後子ども教室に協力する等の連携がありましたが、「かえる食堂」の広報や PTA のボランティア協力の呼びかけも小学校の協力を受けています。



日常生活支援

「朝市」開催による買い物支援

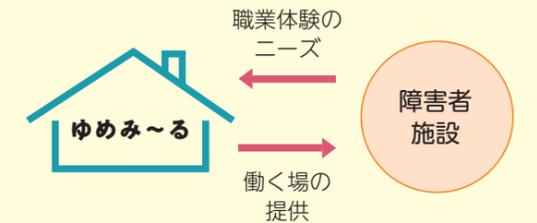
- ・郊外型店舗の出店で地域に生鮮食品を扱う商店がなくなり、車を運転しない高齢者は買い物に不自由していました。
- ・地域食堂で使う食材を地元で探すなかで、農家や水産加工業者とのつながりができました。
- ・居場所参加者の「買い物がしたい」というニーズに応じて、毎週土曜日に朝市を開催。買い物のあとのお茶飲みを楽しみに来る人も。近隣の農家や漁港からの商品が並び地域産業も盛り上げています。



よろず情報相談

相談から始まった、精神障害のある若者たちの社会経験の場

- ・山田さんが理事をしている精神障害者の授産施設から、「就職前の社会経験としてお試的に働く場所が欲しい」とのニーズを把握しました。
- ・ゆめみ～るで数ヶ月働き「これで大丈夫」と自信をつけてから社会に出る、訓練の場として活用されています。すでに6～7人が集立っています。



カギとなるアセット

町内会役員／民生委員児童委員 町内会婦人部／小学校 PTA 登別市社会福祉協議会 地域の人、地域の高齢者、地域の子ども 地域食堂のお客 障害がある人（授産施設からの紹介）	配食サービス事業による収益 農家・水産加工業者（朝市への出店） 放課後子ども教室の助成金（市） フードバンクから食材提供 会費
人	モノ・資金
地域食堂ゆめみ～る店舗（元コンビニ） 敷地内の朝市スペース（プレハブの建物）	幌別鉄南地区連合町内会 登別市社会福祉協議会 市内 NPO 連絡会 幌別東小学校（放課後子ども教室、かえる食堂） NPO フードバンク（学習支援ノウハウ） 障害者授産施設
場	情報・ネットワーク

名称	地域食堂ゆめみ～る	運営団体	特定非営利活動法人ゆめみ～る
住所	北海道登別市幌別町 5-18-1	代表	理事長 対馬敬子
営業日時	月～土 9:00-16:00（日・祝休日）	開設・営業開始	2008年11月
開催場所	団体関係者所有店舗 地域食堂 1F サロン、学習支援 2F	運営体制	スタッフ 20人（食堂と配食 10人、朝市 5人、かえる食堂 5人）理事役員 10人。食堂と配食は有償ボランティア（時給 300円）

あかねサロン・ふれあいサロン

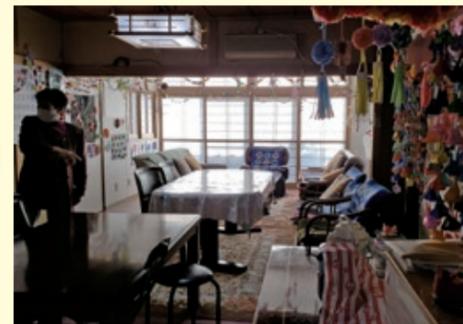
[運営] 認定特定非営利活動法人あかねグループ

80年代に配食事業を始めた女性たちが、
仕事をつくり、学び合い、支え合う居場所。



こんな居場所

- ▶大きなウィンドウの明るいカフェ
- ▶栄養にも彩りにも配慮した食がある
- ▶自立した女性を選ぶ上質な居場所



カフェスペースも
使ってお弁当づくり。
土曜日で、
子どもたちが手伝う様子も
見られました。
(あかねサロン)



施設に
入居された会員
のご自宅をお借りしています。
広々とした居間は、
アットホームな雰囲気。
(ふれあいサロン)

現在の活動

(1) あかねサロン

- ・誰でも来られる地域食堂。配食サービスで提供している弁当と同じ内容の日替わり「あかねランチ」(500円)ほか、コーヒー(160円)等。
- ・イベントの開催 ①あかねちゃん家 第4土曜。地域の居場所づくり、子ども食堂。②子ども料理教室 年2回開催。
- ・場所貸し 認知症カフェ「ぶらっとカフェあかね」(主催：遠見塚地域包括支援センター)。

(2) ふれあいサロン

- ・事務所近くの個人宅を借りて、週2回、高齢者の介護予防とお楽しみのサロンを実施。1回1,980円(別途、入会金等あり)。送迎付き、昼食・お菓子を提供。スタッフによるレクリエーションのほか、外部講師による民謡、ギター演奏等。

(3) 配食サービス

- ・年間360日、月曜から日曜までの昼食、及び、月曜から土曜までの夕食を配食。

(4) 【介護保険】訪問介護サービス

- ・身体介護、生活援助、総合事業。

(5) 【介護保険】居宅介護支援事業

(6) あかねサポート

- ・介護保険外の助け合い活動。ヘルパー2級以上の有資格者が対応。利用料等あり。

(7) ファミリーサポート

- ・家事援助、出張託児、産前・産後・乳幼児のお世話等。利用料等あり。

(8) グリーンサポート

- ・庭木の剪定・草取り。利用料等あり。



サロンができるまで

・女性の自立と社会参加をめざし、有志でスタート

居場所の運営主体「あかねグループ」は初代代表が自宅を開放して始めた「クッキングサロン」をベースに、子育てを終えた主婦たち有志10人が集まり1982年(昭和57)発足しました。設立当初は女性の起業等がメインの活動でしたが、やがて地域へと活動の目が向くようになり、団体発足と同年にヘルパー活動を開始しました。

・次々と「なすべきこと」に取り組んできた

ヘルパーが一人暮らしの高齢者の家を訪ねると、次々と「なすべきこと」が発見されました。配食サービスは、訪問先で「モヤシー皿」の食卓を見たことがきっかけとなり、1984年(昭和59)に始まりました。

その後配食サービスは、1995年(平成7)より仙台市の助成事業となり、1999年(平成11)にはNPO法人格を取得、2000年(平成12)には介護保険訪問介護事業に取り組む等、活動の幅を広げてきました。

・みんなが集まれる居場所オープン

配食や介護事業に取り組む中で、「みんなで集まれる場所が欲しいよね」という声は長年出ていましたが、当時は、家庭の台所を改造したような狭い場所で、サロンを開くスペースはありませんでした。

縁あって現在のあかねサロンを行っている場所に引っ越すことができ、2001年(平成13)、会員相互の交流を目的にしたサロン活動が始まりました。

たくさんの方が集まるようになり、より広いスペースを探していたところ、近隣に住む一人暮らしの会員が施設へ入所することになり、その留守宅を借り受けることになりました。そこで、高齢者を対象とした「ふれあいサロン」がスタート(当初は週1回、のちに週2回開催)。

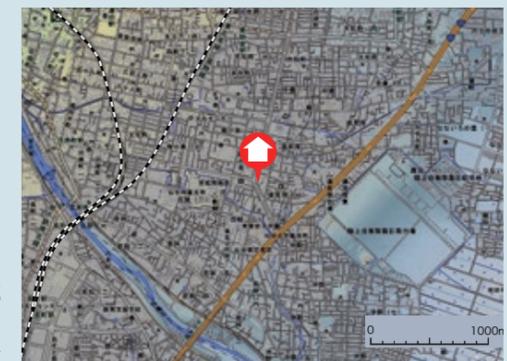
利用者は会員の口コミのほか、地域包括支援センター等からの紹介があります。有償ボランティアの講師が教える体操、折り紙や国語・算数の脳トレの講座等が人気のサロンになっています。

■ あかねサロン周辺地区の概要 ■

※拠点から半径500mの範囲

- ・住民人口：5,308人 2,141世帯
- ・高齢化率：22%(1,170人)
- ・15歳未満の子どもの数：620人
※以上は2015年国勢調査より。
- ・周辺施設：遠見小学校、児童館、地域包括支援センター

あかねサロンのある場所は仙台市若林区の「都心及び周辺地域」(区公式サイトより)に入ります。仙台市は代表的な支店経済都市で、他都市からの転入者が多く、あかねグループでは地元女性とともに他地域出身の女性が多く活動しているところに影響がみられます。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

立ち上げ期を支えた支援者

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所では ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

健康寿命をのばす 調理スタッフ OG が利用者兼お手伝い

・あかねグループ発足から38年を超え、会員の高齢化がすすんでいます。働けなくなって関係が途切れるのではなく、高齢になっても無理なく参加できる場づくりをみんなが模索してきました。調理スタッフ OG の

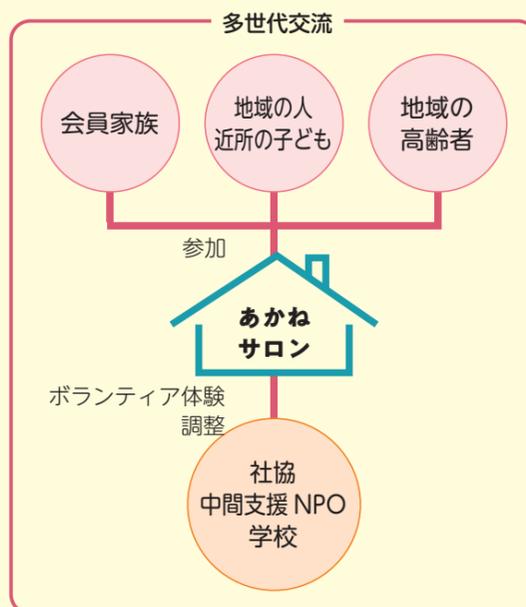
中には、ふれあいサロンに「利用者兼お手伝い」として通っている人もいます。あかねグループの会員、ボランティアの「出会い、学び合い、助け合い、そして支え合い」という理念が実現されています。

居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

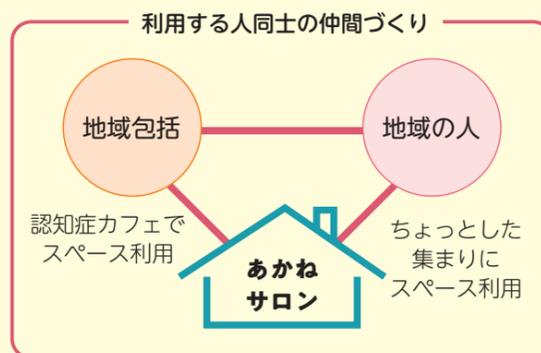
交流 高齢者と孫世代の多世代交流

- ・配食サービス、訪問介護サービス、居宅介護支援事業を行う拠点の1階スペースを、地域の居場所「あかねサロン」として活用しています。
- ・第4土曜には、子ども食堂「あかねちゃん家(ち)」を開催。会員の子どものほか、それまでつながりのなかった近所の子どもの参加があり、多世代交流が行われています。
- ・また、子どもが配食サービスの弁当に添える手紙を書く等、「チャイルドボランティア」も活躍しています。
- ・配食同行やサロンでのボランティア体験を、中間支援NPO、学校、社協を通じて受け入れています。



地域づくり 場所貸しから広がる仲間づくり

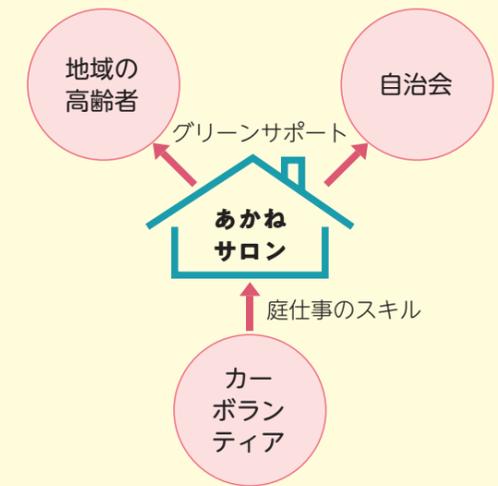
- ・あかねサロンは、地域のための貸しスペースとしても活用されています。
- ・高齢者の会食会や、地域包括支援センターが主催する認知症カフェ「ぶらっとカフェあかね」の会場としても使われています。
- ・また、会員でなくても地域の人が貸し切り利用することができ、これまでも誕生日会などのイベントに利用されています。



日常生活支援

庭仕事のお手伝い「グリーンサポート」

・配食事業カーボランティアのシニア男性が、剪定や庭仕事の特技を持っていることがわかりました。シニア男性が担い手となり、高齢で庭木の剪定等ができない家庭や、公園や広場の草刈り活動ができなくなってきた自治会等からの依頼を請け負う有償ボランティア活動「グリーンサポート」が始まりました。



カギとなるアセット

あかねグループ会員 特技がある会員 カーボランティア(配食事業) グリーンサポートの担い手 チャイルドボランティア 会員の家族(子ども・孫) / 近所の子ども 地域の人、地域の高齢者	介護保険事業、配食サービス事業による収益 会費 サロン参加費
人	モノ・資金
NPO 法人あかねグループ拠点内スペース「あかねサロン」 会員宅(ふれあいサロン会場に借り受け)	各地域包括支援センター(生活支援コーディネーター) 地域ケア会議 仙台市社会福祉協議会 町内会 児童館 小・中学校、高校、大学
場	情報・ネットワーク

名称	あかねサロン・ふれあいサロン	運営体制	会員92名。ケアマネージャー、ヘルパー、事務局、パート等の被雇用者が30名程。有償ボランティア(時給:520円)が40名程。配食のカーボランティアは1回850~1100円(ガソリン代)。
住所	宮城県仙台市若林区遠見塚1-5-35		あかねサロン: 配食やふれあいサロンのスタッフが兼務。
営業日時	あかねサロン:月~金 10:30-15:00 ふれあいサロン:月・金 10:30-15:00		ふれあいサロン: 1日あたり調理2人、指導員1人、責任者1人の4人体制。
開催場所	あかねサロン:事務所入居建物1F ふれあいサロン:個人宅		
運営団体	認定特定非営利活動法人 あかねグループ		
代表	理事長 清水福子		
開設・営業開始	事務所1階でのサロン事業 2001年3月 個人宅でのふれあいサロン 2009年5月		

美まもりやまカフェ

〔運営〕 新代田地区社会福祉協議会

地域の核となる小学校跡地「まもりやまテラス」で開催される行政・包括・社協の連携を背景にした、誰でも来られる居場所。

こんな居場所

- ▶ 地域の人なら誰もが知っている、地域の拠点
- ▶ 元小学校の校舎を活かした、おしゃれな空間
- ▶ 福祉作業所のお菓子でゆったりカフェタイム



多目的室(体育館)で
開催された
「美まもりやまカフェ」の
イベント。イベント終了後は、
子ども・若者もやって来て、
にぎわっていました。



福祉作業所
「まもりやま工房」の
皆さんが、カフェの利用者に
クッキー、コーヒーや
ドリップパックを
販売していました。



「まもりやまテラス」で行われている活動

・美まもりやまカフェ

- ・第3 木曜 13:00-15:00 開催。福祉作業所のコーヒーとクッキーが販売される。
- ・だれでも自由に参加できるカフェと運動のプログラム。

◀ その他の「まもりやまテラスの会」の部活動 ▶

・新代田 ONE TEAM

- ・世田谷区社会福祉協議会に登録しているボランティア「地区サポーター」の中で、新代田地区に協力する人達のチーム。

- ・「美まもりやまカフェ」のカフェスペース運営に協力したり、「ポッチャ体験会」等のイベントを企画。その他、地区で開催されるイベント、ボランティア活動等に取り組んでいる。

・まもりやまはたけ部

- ・旧小学校時代の畑で家族連れなど様々なメンバーで野菜づくりをしている。月2回程度、週末を中心に活動。

「美まもりやまカフェ」ができるまで

・歴史ある小学校が閉校に

「美まもりやまカフェ」の会場となっている旧守山小学校は、1932年(昭和7)創立され、親子三代にわたって通った住民もいる地域に愛される小学校でした。2016年(平成28)に守山小学校が東大原小学校と統合するのにあたって、守山小学校の「後利用」について、これまで小学校が担ってきた地域のコミュニティの拠点としての役割を継続することを基本に、PTAや町会、プレーパークで活動している人等、地域の住民と世田谷区によるワークショップ形式での検討が行われ、2019年4月に世田谷区立守山複合施設として再スタートしました。

・小学校跡地で地域の見守りを

2019年5月に、地域に見守りの場が必要だと考えた新代田地区社会福祉協議会(住民組織)が中心となり、「周辺住民が気軽に集い、多世代が交流できる場」として、施設内の交流ロビーを活用して「美まもりやまカフェ」を開始しました。

複合施設は、公募によって「まもりやまテラス」という愛称が決まり、新代田地区住民有志、小学校時代に学校で活動していたスポーツ団体、施設利用団体、複合施設内の団体(守山地区会館、守山保育園、まもりやま工房)、町会、社会福祉協議会等で「まもりやまテラスの会」を結成、施設の利活用・運営を行っています。「やってみたい」と思うことを提案し、施設を利用して定期的な活動を行うグループを認定・応援する「部活動創出プログラム」に取り組んでいます。

団体沿革

- 2019年(H31)4月 守山小学校跡地に「守山地区会館」「守山保育園」「まもりやま工房」からなる複合施設がオープン。
- 5月 複合施設の愛称が「まもりやまテラス」に決定。交流ロビーで「美まもりやまカフェ」がスタート。
- 2020年(R2)9月 「まもりやまテラスの会」正式発足。

■ 新代田地区の概要 ■

- ・住民人口：25,132人 15,245世帯
- ・高齢化率：21.8%(5,029人)
- ・15歳未満の子ども数：1,685人
※以上は2015年国勢調査より。
- ・公立小学校：2校

世田谷区北沢地域にあり、地区内を環状7号線道路が縦断しています。細い路地と坂道が多い住宅地で、私鉄3駅とバス路線が複数利用できる等、大変交通の便が良い地域です。地区内の子ども数は人口の7.3%で、世田谷区内平均より4.1%低いです。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

健康寿命をのびす

体操しながらみんなで見守り

・毎月第3木曜、まもりやまテラスのロビーで美まもりやまカフェが開かれます。高齢者だけでなく、夏休み中の小学生や幼児をつれた親子連れ等、誰でも参加できます。広々としたスペースではのびのびとラジオ

体操も行います。体操の後はコーヒーを飲んだりおしゃべりをして過ごします。

・当日の運営は地域福祉推進員や地区サポーターが行い、さりげなく見守りながら気になることがあればあんしんすこやかセンター（地域包括）にすぐに相談できます。

居場所 から 新しい事業やしぐみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

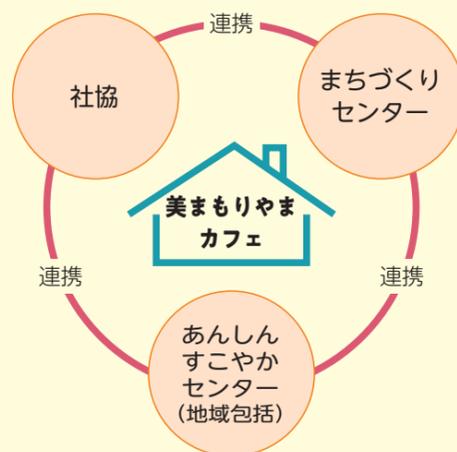
よるす情報相談

社協・行政・地域包括の三者で連携支援

・世田谷区では、社協、区の機関であるまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター（地域包括）の三者が連携して地域福祉に取り組む体制がとられています。

・美まもりやまカフェでも、社協が事務局となり、あんしんすこやかセンターは気になる高齢者の対応と利用の声かけ、まちづくりセンターは円滑な施設使用等、それぞれが連携して実施に当たっています。

・カフェで話される「夫の食が進まない…」等のつづやきも、この体制によってすぐに専門職につながり、保健師の食事指導に結びついたことがありました。



交流

福祉作業所と連携したカフェ運営で交流

・まもりやまテラスには、コーヒーやお菓子を製造販売している福祉作業所「まもりやま工房」が入居しています。この場所の活用を関係者で話し合う中で、カフェを連携して運営することになりました。

・福祉作業所では、対面による販売の場ができることで、顔見知りの人や活動の理解者が増えて、やりがいにつながっています。

・また、作業所に通う障害のある人がイベントに参加する光景も見られました。多様な人が一緒に活動する場になっています。



出番としごと

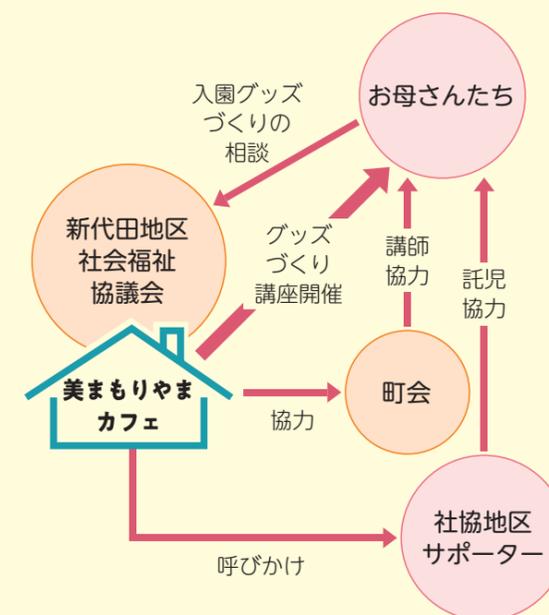
保育園グッズづくりで高齢者が大活躍

・地域のお母さんから、保育園に入園する際、布団カバー等をつくらなければならないが「ミシンもないし実家も遠い、どうしたらいいか」という相談がよせられました。

・そこで、まもりやまテラスの図工室を会場に、縫い物が得意な人を町会から講師として招き「ママさんワークショップ」を実施しました。社協は地区サポーターを調整して隣の教室で子どもを預かりました。

・参加したお母さんたちからは「集中して教えてもらえた」「久しぶりにミシンを使った」と、うれしい声をもらいました。

・終了後は、お母さんたち、子どもたち、地区サポーターのみんなで美まもりやまカフェを利用しました。



カギとなるアセット

町会役員／民生委員児童委員 社協地区サポーター／地域福祉推進員 生活支援コーディネーター 福祉作業所（通所者・スタッフ） 介護予防体操指導者 縫い物が得意な人 子育て中の人、子ども 地域の人、地域の高齢者	福祉作業所が販売するコーヒー、お菓子
人	モノ・資金
旧守山小学校「まもりやまテラス」の交流ロビー、多目的室（体育館）、図工室	まもりやまテラスの会 新代田まちづくりセンター 新代田あんしんすこやかセンター（地域包括） 世田谷区社会福祉協議会
場	情報・ネットワーク

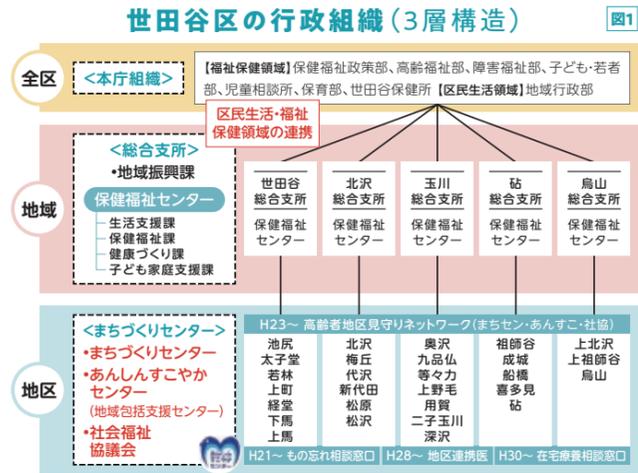
名称	美まもりやまカフェ	運営体制	「美まもりやまカフェ」の運営は新代田地区社会福祉協議会（住民組織）が主体となり、世田谷区社会福祉協議会新代田地区事務局が事務局を務める。当日の運営スタッフは新代田地区の地区サポーターや地域福祉推進員が担う。
住所	東京都世田谷区代田 6-21-5		
営業日時	第3木曜 13:00-15:00		
開催場所	まもりやまテラス 交流ロビー		
運営団体	新代田地区社会福祉協議会		
代表	会長 手嶋きみ子		
開設・営業開始	2019年5月		



世田谷区の三者連携の取り組み

特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所 秋山由美子

人口約92万人の世田谷区の行政組織は全区、地域、地区の3層構造になっています。(図1) 住民に一番身近な地区(人口約1万8千人~6万3千人とばらつきがあります)は28か所あり、行政のまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター(地域包括支援センター・社会福祉法人に委託)、社会福祉協議会の三者が同じ建物の中で一体的に活動しています。三者連携のモデル事業を開始した平成26年10月当時は三者の場所もバラバラでした。区民にわかりやすくするために、そして三者の情報共有を確実にするために、三者を同じ場所で一体整備し身近な地区での相談支援体制を充実させてきました。(図2)



世田谷区ではこの取り組みを地域包括ケアの地区展開として2つの柱を設けています。

一つは福祉の相談窓口の充実です。区民に身近な地区で福祉の困りごとなど、誰からでも、何でも相談を聞き、受け止め、一緒に考え、整理し、必要に応じて担当組織・専門機関等へ適切につなぎ支援に結び付けることです。

二つ目は参加と協働による地区(地域)づくり、地区の人材や社会資源の開発です。三者が連携して地区における福祉的な課題を把握・共有しその解決をめざします。

まちづくりセンターを活動の拠点として、地区での顔の見える関係を築き住民主体の福祉活動の調整や不足する社会資源の創出などを支援しています。あんしんすこやかセンターを中心に地区のネットワークづくりに取り組み、社協を中心に活動場所の確保やこれから活動したい団体への支援などに取り組んでいます。(図3)

こうした取り組みを行った背景は、地域のつながりや連帯感が希薄化していること、プライバシーを重視したライフスタイルが定着し、孤独死や虐待、消費者被害等の問題が増加する一因になっており、区民の日常生活の異変を速やかに相談機関や専門機関につなげるシステムをつくる必要がある、と平成26年3月に策定した世田谷区地域保健医療福祉総合計画で明確にされたことでした。

日々の区民の変化は行政だけでは察知することが困難であり隣近所同士の気づきが重要です。そしてその気づきをすぐに気軽に相談できる身近な場所が必要です。そのために区民が身近な地区で高齢者だけでなく、障害者、子育て家庭、生きづらさを抱えた若者、生活困窮者など対象を広く捉えて、保健福祉に関するすべての相談ができることが必要であり地区に福祉の相談窓口を開設しました。

また発見・把握された課題に対しては必要な公的サービスの提供とともに地域活動団体等の



三者一体化した「福祉の相談窓口」

連携・協働による新たなサービスを創出し、近隣住民の支援や見守りなどが包括的に提供されることが重要であり、地区における支え合いのしくみづくりを進める必要があります。支援の必要な人を早期に発見して、縦割りではなく、総合的に支援するしくみづくりを進めるためにも、三者のそれぞれの強みを活かす、地区における課題の発見・

把握から、相談支援、サービス提供、社会資源開発、情報発信等を行い、個別支援を通じた地域支援、コミュニティソーシャルワークの推進をめざしています。

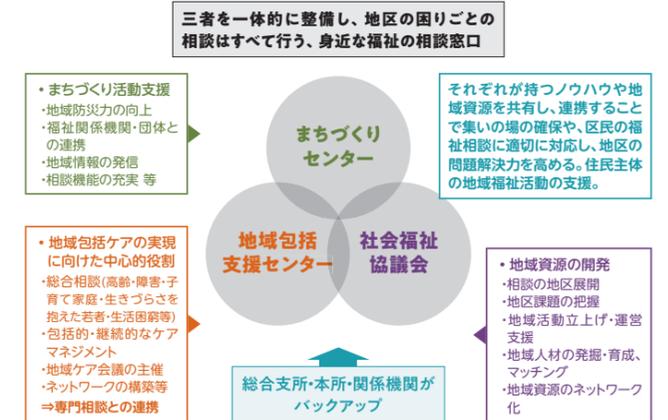
世田谷区は元々区民の福祉活動が盛んな地域でもあります。シニア層だけではなく学生も、働いている人も、幅広い層からの参加があり、地域支え合い活動としてのふれあいいきいきサロンやミニデイは700か所を超えていますし、地区サポーターへの登録者数も約1000人、会食の団体は約30団体あります。このほかにも配食サービスを始めとして活動している団体は多種多様であり、社会福祉協議会を中心に、三者が連携して区民が相互に支え合う居場所の確保や普及、活動の持続性など、立ち上げから日々の相談などの支援も行っています。

区民の思いを受け止め一緒に一歩を踏み出す支援や高齢のために活動を終了せざるを得ない団体と新たな団体をつなぐ試みも行われています。ご紹介した「美まもりやまカフェ」は地区でのこうした三者連携の取り組みから生まれた活動の一つです。

世田谷区ではこのほか、地域ケア会議を地区、地域、全区の3層で実施し、個別の困りごとから地区全体の困りごとを把握し、地域での課題解決に取り組むとともに地域では解決できない課題を全区で情報を共有し課題解決に向けた取り組みを行うシステムがあります。これまでも「精神疾患等への理解」、「身元保証人が立てられない方の入院・入所について」「8050問題(ひきこもり)」等を全区的な課題ととらえ、検討を行い課題解決に向けた報告書や手引き書を作成し新たな施策の立案や実行につなげてきました。

これからも福祉活動や居場所など区民の身近な情報をきめ細かく発信し、顔の見える関係を大切に、ネットワークづくりなどを進めている三者連携を活かし、住み慣れたまちで最期まで安心して暮らせるまちづくりの取り組みに期待しています。

身近な地区における相談体制の充実



ユニバーサルステーション

[運営] 子ども村：中高生ホットステーション

子どもの生活全般を支援する環境づくりを、
多世代の交流によりさらに発展させた居場所。



こんな居場所

- ▶元デイホームを居抜きで活用
- ▶子どもと高齢者が時間と空間を共有
- ▶活動日には、いつでも寄れる常設型居場所

子どもが
楽しむゲームを
高齢者ものぞきこんで
一緒に楽しめる、
スマートフォンの
使い方も聞ける、
そんな空間でした。



子どもたちの
賑やかな声の中、
ひとりでのんびりと
窓辺で過ごす高齢者も
いらっしゃいました。



現在の活動

- (1) 地域食堂**
 - ・定食 (200 円)、1 日 20 ~ 30 食程度。
- (2) ユニバーサルステーション**
 - ・地域の多世代の居場所
 - ・月・水・金曜 10:30-15:30
 - ・カフェ、食事の提供。
 - ・囲碁、書道、楽器演奏等、様々な文化活動。
 - ・バジルの袋づめ。
- (3) 不登校の子どもの支援**
 - ・不登校の子どもの自宅へ、大学生ボランティアが訪問。
- (4) 会場の貸出**
 - ・場所貸し有料は社協「粋・活きサロン」のみ、その他は無料。
 - ・火・木曜「粋・活きサロン」高齢者の健康麻雀
 - ・2ヶ月1回土曜夜 男性介護者の「おやじの会」
 - ・「そらいろ」(都立高校入試支援)の学習支援
 - ・第1土曜 オレンジカフェ「青空テラス」
 - ・第2土曜 ボードゲーム
 - ・第4土曜「引きこもりの会」当事者が運営。



子ども村：中高生ホットステーションに「ユニバーサルステーション」ができるまで

・学習支援だけでは解決できない、生活全般の支援が必要

2011年(平成23)、荒川区は「子どもの貧困」を地域課題に掲げ、翌年には区主導で「学びサポート」という無料学習支援が始まりました。現代表の大村みさ子さんは当初からこの活動に関わっていました。

学習支援に取り組む中で「学習だけでは足りない、生活全般の支援や学びサポートに来られない子どもたちにも支援が必要」と実感。「勉強する以前の意識づくりの場をつくりたい」と社協に相談に行き、伴走支援を受けることになりました。

会場探しや資金調達、協力者やスタッフの呼びかけ等、様々な支援を社協から受け、相談から1年足らずの2014年(平成26)に居場所をオープンしました。

・多世代で交流する良さを実感

大村さんらが始めたのは、毎週木曜の夜、食事をしながら話や宿題をする居場所です。ここに来ない日も連絡をとり寄り添いました。血縁関係のない人と家族のような関係ができ、それを「ソーシャルファミリー」と名付けました。

週1回の活動のほかにも、多種多様な分野で活躍する大人と出会う機会づくりや様々な体験をする活動を行いました。ある時、介護職をめざす女子高校生が、高齢者デイサービス施設で職場体験をした時のことです。反抗的な態度をとる年頃の彼女が、体験から戻ってくると「おばあちゃんに歌を覚えてもらった」「玉子焼きをつくった」といきいきと話をはじめました。自分を活かせる場の存在が肯定感や自主性をこんなに高めるのかと感じ、多世代交流の効果を認識したできごとでした。

・引っ越しをきっかけに、ユニバーサルステーション部門をスタート

助成金を得ることができたのを機に、元デイサービス施設の物件が入居者募集している情報を得ました。見に行くと都電の駅の目の前で、人が集まりやすい場所です。

2020年(令和2)に居抜きで引越し、小学生から高齢者までの様々な人が集う「ユニバーサルステーション」の活動が始まりました。不登校の子どもの真ん中にした、学校でも家庭でもない第3の日常の居場所として、多世代の関わりができる場になっています。

■ ユニバーサルステーション周辺地区の概要 ■

※拠点から半径500mの範囲

- ・住民人口：19,037人 9,506世帯
 - ・高齢化率：27.1% (5,162人)
 - ・15歳未満の子どもの数：1,709人
- ※以上は2015年国勢調査より。

東京23区の東北部にある荒川区は東西に長くユニバーサルステーション周辺地区はそのほぼ中心に位置します。入居する建物は路面電車、都電荒川線の沿線にあり、都電が荒川地域と町屋地域の境界線になっていて、喫茶店などの商店が並びます。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所では ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

交流 多世代の関わりが自然に生まれる居場所

- ユニバーサルステーションは月・水・金の週3回、10時30分から15時30分の間、開かれています。不登校の子ども、高齢者や障害がある人、不登校の子どもを持つ保護者などが参加しています。
- その日あつまるメンバーによって書道が始まったり手芸をしたり、「一緒にやってみる」中から関わりが自然に生まれます。
- 子どものために紙芝居を見せたいという高齢者と紙芝居を見る子ども、それぞれに役割があり、子どもにも大人にも心地よい場の共有ができています。

居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

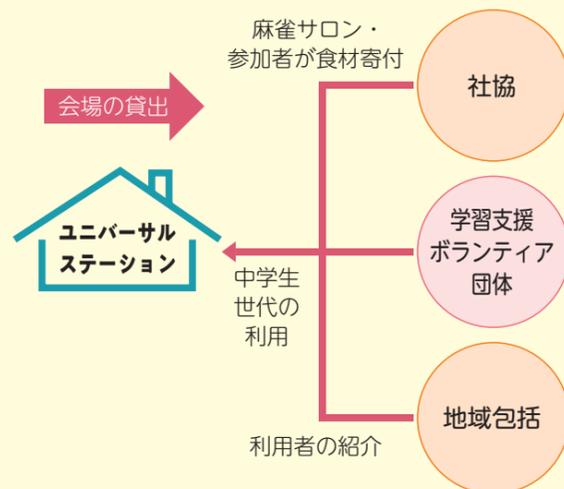
地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

よるす情報相談 子どもから高齢者まで相談に応じる

- プライバシーに配慮して相談の対応は火曜日に決めています。不登校や障害児の移動支援をどうするかといった子どもの生活相談から、介護、DV、離婚など大人の相談事も多いです。
- 不登校児の学習支援に長く関わってきた代表の大村さんや、地域福祉の専門職として働いていた元社協職員のスタッフが相談に応じています。生活保護を受けるため、窓口まで一緒に行ったこともありました。
- 専門機関とのネットワークもあり、必要があればいつでも相談をつないでいます。

地域づくり 場所貸しから生まれる応援者

- 社協サロンの健康麻雀として週2日活用、各曜日20人くらいの参加があります。麻雀をきっかけに子どもの支援に関心を持ち、寄付の食材を持ってきてくれる等の応援者が増えています。
- 高校受験の学習支援をするボランティアグループも、ここを活用しています。この活動があることで、高校受験の子どもたちが集まるようになりました。
- 「地域包括支援センター」が認知症カフェを開催する時にも、この場所を活用しています。この場所の雰囲気を知ってもらうことで、若年性認知症の人や一人暮らしの人を紹介しやすくなっています。



出番としごと 農との連携で、おこづかいかせぎ

- 荒川区出身で、足立区で青果卸業を営む人が、生まれ育った地に役立ちたいと、ボランティアを申し出ました。
- ユニバーサルステーションでは、ちょうど助成金に頼らない資金づくりを検討していたところで、バジルの袋詰め作業を請け負うことになりました。
- 農家から届いたバジルをレストラン等に出荷できるよう袋づめする作業を、週2日午前中に実施しています。作業の対価として、ひきこもり当事者や若年性認知症の人には500円、子どもにも3回でクオカード500円、高齢者には昼食券が配られています。休まず作業に参加する人もおり、やりがいを生み出しています。



カギとなるアセット

<p>元社協職員 学習支援ボランティア 大学生（引きこもりの子ども支援） 地元出身の青果卸業者（バジルの袋づめ発注） 地域の人、地域の高齢者、地域の子ども 若年性認知症の人、一人暮らしの人 不登校・引きこもりの子ども</p> <p style="text-align: right;">人</p>	<p>運営助成金（福祉医療機構） バジルの袋づめ工賃</p> <p style="text-align: right;">モノ・資金</p>
<p>子ども村：中学生ホッとステーション・ユニバーサルステーション (元デイサービス事業所)</p> <p style="text-align: right;">場</p>	<p>あらかわ子ども応援ネットワーク 荒川区社会福祉協議会 町屋地域包括支援センター 荒川地域包括支援センター 町屋高齢者みまもりステーション 東京都立大学</p> <p style="text-align: right;">情報・ネットワーク</p>

名称	ユニバーサルステーション	運営団体	子ども村：中学生ホッとステーション
住所	東京都荒川区町屋2-21-2 フレスコ町屋201	代表	大村みさ子
営業日時	月・水・金 10:30 - 15:30	開設・営業開始	2020年7月
開催場所	子ども村：中学生ホッとステーション	運営体制	メインスタッフ4人。ボランティア登録は約30人（学生から高齢者まで幅広くいる）。

ほっとさこんやま

[運営] 特定非営利活動法人オールさこんやま

郊外大規模団地の課題解決を行政・URと連携して取り組む、
地縁型 NPO 運営の多世代交流拠点。

こんな居場所

- ▶ショッピングセンター内、立地条件は抜群
- ▶食事やビールがあり、入りやすいカフェ
- ▶多目的トイレとおむつ交換スペース完備



大学生入居事業で
団地内に暮らす大学生が、
ショッピングモールで
カレーの屋台を
出していました。



2階は
小さい子どもが
安心して遊べる
ソフトマットが敷かれ、
ミーティングスペースと
大人が楽しむ
カラオケ設備が
あります。

現在の活動

- コミュニティカフェ「ほっとさこんやま」**
 - ・コーヒー (250円)、トーストセット (400円) や定食、ビール等を提供。
 - ・スモールビジネスへのレンタルBOXを実施。
- 子どもの居場所「日曜ほっと」**
 - ・月1回 第3日曜午後(2時間)開催。
 - ・ボランティアがコマ回し等の昔遊びを教えている。
- 地区社会福祉協議会の「社協ケアシステム」加入受付窓口**
- 子どもの学習支援「さくら教室」**
 - ・毎週水曜 午後3時から小学生、土曜は中学生を、ボランティアが学習支援している。
- (5) 子育てプレイルーム**
 - ・乳幼児と母親が親子で来れる居場所を開催。
- (6) レンタルスペース**
 - ・住民によるカラオケ等に貸し出している (1時間 1000円)。
- (7) 左近山「おでかけワゴン」**
 - ・毎週木曜に運行する移動支援。
- (8) 大学生入居事業と「サコラボ」**
 - ・横浜国立大学大学生3名が団地に入居し、非入居の3名と一緒に左近山地区のまちづくりに参画している。
- (9) 人材バンク「ちょこっと応援隊」**
 - ・ちょっとした困りごとを手伝う人材育成。

「ほっとさこんやま」が多世代交流拠点になるまで

- 大規模開発ベッドタウンの課題解決に、コンサルタント派遣を受けたのが始まり

横浜市旭区の左近山団地は昭和40年代に日本住宅公団(現:UR都市機構)によって開発されました。丘陵地のみどりに囲まれた横浜のベッドタウンとして、当初はファミリー世帯を中心に約5300戸が入居し、1970年(昭和45)には左近山連合自治会が結成されて賑わいました。

しかし次第に人口減少と高齢化が進み、特に旭区は横浜市内でも高齢化が高く高齢者数が多いことが課題でした。左近山連合自治会は、2011年度(平成23)から3年間「高齢者と地域のつながりづくり事業」(旭区高齢障害支援課「高齢者の居場所づくり支援事業」)のコンサルタント派遣を受けることになりました。

- 居場所を開設のため、NPO 設立

理事長	左近山連合自治会 会長
理事	地区社会福祉協議会 会長
理事	管理組合協議会 会長
理事	老人クラブ連合会 会長
理事	民生委員児童委員協議会 会長
理事	単位自治会 会長
理事	商店街連合会 会長
副理事長	左近山中央診療所 院長

勉強会で居場所づくりの検討を重ね、左近山団地ショッピングセンター内の空き店舗でコミュニティカフェを開くことになりました。運営主体として、自治会や地縁団体役職者からなる「NPO 法人オールさこんやま」を立ち上げることが決まりました。(メンバーは表を参照)。

2013年(平成25)、左近山連合会自治会からの寄付や行政の補助金を活用し、コミュニティカフェ「ほっとさこんやま」がオープンしました。

- 子どもや大学生が参加する、多世代交流の居場所へ

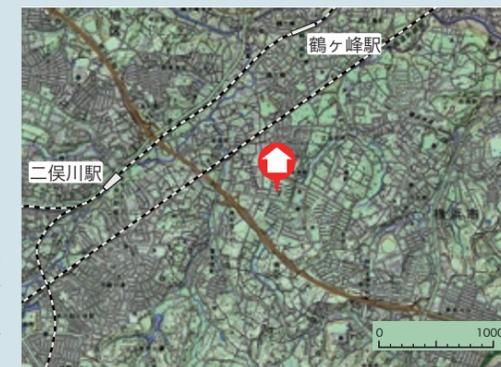
居場所を利用するのは高齢者が中心でしたが、「子どもも集まる場所にできないか」との意見が出て、2016年(平成28)子どもの居場所「日曜ほっと」がスタート。小学校の「おやじの会」にいた40代男性が積極的に関わるなど、スタッフの輪が広がりました。

また、横浜国立大学の学生(団地に入居、非入居あわせて6~7人)が、家賃補助を受ける代わりにイベント開催やコミュニティカフェの手伝いをするなど、多世代交流が進んでいます。

左近山地区の概要

- ・住民人口:約8,300人
(賃貸住宅:2,102戸、分譲住宅2,665戸)
- ・高齢化率:47.0%(男性41.3%、女性52.3%)
- ・交通:私鉄駅からバスで約20分(6~13本/時間)
- ・周辺施設:左近山小学校(生徒数639人)
※以上は団体提供資料より。

横浜市旭区にあるベッドタウン。高齢化が進む一方で、要介護率は旭区の中で比較的low、高齢者が元気な地域です。周辺に3校あった市立小学校は2013年に統合し、左近山小学校になりました。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域都市化が
進んだ地域その他の
市街地及び
郊外農山村
地域高齢化が
進んだ地域新住民が
多い地域長く住んで
いる人が
多い地域人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター社会福祉
協議会生活支援
コーディネーター中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

健康寿命をのばす

自治会役員や民生委員児童委員で見守り

・店の前には定食メニュー看板やのぼりが立ち、誰でも気軽に入りやすい雰囲気のカフェです。調理や接客を行うスタッフは、自治会の役員や民生委員児童委員等も多く、お客として訪れた住民の小さな変化に気づき、必要に応じて共有する体制がとられています。

・これまで服装に気をつけていた人が急に無頓着になる様子が、特に男性に見られることがあります。さりげなく見守り、気になることがあれば、福祉と保健の拠点「地域ケアプラザ」や家族につないでいます。カフェで地域ケア会議を開くこともあります。

居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

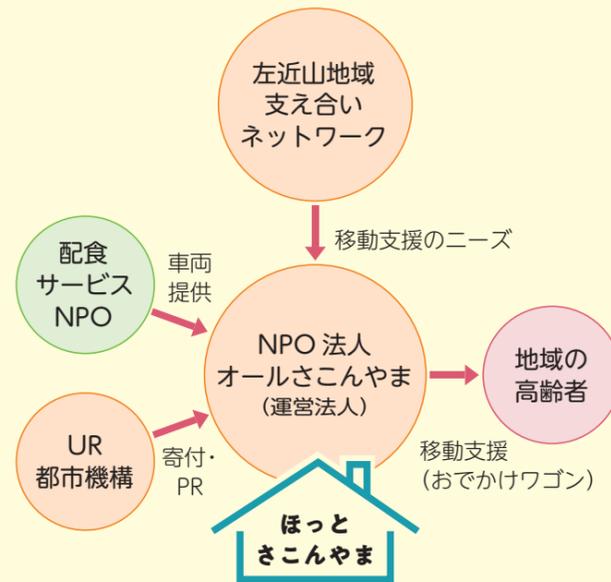
地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

日常生活支援

買い物や通院の移動支援

「おでかけワゴン」

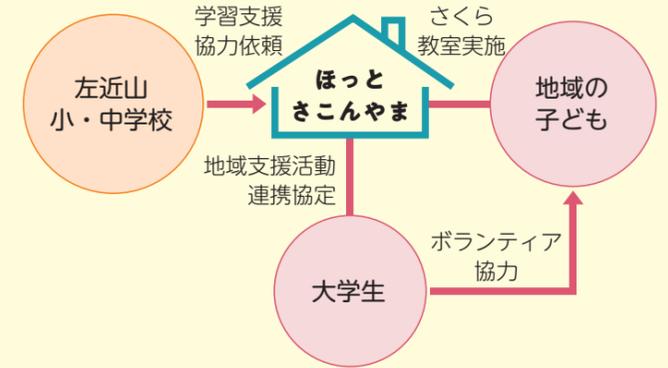
- ・左近山地域の課題を話し合う「地域支え合いネットワーク」は、NPO 法人オールさこんやま、小中学校、地域ケアプラザ、UR 都市機構などの地域団体等が参加しています。
- ・この場で移動支援のニーズが議題にあがり、実施に向けて検討がすすめられました。
- ・配食サービスを行っていたNPO からワゴン車を譲り受け、「NPO 法人オールさこんやま」が移動サービス事業「おでかけワゴン」を始めることになりました。
- ・UR 都市機構は、バスにシール広告を出したり、バス停に立てる旗を寄付しました。
- ・ボランティアの方々が運転や添乗を担っています。
- ・現在、毎週木曜の10時から14時の間、団地周辺を1時間おきに運行し、買い物や通院等、日常の移動を支援しています。



交流

小中学生の学習支援 「さくら教室」

- ・左近山中学校がアンケートを実施したところ、「家で毎日勉強する」と回答した生徒は全体の半数でした。その結果を危惧した学校長が、安定して学習できる場づくりへの協力をNPO 法人オールさこんやまに求めました。
- ・神奈川大学の大学生が学習支援のボランティアとなり、ほっとさこんやま2階の多目的ルームで「さくら教室」が始まりました。



交流

多世代交流「日曜ほっと」

- ・UR主催のワークショップで参加者から「団地内に子どもも集える場所が欲しい」「昔遊びで交流したい」という意見が出て、NPO 法人オールさこんやまに相談を持ちかけられました。場の利用について検討を重ねら

れ、活動内容やルールが決まり、日曜ほっとの活動が始まりました。
・オセロやコマ回しなどの昔の遊びが中心の、世代をこえて交流する場になりました。小学校もチラシ配布に協力しています。

カギとなるアセット

自治会役員／民生委員児童委員
運転ボランティア
大学生（横浜国立大学、神奈川大学）
UR 都市機構担当者
地域の人、地域の高齢者
カフェに来た様子が気になる人
地域の子ども、保護者
小・中学校の先生、児童、生徒
カフェのお客

人

コミュニティカフェ収益
レンタルスペース収益
ワゴン車
(配食サービスを廃止したNPO から譲渡)

モノ・資金

左近山ショッピングセンター内店舗
・1F コミュニティカフェほっとさこんやま
・2F 多目的スペース、レンタルスペース

場

左近山連合自治会、地区社協、管理組合、老人クラブ、民生委員児童委員協議会、商店街連合会、診療所
地域支え合いネットワーク [NPO 法人オールさこんやま、左近山小中学校、左近山地域ケアプラザ (地域包括)]
旭区社会福祉協議会、地域ケア会議
横浜市旭区政推進課 / UR 都市機構
横浜国立大学

情報・ネットワーク

名称	ほっとさこんやま	運営団体	特定非営利活動法人オールさこんやま
住所	横浜市旭区左近山 1-31-101 (左近山団地左近山ショッピングセンター内)	代表	理事長 林重克
営業日時	月～土 10:00-17:00	開設・営業開始	2014年4月
開催場所	UR 都市機構管理店舗 コミュニティカフェ 1F 多目的ルーム、レンタルスペース 2F	運営体制	コミュニティカフェ [有償ボランティア約15名(交通費程度)、無償ボランティア(理事等)] 日曜ほっと (ボランティア15名、担当理事数名)



「カフェ型中間支援機能」について： 横浜市での取り組み

産業能率大学経営学部 中島智人

横浜市では、コミュニティカフェが持つ「中間支援機能」に注目した取り組みがなされています。市内のコミュニティカフェ事業者らでつくる「横浜コミュニティカフェネットワーク(YCCN)」(代表 齋藤保さん)が、横浜市市民活動支援センター自主事業として、2015年度から2017年度までの3年間、「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及」事業を実施しました。この事業では、市内の事例からコミュニティカフェが中間支援機能を持つことの意義やその機能・役割、必要な力量を整理し、コミュニティカフェの中間支援機能を支援したり、ほかの中間支援組織との連携を考えたりすることを目的にしており、フォーラムの開催や報告書の作成を通して、その成果の共有にも努めていました。私は、横浜市市民協働推進委員会の委員として、横浜市市民局との協働事業として位置づけられるこの事業に関わっていた立場から事業の概要を紹介したいと思います。

この事業では、「コミュニティカフェ」を、

- ・ 目的なく、誰でも利用できる
- ・ 飲食や物販、スペース貸など金銭のやりとりが可能である
- ・ 地域と社会につながる機会が用意されている

という3つの要件をすべて満たしている場と定義しています。この定義は、事業に参加したメンバーの議論から導き出されたものであり、これについてメンバーの一人でもある名和田是彦さん(法政大学法学部教授)が、議論の結果として、「コミュニティカフェとは、「公開性」「社会性」「常設性」「事業性」を有する交流拠点である」と整理しています。「公開性」とは、「特定の目的を持っていなくても気軽に寄れる場として誰でも利用できる」というものです。「社会性」とは、「地域と社会につながる機会が用意されていること」であり、「公開性」と「社会性」とを合わせ持つことにより、コミュニティカフェが「特定の公益的活動をすでにしている人や使命感・問題意識を持っている人たちだけではなく、どんな人でも寄ってこれる雰囲気でありながら、その人たちを地域課題の認識や解決に自然にいざなっている」とし、それが魅力であると説明しています。

コミュニティカフェによる「カフェ型中間支援機能」は、最終的には次のように整理されています。

- ・ 持ち込める力
- ・ 関われる力
- ・ 情報を提供する力
- ・ つなげる・引き合わせる力
- ・ 地域づくりの対話を生み、社会に発信する力

これらのうち「持ち込める力」「関われる力」は、地域の個人がカフェに相談したりカフェの活動に関わったりするのを促すような支援的な力です。「情報を提供する力」は、広く地域内の情報を伝えることにより、地域内での人の循環を促すことです。「つなげる・引き合わせる力」は、人や団体を引き合わせることであり、情報提供と合わせてネットワークをつくる力と言えるでしょう。「地域づくりの対話を生み、社会に発信する力」は、地域内の人たちの対話というヨコのネットワークを土台とし、それを「官民に提言する」という政策提言なども視野にいれたタテのネットワークにもつなげることを意図しています。

このような中間支援機能をコミュニティカフェが果たすにあたって、先ほどの定義にあった「常設性」と「事業性」とが重要な意味を持つこととなります。地域の人たちがいろいろな課題を持ち込んだり、あるいはほかの人たちとつながったりするためには、常にカフェが開いていて、またそこに来る地域の人たちを支援するカフェのスタッフが重要となります。また、誰でも自由に利用できる常設のカフェは、一般的なカフェの儲けのしくみ「客単価×客数(または、回転数)」という視点からは、まったく事業性のないものです。そこで、事業としてカフェを維持するしくみを考える必要があります。

横浜市では、地域住民が集い、住民が抱える課題の解決に役立つような中間支援機能を持つような様々な施設が整備されてきました。市内各区(全18区)には、市民活動支援センター(区版センター)があります。また、地域センターやコミュニティハウス、横浜市独自の取り組みである地域の福祉・医療の拠点である地域ケアプラザ、あるいは、地域子育て支援拠点、老人福祉センター、障害者地域活動ホーム等、テーマごとの支援拠点もそれぞれの区内の各地に開設されています。さらに、概ね連合自治会・町内会を単位に市内全域で256の地区社会福祉協議会が組織され、地域住民が主体となった地域課題の解決に取り組んでいます。このように、地域ごと、テーマごとに様々な拠点や組織が整備され中間支援機能が充実しているような横浜市で、あえて民間のコミュニティカフェによる「カフェ型中間支援機能」が注目されていることが興味深く思います。横浜市では、2000年代半ばから、多様なかたちのコミュニティカフェが、様々な地域で発展してきました。地域にあって、様々な中間支援機能を提供する既存のしくみにはないコミュニティカフェの魅力と可能性に、事業者や地域住民だけではなく、行政や既存の施設・組織も気づいたのではないのでしょうか。今後、それぞれの特徴や強みを活かしたコミュニティカフェと既存の中間支援機能を持つ施設との連携が進むことが期待されます。

参考文献

横浜市コミュニティカフェネットワーク(2018)『カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及 横浜市市民活動支援センター自主事業報告書』
https://yokohama-ccn.jimdofree.com/app/download/13009287290/2017YCCNreport_web.pdf

横浜コミュニティカフェネットワーク・横浜市市民局(2018)『カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及 啓発冊子』
https://yokohama-ccn.jimdofree.com/app/download/12885029290/2017_啓発冊子_web.pdf

常設型地域の茶の間 **実家の茶の間・紫竹**

[運営] 任意団体 実家の茶の間・新潟市(協働運営)

居場所の中だけでなく地域のご近所の人同士が「助けて」と言いあえる、全市のモデルとなる地域の茶の間。



こんな居場所

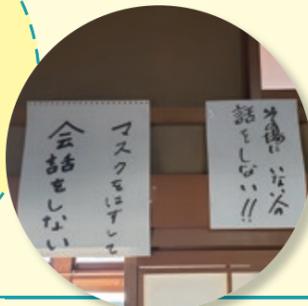
- ▶ 築約 50 年の木造 2 階の一戸建て
- ▶ 縁側からも出入り。まるで実家の茶の間
- ▶ 好きなところに座り、過ごし方は自由



地域の人の手仕事による修繕跡が、廊下や床のあちこちにあり、ぬくもりが伝わってきました。



なげし らんま
長押や欄間に貼りめぐらされた「みんなが居心地よく過ごすためのルール」が目飛び込みます。



現在の活動

(1) 居場所「実家の茶の間・紫竹」

- ・毎週月・水曜 10:00 - 16:00 (祝祭日も開催)
- ・参加費 300 円 (お茶・茶菓代)、お昼ご飯代別途 300 円、中学生以下無料
- ・賛助会費年 2,000 円 (任意)
- ・介護福祉士による介護相談 (随時)
- ・保健師・看護師による健康相談 (毎月第 3 月曜)
- ・作業療法士による日頃の生活の困りごとなどに関する相談 (毎月第 2 水曜)

(2) 助け合いの事務局

- ・「徒歩 15 分の範囲でのお手伝い」 1 回 500 円を仲介

(3) 実習・研修の受け入れ

- ・支え合いのしくみづくり支援員 (生活支援コーディネーター) 向け研修の実施。
- ・介護労働安定センター、シニアカレッジ新潟、茶の間の学校、市町村社会福祉協議会、コミュニティ協議会、民生委員児童委員、大学研究者、卒論作成者等、様々な実習の受け入れ。

(4) 会場提供

- ・活動日を除き、地域の自治会、老人クラブ、子ども会、地域団体、地域包括ケア会議に会場提供。



「実家の茶の間・紫竹」ができるまで

・養父母の介護で単身新潟へ、住民参加型在宅福祉サービス活動スタート

1989 年 (平成元)、任意団体「実家の茶の間」の代表の河田瑛子さんは大阪で特別養護老人ホームに勤務していましたが、認知症の養父母の介護に当たるために仕事を辞め単身新潟に戻りました。河田さん自身も持病を抱えながらの介護で、「助けてください」という思いで、1990 年 (平成 2)、有償会員制の助け合いのしくみ「まごころヘルプ」を立ち上げました。第 1 号の利用者として 9 人に助けられて、養父母を最後まで看取ることができました。

・居場所のイメージが見えてきた

まごころヘルプで真冬に訪問した寝たきりの高齢者から「ストーブは点けないでくれ」と言われたことがありました。家族が不在の間は布団に入っていれば暖房費がかからず迷惑をかけないというのです。これでは体力が低下して寝たきりになってしまう、出かける場が必要だと考えました。

一方、「まごころヘルプ」の事務所は助ける人・助けられる人みんなの居場所になっていました。さりげなくお互いに助け合う姿を見るうちに、人は知り合ってお互いの不自由さを知るから手助けし合うのだと気がつきました。そんな居場所を自分事として自分が暮らす地域に創りたいと、1997 年 (平成 9) 自宅近くの山ニツ会館で「山ニツの茶の間」を始めたところ、「新潟市に『地域の茶の間』ができた」と新聞に掲載されました。個人の茶の間では「あの人が好き。あの人が嫌い。」がありますが、それは言わない社会性のある居場所を表す言葉として「地域の茶の間」は、とてもいい呼び方だと河田さんは感じました。

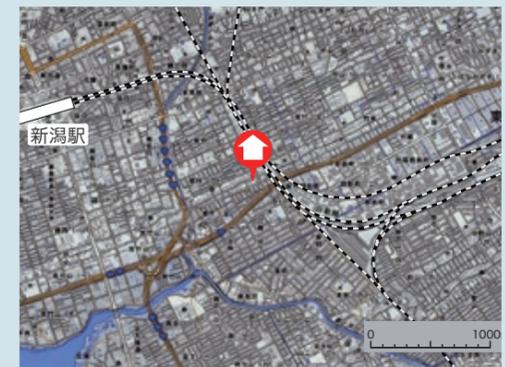
・新潟市からの依頼で、常設型「地域の茶の間」モデル事業にとりかかる

2014 年 (平成 26)、新潟市は「地域包括ケア構築元年」と位置づけ、河田さんにアドバイザーを依頼し、住民相互の助け合いのしくみづくりを推進する拠点として「地域の茶の間」を支援することになりました。こうして新潟市と任意団体「実家の茶の間」の協働事業がスタート、地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」がオープンしました。

■ 紫竹地区の概要 ■

- ・住民人口：6,649 人 3,079 世帯
- ・高齢化率：23.7% (1,554 人)
- ・15 歳未満の子どもの数：778 人
※以上は 2015 年国勢調査より。
- ・周辺施設：小学校 3 校、中学校 3 校

新潟市東区の最も西側 (東区紫竹 2 丁目～7 丁目) と中央区の一部 (新潟市が政令指定都市になる以前は紫竹 1 丁目だった場所) にかかり、3 つの小学区に分かれる複雑な地域です。新潟駅からは約 1 km と近く、交通の便がいいので、市外からの転入もあります。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール 3 D)

地域の特徴

人口集中と都市化の進んだ地域

都市化が進んだ地域

その他の市街地及び郊外

農山村地域

高齢化が進んだ地域

新住民が多い地域

長く住んでいる人が多い地域

人が減っている地域

自治体

地域包括支援センター

社会福祉協議会

生活支援コーディネーター

中間支援 NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁団体

NPO 法人

社会福祉法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

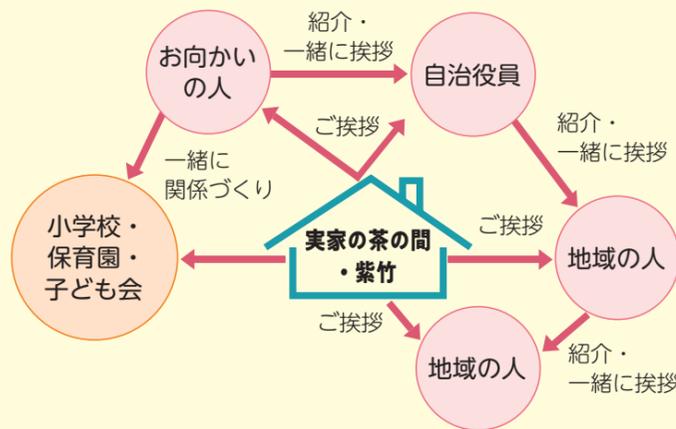
「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

- 交流** **人が来やすく、居やすくするための工夫**
- ・玄関の戸は、居場所が開いている時はいつでも開いています。「子どもでも高齢者でも、どなたでもどうぞお入りください」の意思表示です。
 - ・初めての人を席に案内する時は、できるだけ部屋が見渡せる場所に案内します。それぞれ居たいようにいる様子が目に入ること、なんとなく落ち着きます。
- 「あの人誰という目をしない」「その場にいる人の話もしない」等、誰もが居心地よく過ごすための約束事を壁に貼っています。直接口頭で注意されると感情的になるところを、ホラホラとチラシを指させばいいように工夫しています。
- ・昼食とラジオ体操は時間が決まっていますが、それ以外のプログラムはほとんどなく、思い思いに過ごせます。

居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

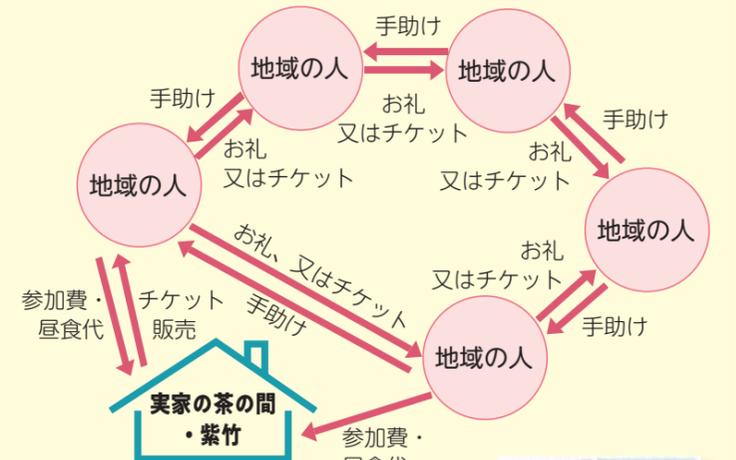
- 地域づくり** 「居場所づくり」は、地域との「関係づくり」から始める
- ・まず、居場所のお向かいやお隣に挨拶に行き、「自治会長のお家はどこですか」とききました。自治会長の家まで一緒に行ってもらい、案内された先でも、次に挨拶したい地域の人（老人クラブの役員や民生委員児童委員等）の家をたずね、次々に案内してもらい、地域の人と一緒に挨拶して回りました。
 - ・地域との関係づくりは、地域の人と一緒にこなうことで、つながりが「面」で広がるのが期待できます。最初に挨拶をした向かいの家の女性には、自治会、学校、保育園、子ども会等の窓口役を頼み、今では「実家の茶の間・紫竹」のスーパー・コーディネーターです。鍵の管理も担当し、月・水以外の曜日には、地域の団体への会場提供もおこなっています。
 - ・地域の住民が動くことで、居場所は本当に住民に愛される「地域の宝」になっていきます。
 - ・市からもらった設立時の準備金は、障子、ふすま、古い畳に敷くござを半分、掃除機、電気釜2個で無くなりました。そのことを「ラッキー」だと考え、必要な物は人から貰ったり、借りたりし、そして、そのことを居場所への参加と考えました。スプーン、食器、座布団等々、すべて寄付で揃い、思いがけないほど心をつないでいます。
 - ・駐車場は自分達で借りる必要があったので、賛助会員から用途を駐車場借り上げ費に限定してもらっている年会費（2000円）で75人から支えられています。



日常生活支援

住民相互の助け合いのしくみづくりにチケットを活かす (参加回数券・実家の手)

- ・居場所で「手伝って」と頼める関係が出来るようになった頃、いよいよ、居場所に来ることができない人も手助けを頼めるしくみを始めました。居場所で電話相談を受け、最初の1回だけ、助けて欲しい人と助けてくれる人を仲介します。
- ・犬の散歩や一緒に墓参りに行って欲しいといったちょっとしたことを助けてもらった人は、助けてくれた人に謝礼として1回500円程度を渡します。2回目以降は直接連絡を取りあうことで、仲介のいらぬ助け合いをめざしています。
- ・現金より使いやすいツールとして、居場所の参加回数券を兼ねたチケット1,500円（チケット6枚綴り）があります。助けてもらった人は、チケット1枚、2枚でお礼をすることができます。チケットは1枚（250円分）で参加費（300円）に充てることができます。もらったチケットは回数券として使用することも、助けてもらいたい時にお礼として使用することもできます。



チケットは、実家の茶の間への参加費としてだけでなく、ちょっとした手助けのお礼に使われています



カギとなるアセット

居場所の向かいや隣に住む人 自治会役員 老人クラブ役員 民生委員児童委員 支え合いのしくみづくり推進員 (生活支援コーディネーター) 地域の人、地域の高齢者 小学校の先生、児童 賛助委員	新潟市基幹型地域包括ケア推進モデルハウス協働事業収入 (家賃、水道光熱費、電話代) エアコン、ストーブ、食器類等物品寄付 寄付金 参加費 食材寄付 賛助会員会費
人	モノ・資金
実家の茶の間・紫竹 (元取り壊し寸前の空き家) 駐車場 (4台分)	支え合いのしくみづくり会議 (第1層協議体) 東区社会福祉協議会 新潟市 自治会 老人クラブ 子ども会 公民館
場	情報・ネットワーク

名称	常設型地域の茶の間「実家の茶の間・紫竹」	開設・営業開始	2014年10月
住所	新潟県新潟市東区紫竹 4-21-62	運営体制	登録ボランティア40名程。1日の当番は2名体制。ベテラン当番と新人当番の組み合わせ。
営業日時	月・水 10:00-16:00 (祝祭日も開催)		
運営	任意団体『実家の茶の間』と新潟市の協働事業		

常設型地域の茶の間にしかんの茶の間

[運営] ボランティア団体 Rera

魅力的な食があり、
助け合いが循環する「安心」を育む地域の居場所。



こんな居場所

- ▶お寺の隣。立派な梁がある落ち着いた民家
- ▶ひとりで食べるよりちゃぶ台を囲んで
- ▶2階は「お互いさま・新潟」の事務所



壁には地域の
習字の達人の文字が
ありました。
『『あの人だれ?』
という目をしない』
「食べる時は
しゃべらない」



玄関には、
94歳の方が自宅で作った
可愛い小鳥達が、
たくさん並んでいました。
2羽 150円
だそうです。

現在の活動

(1) 居場所運営

- ・週2回、月・木曜 10:00-15:00 開催。
利用料が200円でコーヒー・お茶付き。昼食代300円。
- ・毎月第3木曜にその月生まれの人のお誕生会を実施。
- ・毎月第3月曜はカレーの日（50人程に利用者が増える）。※コロナ前

(2) 支え合いの情報センター

- ・茶の間の学校の開催。各地域の茶の間の立ち上げ支援。

(3) 助け合い事務局

- ・助け合いツール「実家の手」発行管理運営。



「にしかんの茶の間」ができるまで

・地域包括ケア推進モデルハウスづくりの始まり

新潟市では8地区の各々に「地域包括ケア推進モデルハウス」を立ち上げ、そこを拠点にした地域の支え合いのしくみづくりに取り組んでいます。西蒲区でも、「支え合いのしくみづくり推進員」（新潟市での生活支援コーディネーターの呼称）が拠点立ち上げに取りかかりました。

拠点運営にあたって任意団体「Rera」を設立。地域で民生委員児童委員を30年、保護司を20年務めた地域の女性（現会長・佐藤信子さん）に代表を依頼し、民生委員児童委員や自治会役員、経験者を核にして整えていきました。

・地元・西蒲区にも「茶の間」が開設されることに

現在事務局長を担う佐藤哲郎さんは団塊世代生まれで、定年退職する頃に「助け合いのしくみをつくらないと大変なことになる」と考えていたところ、事例6で紹介した河田さんの活動を知り、この人に学ぼうと河田さんが運営する居場所でボランティアを始めました。

やはり、地元西蒲区に「茶の間」を開設するために河田さんの研修に訪れていた現Reraのメンバーとは、河田さんの紹介で出会いました。

・場所探し、活動内容の検討

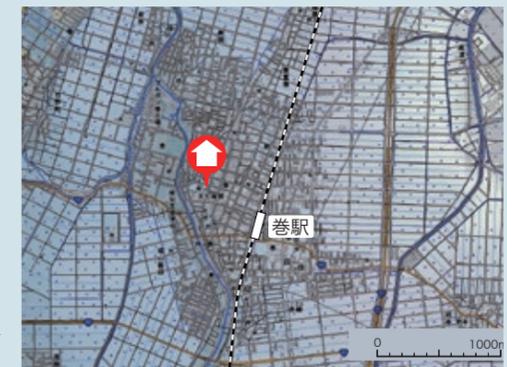
西蒲区全域から利用者が通えるようにするため駐車スペースがあることにこだわって、拠点を探しました。いくつかの候補の中から、巻地区公民館近くの以前は習字教室に使われていた古い空家を借りることに決定しました（家賃・水道光熱費は市の補助金を利用）。こうして2016年（平成28）、新潟市で3か所目になる「地域包括ケア推進モデルハウスにしかんの茶の間」が開設されました。

活動は、高齢者の孤食を課題とらえて食事に力を入れて出すことにし、ほかには特にプログラムを用意せず、おしゃべりやゲーム、編み物などそれぞれが自由に過ごすスタイルにしました。

■ 巻地区の概要 ■

- ・住民人口：12,023人 4,352世帯
- ・高齢化率：31.8%（3,814人）
- ・15歳未満の子どもの数：1,301人
※以上は2015年国勢調査より。
- ・周辺施設：新潟市西蒲区役所、
新潟市西特別支援学校

新潟市の西端にある西蒲区は、2005年に新潟市に編入された2町3村のほぼ全域から構成されます。市の約4分の1を占める広い区で、主な産業は米や果物、野菜づくりです。その中で、巻地区は昔から一帯の中心地で、明治・大正時代は宿場や役所が置かれていました。



居場所周辺の環境マップ
（国土地理院、カシミール3D）

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

日常生活支援

食生活改善推進員による、塩分控えめ栄養バランスの良い食支援

・誰かと一緒に食事をすることが健康を保つには大切だと考え、にしかんの茶の間では食事の提供を活動の中心に据えています。漬物等の塩分の多い食事が好まれる地域性で、新潟市の中でも脳梗塞を患う人が多いとされていました。そこで、食事づくりは食生活改善推進員のメンバーに依頼したところ、二つ返事で引き受けてくれました。

食生活改善推進員のつくる食事は塩分控えめ、薄味の健康的な食事づくりを徹底しています。

・家族がいてもそれぞれ食事時間が異なるため一人で食べている人や、家族に遠慮して一人で集会所でカップラーメンを食べている男性がいるとわかると、「にしかんの茶の間」で一緒に食べるように声かけしています。

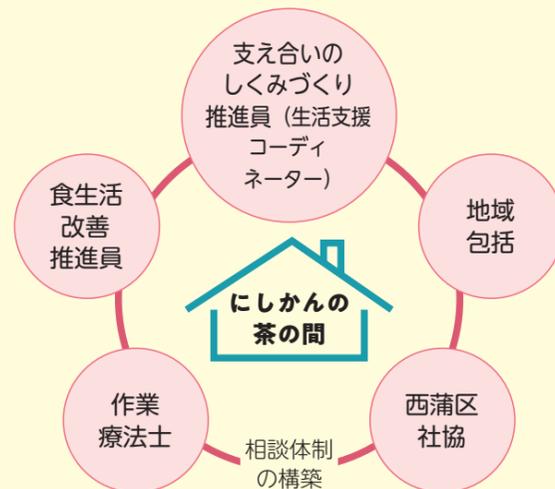
居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

よるす情報相談

専門職と相談を重ね、相談スキルをアップ

- ・居場所の役員会で最も重要な議案は「居場所で気づいたこと」を共有することです。
- ・役員会は定期的に開催し、食生活改善推進員、第1層・第2層の支え合いのしくみづくり推進員、作業療法士、必要に応じて地域包括や区役所が参加しています。
- ・居場所で解決できないことは、地域包括や社協につなぎます。
- ・社協からは、「引きこもり気味の人等に居場所を紹介したい」と相談を受けることがあります。



健康寿命をのびす

作業療法士等の専門職による生活改善指導

- ・新潟市では、8区全てのモデルハウスに月1回作業療法士を派遣しています。
- ・当初は、作業療法士の役割が理解されず、専門性が活かされるまで時間がかかりましたが、今では役員会に参加し、利用者の個別ケースを相談し指導してもらうようにな

りました。

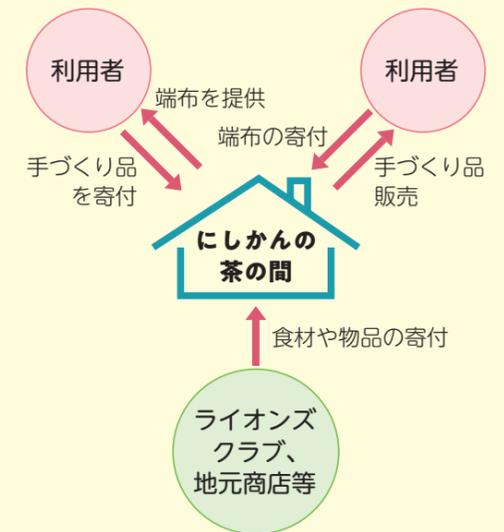
・その後、西蒲区では独自に作業療法士の派遣回数や派遣する専門家の種類（理学療法士、言語聴覚士、音楽療法士など）を増やし、今では欠かせない役割を担ってもらっています。

出番としごと

地域でまわる寄付循環

・手芸好きな高齢者からもらった手づくり品を展示していたところ、利用者から売って欲しいと言われました。2コ150円で販売し、売上金を渡したらとても喜ばれ、一部を茶の間に寄付してくれました。趣味でつくった手芸品が売れたことに大きなやりがいを感じたようです。別の人からは材料の端切れが寄せられるようになり、寄付の循環が生まれています。

・Rera会長の佐藤さんは地元積極的に寄付を呼びかけています。例えば、昼食の材料の豆腐やおから、油揚げは、近隣の商店から寄付されています。地元のライオンズクラブや葬儀屋にも協力をお願いして、時計や鏡の寄贈を受けています。



カギとなるアセット

町会役員／食生活改善推進員
民生委員児童委員
支え合いのしくみづくり推進員
(生活支援コーディネーター)
作業療法士、理学療法士、
言語聴覚士、音楽療法士
手芸小物づくりが得意な人
端布を寄付する人
地域の人、地域の高齢者
一人で食事をしている人

人

モノ・資金

にしかんの茶の間の場 (元空き家)

場

情報・ネットワーク

新潟市地域包括ケア推進モデルハウス補助金 (家賃、水道光熱費、電話代)
作業療法士等専門家派遣 (市、西蒲区)
手芸小物の販売売上金の寄付
手芸小物の材料となる端布の寄付
食材寄付 (近隣商店街)
時計、鏡等の備品
(ライオンズクラブ、葬儀屋)

支え合いのしくみづくり会議
(第1層協議体)
西蒲区社会福祉協議会
新潟市

名称	常設型地域の茶の間「にしかんの茶の間」	運営体制	登録ボランティア40名程。1回の当番は6人(運営3人、食事づくり3人)。役員は毎回手伝う。役員会を月1回実施。運営ボランティア6名、食生活改善推進員3名程、第1層・第2層の支え合いのしくみづくり推進員、作業療法士や地域包括支援センター、区役所が参加。
住所	新潟県新潟市西蒲区巻甲660		
営業日時	月・木 10:00-15:00		
運営団体	ボランティア団体 Rera		
代表	会長 佐藤信子		
開設・営業開始	2016年11月		



「地域の茶の間」支え合いのしくみづくり

千葉大学大学院人文科学研究院 清水洋行

人口約 80 万人の新潟市には、地域の茶の間が約 500 か所あります。地域の茶の間は、「子どもから高齢者まで、障がいや認知症の有無にかかわらず、誰もが、それぞれの生きがいや役割を持つことで、自発的な参加意欲が生まれる」場であるとともに、「生きがい・社会参加」「健康づくり・介護予防」「支え合いの地域づくり」をつなぐ支え合いのしくみづくりの「土台」として位置づけられています [第 7 期新潟市地域包括ケア計画 (新潟市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画)]。

このような地域の茶の間づくりを進めるため、市は 2014 年度に地域包括ケア推進モデルハウス事業 (以下、「モデルハウス事業」) を開始しました。所管は福祉部地域包括ケア推進課です。市は、この事業を行うにあたり、1997 年に地域の茶の間を創設し市内各地に広げた実績を持つ河田圭子氏に「支え合いのしくみづくりアドバイザー」を依頼しました。さらに、河田氏の豊かなノウハウを継承し普及させることを目的として、2014 年 10 月に「基幹型地域包括ケア推進モデルハウス」として実家の茶の間・紫竹 (以下、「紫竹」) が開設されました。紫竹は、市と任意団体「実家の茶の間」との協働運営で、市が家賃、水道光熱費、電話料金を負担する一方、「実家の茶の間」が地域の茶の間の運営にあたります。運営経費については、1 日 300 円の利用料金や賛助会費、バザー売り上げなどがあてられています。

新潟市は政令指定都市で 8 つの区がありますが、「基幹型」の紫竹に続いて各区でモデルハウスとしての地域の茶の間の整備が進められ、2017 年 8 月にすべての区で開設が完了しました (中央区は 2 か所、その他の区は 1 か所ずつ)。2016 年 11 月に西蒲区に開設された「にしかんの茶の間」もその一つです。モデルハウス事業では、年間 804,000 円を上限として補助が行われます。そこでは、「仲良しクラブではない」「社会性のある茶の間」、そして「ここにはサービスの利用者はひとりもない。いるのは“場”の利用者だけ」という河田氏の言葉に表される地域の茶の間の理念や、「どなたが来られても「あの人は誰?」という目をしない」、「プライバシーを訊き出さない」、「その場にはいない人の話をしない」といったルールが継承されるとともに、茶碗でなく各自が名前を書いた紙コップの使用やその日にできる人が名前だけ書きこむ当番表などの実践的な手法、作業療法士や保健師・看護師の派遣といった紫竹の取り組みをふまえて各地域の実情に応じたかたちで運営されています。

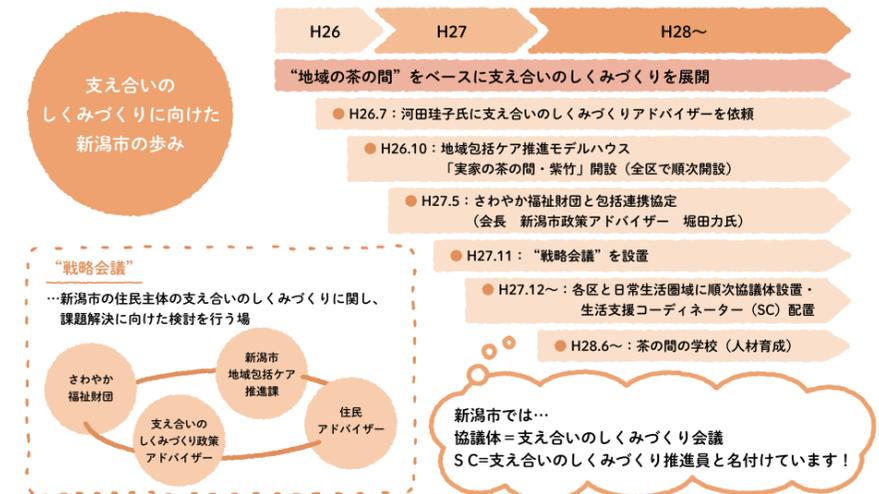


さらにモデルハウス事業とは別に、地域の茶の間支援事業という制度があります。こちらは週 1 回以上、月 2 回以上、月 1 回などの頻度のより低い地域の茶の間を対象とし、それぞれ運営費について年間 24 万円 (初年度のみ初期費用 20 万円)、6 万円、3 万円を上限とする補助が行われます。

地域の茶の間を「土台」とする支え合いのしくみづくりについて、モデルハウス事業とともに柱となっている施策が生活支援体制整備事業です。第 1 層は市ではなく区です。第 2 層は、単一又は複数の中学校区で設定された日常生活圏 (令和 2 年度:29 圏域) で、地域包括支援センターもこの日常生活圏域を単位として設置されています。支え合いのしくみづくり推進員 (生活支援コーディネーター、以下 SC) の配置は、第 1 層、第 2 層とも、原則として各 1 名ずつですが、地域の実情に応じて複数名の配置が可能とされています。

モデルハウス事業による地域の茶の間づくりは、各区の第 1 層 SC が、紫竹で学びながら、各区の支え合いのしくみづくり会議 (協議体) と協力して進められていきました。ここで第 1 層 SC には、区役所、自治会、老人クラブ、学校、警察など様々な機関・団体、人との関係をつくっていくことが求められ、各区のモデルハウスづくりは第 1 層 SC の育成プロセスでもありました。各区に開設されたモデルハウスとしての地域の茶の間は、第 1 層 SC が、第 2 層 SC や、モデルハウス以外の地域の茶の間 (第 3 層) との関係をつくっていく拠点となります。紫竹は、東区の拠点でもあります。また、「基幹型」という全市の拠点であることから、市全体の第 1 層 SC や第 2 層 SC の研修を行う場となりました。

さらに、人材育成に関わる取り組みとして、任意団体「実家の茶の間」、公民館、市の地域包括ケア推進課の共催による「茶の間の学校」が、2016 年 6 月に始められます。地域の茶の間を立ち上げたい人や地域の茶の間に興味のある人、地域の茶の間の運営で困っている人などを対象に、地域の茶の間の理念や意義、つくり方や運営に関するノウハウ、支え合いのしくみづくりなどを伝える講座です。地域の茶の間の創設者河田圭子氏や「実家の茶の間・紫竹」の当番等が講師になり、地域の居場所づくりやお互いさまの人間関係を学び合うことで、地域の茶の間を運営する人材育成や、各地域で住民の助け合いのつながりをつくることをねらいとしています。



図「住民と行政が協働でつくる助け合いの地域」(新潟市)パンフレットより

コミュニティカフェ・ふらっと

[運営] 認定特定非営利活動法人 地域たすけあいネットワーク

福島からの避難者への居場所提供をきっかけに始まった
地域に愛される古民家カフェ。



こんな居場所

- ▶金物問屋だった古民家を「かじまちの家」として再生
- ▶手延べガラスの格子戸と漆喰の白壁
- ▶バリアフリーにリフォームされたカフェ

1階には、
事務所、デイサービス、
キッチン、カフェ、
和室、相談室等があり、
外から見るより
深い奥行きが
ありました。

2階では、
お裁縫を楽しむ
地域のグループの人達が、
干支の牛の小物をつくって、
和やかに作品を見せ合っ
ていました。



現在の活動

(1) ケアサポート事業

- ・たすけあい活動（配食、福祉有償運送も含む）
1時間 1,100円での有償たすけあい活動。たすける側は職員が担っており、時給 835円。
- ・【介護保険】訪問介護
- ・【介護保険】通所介護事業（デイサービス）
- ・障害者総合支援事業。

(2) 地域コミュニティ事業

- ①コミュニティカフェ・ふらっと
ふらっと定食 350円（地産野菜が20種類はいたった具沢山汁かそうめん汁と漬物、県産コシヒカリのご飯）を提供。コーヒー無料。会員外は入場料 200円。
- ②わくわく食堂（子ども食堂。大人も参加可）
- ③その他、茶会や展示会。

(3) 委員会活動

- ・常設型の活動
- ①土間ショップ委員会
- ②ふらっと委員会
- ③夢のかじまち委員会等、
9の委員会活動がある。

(4) プロジェクト活動

- ・まずはやってみようという単年度の活動
- ①わくわく食堂プロジェクト
子ども食堂を開催（大人も参加可）
- ②畑プロジェクト
- ③オレンジカフェ（認知症カフェ）等、
7のプロジェクトがある（2020年度）。



「コミュニティカフェ・ふらっと」 ができるまで

・介護保険を考える勉強会が始まり

団体設立時の中心メンバーは建築士で、体が不自由になった人の家のリフォームや、自身の親の介護の経験から、住民同士で助け合う活動の必要性を感じていました。介護保険制度の始まりを見越して、1998年（平成10）「介護保険を考える会」を発足。映画「住民が選択した町の福祉」上映会を行い、「お互いに得意なことを活かして、住民同士で助け合う組織をつくりましょう」と呼びかけ賛同者を募ったのが始まりです。

翌年には任意団体「地域たすけあいネットワーク」を立ち上げ、会員同士による助け合いの活動をスタート。最初の拠点「みどりの家」は会員宅を借りたもので、当初は1時間当たり850円の利用料、600円の提供料で利益は250円、1日の利益が750円ということもある規模の活動でした。

・介護保険事業参入に向けて準備

活動を継続するにはどうしたらいいかを話し合い、介護保険に参入することをめざしてみんなでヘルパーの資格を取りました。徐々に仕事も増え収益も上がり、常勤4人を配置するまでになりました。事業拡大に伴い新たな拠点を探したところ、鍛冶町にある古民家に出会いました。三条は刃物の産業で有名ですが、鍛冶町は江戸時代から鍛冶職人が集住し町を形成してきた地域です。その古民家は明治時代は金物を扱う商家で、敷地には庭や蔵もある立派なものでした。地域の歴史が感じられる建造物の価値を活かそうと、大きな決意をして購入を決定、資金の2,000万円は会員から借入れ、荒れた状態だった古民家を改築しました。10年で返済予定の借金は5年で返し終えました。

・東日本大震災の被災者の受け入れから、居場所スタート

改築を終えた古民家で「デイサービスかじまちの家」事業が始まりましたが、空いているスペースはまだありました。そのスペースに東日本大震災の福島からの被災者に居場所を提供したことをきっかけに、ここを地域の居場所にしようと、「コミュニティカフェ・ふらっと」の取り組みが始まりました。

■ 鍛冶町地区の概要 ■

- ・住民人口：613人 212世帯
 - ・高齢化率：39.5%（240人）
 - ・15歳未満の子どもの数：50人
※以上は2015年国勢調査より。
 - ・周辺施設：八幡神社。市内で最も古い小学校（1872年創立）があったが2017年に閉校。
- 江戸時代から鍛冶屋が集まり、金属加工業で有名な三条市の礎になった地域です。かつては信濃川を水路に流通業も盛んで、大きな元商家や蔵が残る一方で、現在は高齢化が進み、大きな家に一人住まいの高齢者が増えています。



居場所周辺の環境マップ
（国土地理院、カシミール3D）

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

交流 空き時間・空きスペースは、会員の交流に開放

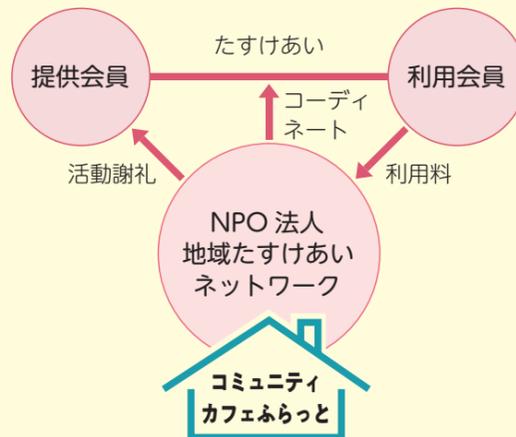
- ・営業時間外のコミュニティカフェ・ふらっとのスペース、2階や奥の間等の空スペースを、自治会や地域の人に貸しています。一人でも会員がいれば、グループでも使用できます。(使用料は、使用人数×100円+光熱費200円) 高齢者の手芸グループ、書道クラブ、将棋のグループなどが利用しています。
- ・たすけあい活動のヘルパーの休憩時間や交流会にも使われています。ヘルパー同士顔を合わせる機会が増えてつながりが深まっています。

居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

日常生活支援 会員同士による「たすけあい事業」

・「たすけあい事業」は団体設立当初から続く会員同士の互助活動です。会員は約600人(入会費1000円、年会費2000円)で、介護保険や障害者支援制度が使えない通院介助や病院での付き添い、見守り、草取り、雪かきなどに一時間1100円で利用できます。家族が入院して家にケアする人がいない、けがなどで急に動けなくなったなどの緊急のニーズにも対応しています。



よるす情報相談 カフェだから気軽に寄れる「相談窓口」

- ・庭の緑を眺めながらゆったり過ごせる古民家カフェで、地域の誰でも気軽に立ち寄れる雰囲気です。「コミュニティカフェ」として開かれていることで、敷居の低い相談の場になっています。
- ・地域包括支援センターから紹介されて訪れる人も多いです。
- ・年2回、地域の人や行政と話し合いの機会を設けており、そこで自治会長や民生委員児童委員から地域の情報を得ています。



地域づくり 「入りにくい」の声からできた「土間ショップ」

- ・何か事業を始めたい会員がいて、それに賛同する会員がいれば、赤字でも取り組む方針です。
- ・例えば、以前の入口はただの土間で、入口から事務所までが遠く、「声をかけても誰も出てこない」「入りにくい」との声があったことを知りました。それを改善しようと、土間ショップ委員会を立ち上げて、会員が誰でも商品を置けるお店に改装しました。会員の手芸作品や食品加工品、地元農家の野菜等が並び、立ち寄る人が増えました。
- ・会員も、手芸作品や食品加工品等を販売することが、やりがいにつながっています。
- ・地域の子どもの居場所になって欲しいと、駄菓子も販売しています。



カギとなるアセット

地域たすけあいネットワーク会員 自治会役員 民生委員児童委員 手芸品づくりが得意な人 食品加工品づくりが得意な人 高齢者の手芸グループメンバー 地域の人、地域の高齢者、 地域の子ども	ケアサポート事業収益 カフェや土間ショップでの売上収益 会費
人	モノ・資金
「かじまちの家」(元空き家) コミュニティカフェ・ふらっとのカフェ 「かじまちの家」の入口にある「土間ショップ」	三条市社会福祉協議会 三条市地域包括支援センター 嵐北 地域と行政との情報交換(年2回開催)
場	情報・ネットワーク

名称	コミュニティカフェ・ふらっと	運営体制	会員約600名。毎年100名程が入れ替わるが総数に大きな変化はない。職員はヘルパー60名。事務職と調理担当を合わせて5～6名。全部で65～66名。カフェの前日仕込み2時間、当日の調理と給仕に2名が5時間従事。皿洗い等はボランティアが担っている。
住所	新潟県三条市本町6-3-76		
営業日時	火・木・土 10:00-15:00		
運営団体	認定特定非営利活動法人 地域たすけあいネットワーク		
代表	理事長 野島理恵子		
開設・営業開始	2011年11月		

東灘こどもカフェ「木洩童」

[運営] 東灘こどもカフェ

退職後の自分の居場所づくりから始まった、
みんなが主役で出番がある 363 日開いてる " 出場所 "。

こんな居場所

- ▶ テーブル4つでいっぱいになる居場所
- ▶ 入口外に寄付されたバザー品が並ぶ
- ▶ 二軒隣が「あたふたクッキング」の厨房



小さいけれど、
街の情報、
「こもれど」のイベント情報が
壁いっぱいに貼られ、
見ているだけで
わくわくしてくる
空間でした。



バザー品を
見ていた大学生や、
お子さんを自転車に乗せた
お母さんが、目の前で、
中村さんに声をかけられ、
談笑が始まって
いました。



現在の活動

- (1) 居場所**
 - ・ 昼食やカフェ 月曜～土曜 10:00-17:00
 - ・ 日曜 変則開店。
- (2) 生活支援**
 - ・ 会員の生活の困りごとになんでも相談にのり、サポート。「一般社団法人 東灘なんでもお手伝いセンター」を設立し、連携して対応。
- (3) 配食**
 - ・ 高齢者や子どもへの昼食配食活動。
 - ・ 阪神淡路大震災時の炊き出しをきっかけに生まれた活動「あたふたクッキング」を引き継ぎ、2016年「あたふたクッキング甲南」として、東灘こどもカフェの傘下に入り再スタート。
- (4) 誰でも先生・誰でもアーティスト**
 - ・ 誰でも講座を開催（1人でもお客さんがいたら先生になれるをモットーに実施）。
 - ・ 毎年約200回以上の教室や講座を開催。
 - ・ ものづくり、音楽会、作品展示、料理教室等。
- (5) 子どものボランティア活動促進**
 - ・ 子どもを対象にした、商店街のゴミ拾いや、居場所にいるメダカにエサをあげる等の環境ボランティア活動。
 - ・ 子どもの口コミで広がり、現在まで300人が参加した。

「こもれど」ができるまで

・ 単身赴任から戻ってきたら、自分の居場所がなくなっていた

現代表の中村保佑さんは、現役時代20年間単身赴任をしていましたが、退職が近づく頃から定年後の人生を考え、調理師免許をとったり、行きつけの居酒屋を昼間に借りて高校生たちに豚汁をふるまったり、名所旧跡を歩く会を行ったりして、何かすれば知り合いが増え協力者が現れることを体験していました。

しかし65歳で家に戻ってみると、知り合いはいない、近所はわからずで、「これは大変、自分の居場所づくりが必要」と思ったのが居場所づくりの始まりです。

そこで地域で開催される講座やイベントを探しては参加し、2009年（平成21）には2か所の居場所に通い、食を通じて人が知りあう良さを実感しました。

・ イベントを開催後、週3の活動からスタート

翌年から、「東灘こどもカフェ」という名称を使い単発の料理イベントを開催。けれども、当日は子どもがたくさん参加して大いに盛り上がり、その後町で会っても声をかけ合うような関係になることはなく、これではいくらやっても一過性、地域のつながりに発展しないと考えました。

そこで、8畳ほどの小さな部屋を借りて、週3日開く居場所を始めることにしました。当初から会員制を導入し、1年後には50人以上が登録しました。

・ 通りがかりの人がブラリと寄れる場所を探して、再スタート

活動が軌道に乗り、拠点を手狭になってきました。通りがかりの人が立ち寄れるような場所を探していたところ、人通りの多い商店街にほど近い場所に、空き事務所が見つかりました。1階で通りに面してガラス張り等、人が入りやすい環境でした。2012年（平成24）、現在の場所で新たにスタート。会員からの提案で、居場所の空間の名称を「木洩童<英語で仲間を表す“Comrade”が由来>」としました。ここで、年間363日開く居場所がオープンしました。

■ 東灘こどもカフェ周辺地区の概要 ■

※ 拠点から半径500mの範囲

- ・ 住民人口：18,957人 8,852世帯
- ・ 高齢化率：19.4%（3,682人）
- ※ 以上は2015年国勢調査より。
- ・ 15歳未満の子どもの数：2,699人

神戸市東灘区は大阪・神戸の中心市街地に近い便の良さと、南北に海と山がある環境で近畿有数の住宅地。阪神・淡路大震災では大きな被害を受け、一時的に人口は減ったものの、2020年現在、区の人口は震災前を上回っています。大学が点在し、学生の街でもあります。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域

都市化が
進んだ地域

その他の
市街地及び
郊外

農山村
地域

高齢化が
進んだ地域

新住民が
多い地域

長く住んで
いる人が
多い地域

人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター

社会福祉
協議会

生活支援
コーディネーター

中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

交流 自由が魅力。自然に仲間が増える

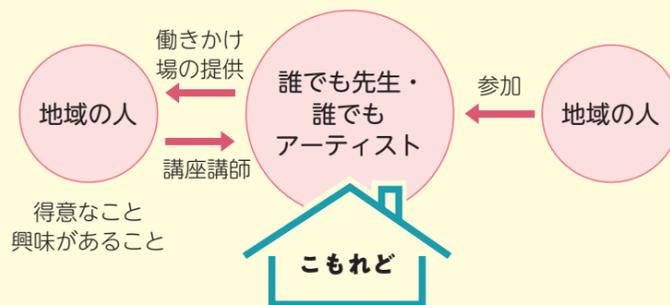
- ・こもれどのキャッチフレーズは「みんなの居場所・出場所」。いつでも好きな日、好きなプログラムに自由に参加できます。(年会費は大人1000円、こども500円)。会員は参加費の割引がありますが、会員にならなくても参加できます。一緒にランチを食べたり、プログラムに参加したり、講座の先生役になることで会員同士の顔見知りが増え、仲間が広がっています。

居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

出番としごと お客さん一人から講座開催「みんなの出番づくり」

- ・代表の中村さんは、いつでもこの居場所において、バザーの品物をちょっと覗いていく人にも声をかけます。会話の中で、興味のあること、得意なことがわかると、「講座やりませんか」と背中を押します。
- ・お客さんが最低1人居れば実施する設定です。誰もいなければ中村さんがお客さんになるので必ず実施することができます。好評な内容はシリーズ化していきます。このようにハードルを下げ、みんなの出番をつくっています。



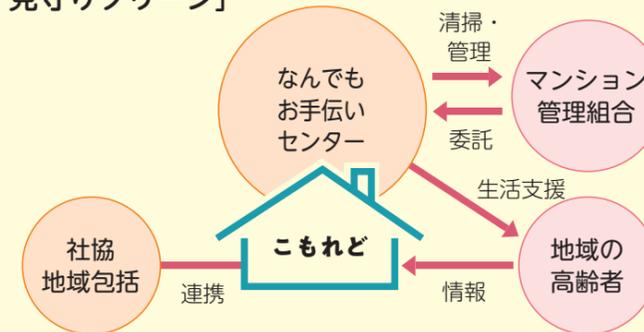
出番としごと 子どもの清掃活動「クリーンクルー」

- ・子どもたちが行っている、小さなボランティア活動のひとつで、居場所近くにある商店街を清掃しています。
- ・小学校に活動のチラシを配布してもらっています。
- ・商店街とは顔見知りになっており、「子どもたちがごみ拾いをするのでよろしく」と挨拶に行き、見守りに協力してもらっています。

日常生活支援

「剪定・大工」「介護」をお手伝い「なんでもお手伝いセンター・見守りクリーン」

- ・高齢になって「庭木の剪定ができなくなった」「病院の付き添いが欲しい」等、介護保険では対応できない困りごとを聞くようになりました。
- ・当初は個別に対応していましたが、一般社団法人「なんでもお手伝いセンター」を設立して協力者を募りました。今では、「剪定や大工仕事を行う」チームと、「介護関係」チームを編成して対応しています。
- ・専門的な相談は、地域包括支援センター（あんしんすこやかセンター）や社協につなげています。
- ・また、マンション敷地内の清掃と、見守りが必要な人を訪ねる「見守りクリーン」活動も行っています。マンション管理組合から請け負う仕事です。



カギとなるアセット

<p>庭仕事や大工仕事が得意な人 介護の対応ができる人 あたふたクッキングで調理をする人 興味のあること、得意なことがある人 地域の人、地域の高齢者、地域の子ども 店入口にあるバザー品を見ていく人</p> <p style="text-align: right;">人</p>	<p>配食サービス収益 会費の収益 なんでもお手伝いセンターの収益</p> <p style="text-align: right;">モノ・資金</p>
<p>こもれど（アーケード商店街近くの1F） 商店街のアーケード通路（子どもの清掃活動） 配食サービスキッチン（あたふたクッキング）</p> <p style="text-align: right;">場</p>	<p>一般社団法人なんでもお手伝いセンター 神戸市社会福祉協議会 地域包括支援センター 小学校（チラシ配布） コミュニティ・サポートセンター神戸</p> <p style="text-align: right;">情報・ネットワーク</p>

名称	東灘子どもカフェ「木洩童（こもれど）」	運営体制	会員835名。あたふたクッキング調理約30名。配送約5名。こもれどランチ調理約17名。なんでもお手伝いセンター約40名。運営委員による運営委員会と、会員は誰でも参加できる定例会議を実施（月1回）。
住所	兵庫県神戸市東灘区甲南町3-7-14 城野ビル1F		
営業日時	毎日10:00-18:00（元旦休日）		
運営団体	東灘子どもカフェ		
代表	中村保佑		
開設・営業開始	2011年4月		

事例
10-13

島根県雲南市の「交流センター」 住民主体の居場所

雲南市は2004年(平成16)6町村の合併で生まれた自治体です。人口はこの15年余りで2割減少し市全域が過疎指定を受けています。北部は出雲平野に続く平坦部、南部は中国山地に至る山間部が広がり、南部には積雪1mを超える豪雪地帯もあります。

人口減少を背景に、雲南市では「小規模多機能自治」をまちづくりの指針とし、概ね小学校区を1単位として組織された「地域自主組織」が行政と協働して地域運営を行っています。

今回の調査では地域自主組織が運営する交流センター(全30か所)のうちの4か所を訪問しました。地域自主組織では地域性と住民ニーズに対応したそれぞれの取り組みがなされていました。

「小規模多機能自治」とは

—自分たちでできることは自分たちで—

- ・小規模多機能自治とは、小規模だが多機能な住民組織で、自分たちの地域課題はできるかぎり自分たちで解決していこうという考え方。自治会・町内会等の地縁型組織と消防団や農業系団体、老人クラブやPTA等が連携して地域自主組織を形成し、①持続可能な地域づくり ②安心安全を確保する地域福祉 ③生涯学習・人づくりを3本柱にした事業を行っています。

地域自主組織の拠点「交流センター」

- ・交流センターは地域自主組織の活動拠点です。各自主組織の発意をもとに「住民活動」「生涯学習」「地域福祉」等の活動が行われています。
- ・運営費は指定管理料、地域づくり活動等交付金で賄われ、常勤職員約2名と数名の非常勤が地域自主組織で雇用されます。職員は事務局長以下地域福祉推進員(第二層生活支援コーディネーター)、集落支援員等が配置されています。

交流センターでの様々な取り組み

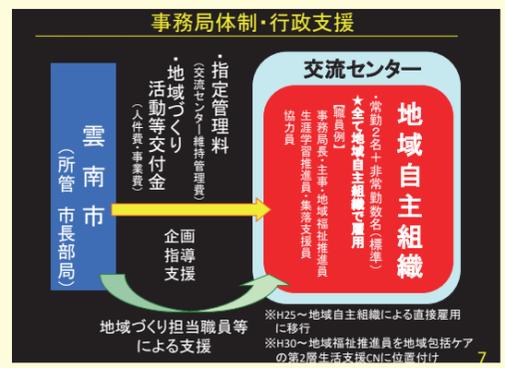
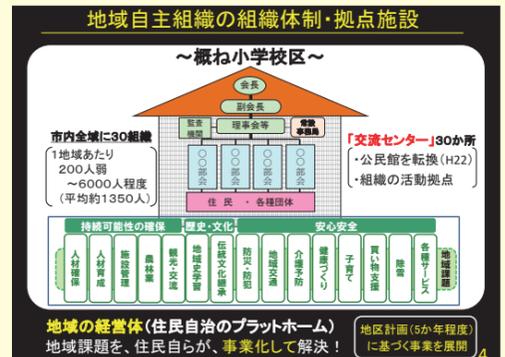
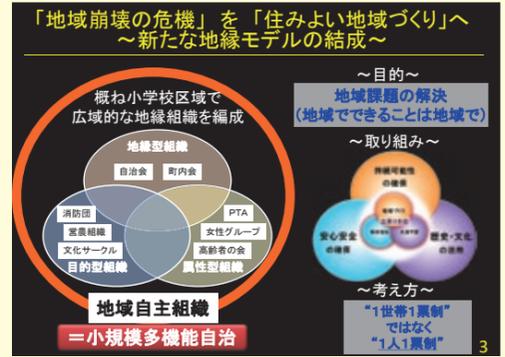
- ・地域の課題解決に向け、各交流センターごとに多様な取り組みが展開されています。

例：買い物困難地域での店舗運営や買い物送迎、配食サービス、介護予防活動、見守り事業、子育て支援事業等

意味と特徴

小規模ながらも = 概ね(小) 学校区域
様々な機能をもった = 分野横断し、統合
住民自治の仕組み = 住民の参画・協働

- ・協(総)働の仕組み
 - ・市民一人ひとりの力を発揮する仕組み
 - ・自治の原点を取り戻す仕組み
 - ・参加だけでなく、参画につながる仕組み
- ・自治体内分権の仕組み(全域対象)
- ・人口減・少子高齢化にも対応する仕組み



地域自主組織一覧

		R1.10.31現在(福祉施設除く)						
町	No.	地域自主組織名	拠点施設名	人口	世帯	高齢化率%	面積km ²	
大東町	1	大東地区自治振興協議会	大東交流センター	3,521	1,251	34.39	14.68	
	2	春殖地区振興協議会	春殖交流センター	2,135	716	37.52	12.01	
	3	幡屋地区振興会	幡屋交流センター	1,435	461	38.61	13.61	
	4	佐世地区振興協議会	佐世交流センター	1,592	501	39.89	14.72	
	5	阿用地区振興協議会	阿用交流センター	1,131	384	35.90	11.68	
	6	久野地区振興会	久野交流センター	532	205	45.49	28.41	
	7	海潮地区振興会	海潮交流センター	1,529	532	43.82	38.36	
	8	塩田地区振興会	塩田交流センター	134	56	56.72	18.76	
加茂町	9	加茂まちづくり協議会	加茂交流センター	5,743	1,927	35.83	30.91	
木次町	10	八日市地域づくりの会	八日市交流センター	888	396	40.20	1.09	
	11	三新塔あきば協議会	三新塔交流センター	980	376	41.22	1.20	
	12	新市いきいき会	新市交流センター	507	181	38.46	0.85	
	13	下熊谷ふれあい会	下熊谷交流センター	1,108	423	24.73	2.57	
	14	斐伊地域づくり協議会	斐伊交流センター	2,129	726	27.01	5.48	
	15	地域自主組織 日登の郷	日登交流センター	1,433	471	41.45	20.77	
	16	西日登振興会	西日登交流センター	1,004	329	43.33	13.15	
	17	温泉地区地域自主組織 ダム湖の郷	温泉交流センター	421	165	51.78	18.96	
	18	三刀屋地区まちづくり協議会	三刀屋交流センター	2,421	935	32.01	4.95	
三刀屋町	19	一宮自主連合会	一宮交流センター	1,895	641	35.67	16.91	
	20	雲見の里いいし	飯石交流センター	706	256	46.18	13.48	
	21	躍動と安らぎの里づくり鍋山	鍋山交流センター	1,294	444	42.04	23.84	
	22	中野の里づくり委員会	中野交流センター	518	201	48.26	23.50	
吉田町	23	吉田地区振興協議会	吉田交流センター	918	379	50.00	58.05	
	24	民谷地区振興協議会	民谷交流センター	155	56	49.68	15.00	
	25	田井地区振興協議会	田井交流センター	567	200	43.39	40.93	
掛合町	26	掛合自治振興会	掛合交流センター	1,369	542	38.20	20.61	
	27	多根の郷	多根交流センター	431	157	46.87	12.70	
	28	松笠振興協議会	松笠交流センター	310	100	42.90	18.82	
	29	波多コミュニティ協議会	波多交流センター	296	134	54.39	29.28	
	30	入間コミュニティー協議会	入間交流センター	216	88	54.17	28.09	
				計	37,318	13,233	38.04	553.37

地域自主組織



<雲南市>
 ・住民人口：37,720人
 ・高齢化率：38.9% (14,657人)
 ・人口密度：68人/km² (面積：553.2 km² ※東京23区の約9割)
 ※2020年1月住民基本台帳より

図・表は雲南市提供資料より

新市交流センター

【運営】地域自主組織 新市いきいき会

500人程の小さな地域なのに「地域のことがわからない」という衝撃情報収集を始めて、地域の人と人をつなぐ拠点

こんな居場所

- ▶市の支所の中にある小さな拠点
- ▶小規模＝フットワークの軽さという強み

昭和歌謡に合わせて
トレーニングする
「フィットネス新市」には
男性参加者が集まっています。
童謡ではないところが
魅力だそうです。



現在の活動

- 災害時の避難支援**
・「おねがい会員」「まかせて会員」制度を発足。
安否確認・避難支援訓練を実施（年1回）。
- 地域サロン事業**
・ふれあいいいききサロン活動による高齢者の社会参画、引きこもり・孤立防止。
- 配食サービス事業**
・社会福祉協議会から受託（地区内利用者3名）
①安否確認・声かけ、②見守りチェックシートで体調チェック（体調・食事・会話・薬・睡眠）、③社協への配食記録報告（時間・利用者状況）。
- 高齢者買い物サロン事業**
・町内のスーパーマーケットで買い物とおしゃべり会（毎月2回実施）。
- 「フィットネス新市」事業**
・高齢者向けの筋トレ体操を毎週水曜日に実施。
- その他福祉事業**
①いきいき健康講座（年4回）、②長寿を祝う会、③認知症予防講座、④高齢者交流会、⑤ボランティア養成育成事業、⑥独居高齢者交流事業、⑦マツス交流会等。
- 子ども活動支援事業**
①子ども神輿、②七夕まつり、③夏休み宿泊体験、④クリスマス会、⑤子ども料理教室、⑥卒業生を送る会、⑦夏休み学習会等。
- 生涯学習事業**
①人権同和問題学習会、②普段着の歌の会、③和紙工芸教室、④レガッタ大会参加、⑤グランドゴルフ大会、⑥チャレンジデー、⑦盆踊り大会、⑧男の料理教室、⑨子ども見守り隊。
- 地域振興事業**
①水辺の楽校環境整備、②地域環境美化事業、③熊谷竹林整備事業、④久野川環境整備事業。

■ 新市地区の概要 ■

- ・住民人口：560人 154世帯
- ・高齢化率：38.7%（217人）
- ・面積：0.85km²
- ・自治会数：5
※以上は団体提供資料より。2020年1月現在。
- ・周辺施設：木次小学校、木次中学校



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

新市地区は市内30の地域自主組織の中で最も面積が小さく、自治会数も少ない地区です。堤防の桜が観光名所になっている斐伊川沿いの平野部にあり、地区内に農地はありません。JR木次駅まで約1km、雲南市役所まで約2kmと雲南市の中心部にあります。

団体沿革

- 2005年(H17) 地域自主組織立ち上げのための住民説明会を実施
- 2007年(H19)9月 5自治会による「新市いきいき会」発足
市内最後の地域自主組織の設立
- 2010年(H22) 新市交流センターの設立
- 2013年(H25) 職員の雇用を開始
- 2017年(H29) 現在の施設へ移転

居場所の多様な機能

[ここでは多様な機能の中から一部を記載します。]

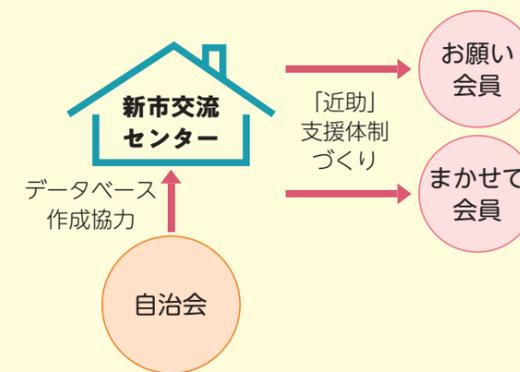
居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

日常生活支援

「お願い会員」「まかせて会員」の「近助」支援体制

- ・2010年(平成22)に会長に就任した小林和彦さんは、どこにどんな人が住んでいるのかの情報がなければ地域づくりはできないと考え、「住民福祉カード(住民情報データベース)」を提案しました。弁護士の助言を受けて個人情報保護にも配慮し、時間をかけて作成されたデータベースは、災害時の要支援者の把握や長寿のお祝い、高齢者サロンへの声かけ等に活用されるようになりました。
- ・このデータベースを活用してできたのが「お願い会員」・「まかせて会員」の取り組みです。一人暮らしの高齢者等、支援を必要とする人を「お願い会員」、お願い会員を見守り支援する人を「まかせて会員」と名付け、一人のお願い会員を3人のまかせて会員が担当する体制にしました。



地域の特徴

- 人口集中と都市化の進んだ地域
- 都市化が進んだ地域
- その他の市街地及び郊外
- 農山村地域
- 高齢化が進んだ地域
- 新住民が多い地域
- 長く住んでいる人が多い地域
- 人が減っている地域

立ち上げ期を支えた支援者

- 自治体
- 地域包括支援センター
- 社会福祉協議会
- 生活支援コーディネーター
- 中間支援NPO
- 町会・自治会
- 地域の有志

団体の法人格

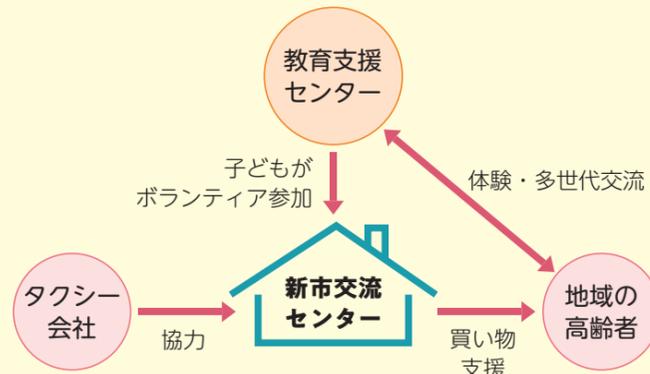
- 任意団体
- 認可地縁団体
- NPO法人
- 社会福祉法人

日常生活支援

小中学生が楽しみにする高齢者の買い物サロン

・月2回、大型タクシーを利用して市街地のスーパーマーケットへ買い物ツアーを行っています。地域に買い物をする店が少ないため、利用者にとっても人気がある活動です。買い物後の楽しみはフードコートでのお茶会です。

・買い物サロンの活動に、市の教育支援センター「おんせんキャンパス」を利用する不登校の小中学生がボランティアスタッフとして参加しています。子どもたちは高齢者の買い物の袋詰めや荷物運びの手伝いをする中で人の役に立つ体験ができ、高齢者は子どもたちとのふれあいに元気づけられる機会になっています。



カギとなるアセット

町会役員 民生委員児童委員 交流センター職員 地域の人、地域の高齢者 小中学生	地域づくり活動等交付金 会費	人	モノ・資金
新市交流センター フードコート（ショッピングセンター内）	自治会連合 おんせんキャンパス（教育支援センター） 小学校 雲南市役所関係部局	場	情報・ネットワーク

名称	新市交流センター	運営体制	事務局4名（常勤1名非常勤3名）会長、副会長と4つの部の各部長副部長、5自治会長で役員会を構成し事業を推進。
住所	島根県雲南市木次町新市379		各若い者会代表、いきいきサロン等の代表23名で評議委員会を構成して事業計画・予算を決議。
営業日時	月～土 8:30 - 17:00		
運営団体	地域自主組織 新市いきいき会		
代表	会長 小林和彦		
開設・営業開始	2010年		

事例 11

鍋山交流センター・安らぎ広場

[運営] 地域自主組織 躍動と安らぎの里づくり鍋山

著しい人口減少と高齢化が進む山間地で
住民福祉に対する取り組みを最重点施策として活動。

こんな居場所

- ▶ 鍋山小学校の隣。山に囲まれた拠点
- ▶ お母さん職員が事務局で力を発揮

厳しい状況下で、
次々と新事業を展開され、
2018年には
「栗原分室」も
誕生しました。



現在の活動

実施されている活動の中から、特に福祉的な活動のみ掲載

- 災害時要援護者避難支援体制整備事業**
・要援護者をどのように支援するかの体制づくり。現在登録者54名（65歳以上独居者44名）。
- 安心生活創造プロジェクト推進事業**
・防災用品備蓄と災害発生時の支援体制づくり。
- まめなか君の水道検針事業**
・見守りを兼ねた、水道メーター検針業務。
- まもる君のまかせて支援事業**
・携帯電話の親子機能を利用し、要援護者に子機を渡し、何かあった時にかける24時間見守り体制。
- 安心生活応援隊事業**
・当初は「雪かき応援隊」として始まったが、草刈り、畑仕事等、生活全般を応援。
- 交通弱者支援事業**
・デマンド型タクシー利用促進対策。
- 買い物弱者支援事業**
・ファミリーマート移動販売車の区内巡回販売と連携。
- 元気な鍋山見守り事業**
・水道検針時に看護師が同行しての健康相談。
・生活支援コーディネーターによる高齢者宅見守り訪問等。
- サロン活動支援事業**
・地区内13グループを支援。
- 安らぎ広場**
・元および現役の看護師で「ちょんてごチーム」結成。
・チームスタッフの近所に住む高齢者を見守ったり、カフェを開催して健康測定を実施。

地域の特徴

- 人口集中と都市化の進んだ地域
- 都市化が進んだ地域
- その他の市街地及び郊外
- 農山村地域
- 高齢化が進んだ地域
- 新住民が多い地域
- 長く住んでいる人が多い地域
- 人が減っている地域

立ち上げ期を支えた支援者

- 自治体
- 地域包括支援センター
- 社会福祉協議会
- 生活支援コーディネーター
- 中間支援NPO
- 町会・自治会
- 地域の有志

団体の法人格

- 任意団体
- 認可地縁団体
- NPO法人
- 社会福祉法人

■ 鍋山地区の概要 ■

- ・住民人口：1,287人 397世帯
 - ・高齢化率：42.66% (549人)
 - ・周辺施設：鍋山小学校 (生徒数51人)
 - ・自治会：28
- ※以上は団体提供資料より。2020年3月現在。

雲南市三刀屋町の西部にあり、周囲は山林に囲まれています。1954年までは鍋山村がありました。面積の85%が山林ですが、出雲市に隣接して県道51号線で結ばれていたり、雲南市中心部、松江市も通勤圏になり、農林業だけが中心の地域ではありません。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

団体沿革

- 2005年 (H17) 4月 「地域自主組織」説明会に参加
- 11月 鍋山地区設立準備委員会発足
- 2006年 (H18) 自治会連合会に働きかけ
- 躍動と安らぎの里づくり鍋山 発足
- 2009年 (H21) 運動会を廃止 (明治時代から続いていた)
- 2015年 (H27) 組織改正

居場所の多様な機能 [ここでは多様な機能の中から一部を記載します。]

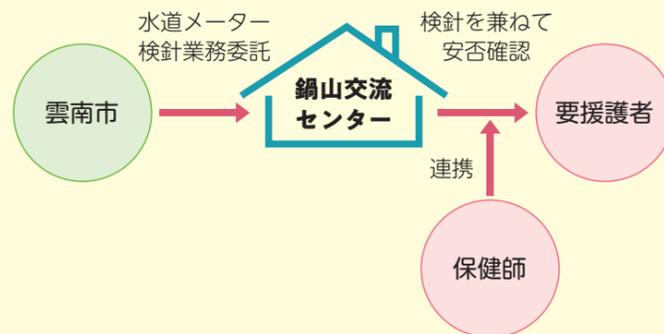
居場所から 新しい事業やしくみの創出 ~地域資源とつながり生み出す~

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

健康寿命をのばす

水道メーター検針の仕事と兼ねて、各家訪問見守り

- ・2010年(平成22)から始めた「災害時要援護者避難支援体制整備事業」で災害時要援護者の把握と登録ができていましたが、会長の秦美幸さんは何かあった時のための見守りには不十分だと考えていました。
- ・水道メーターの検針業務を請け負っていた民間業者が山が深く冬は雪もあることを理由に鍋山地区の業務を渋っていると聞き、市役所に掛け合い地域自主組織「躍動と安らぎの里づくり鍋山」で業務を請け負うことにしました。これが「まめなか君の水道検針事業」となり、現在は月1回の検針のかたわら「まめなかね(元気ですか)」と安否確認を兼ねた声掛けを行っています。2015年(平成27)からは保健師や看護師も検針員に同行し、血圧を測ったり健康相談に応じています。

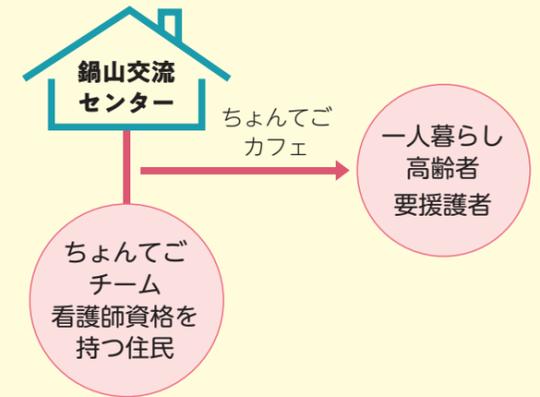


出番としごと

健康寿命をのばす

地元看護師が健康を見守る「ちょんてごチームの結成」

- ・声掛け・見守りを行う中でわかったのが、いざという時には住民では手に負えないという現実です。本当に高齢者の役に立つには病院等の専門機関との連携体制が必要だと考え、地域資源調査を行いました。
- ・その結果、地区には看護師資格を持つ人が22人いることがわかりました。そのうち9人が協力してくれることになり「ちょんてご(ちょんぼし=少し、てごする=手伝う)」チームが結成されました。
- ・ちょんてごカフェ(毎月第4金曜)を開催し交流しながら健康測定をし、「ちょんてご手帳(健康チェック票)に記録観察しています。2年間で22回開催し、毎回20名以上の参加があります。



地域づくり

新拠点「安らぎ広場」づくり

- ・2018年(平成30)閉鎖した農協の支所を借り受け、分室「安らぎ広場」を開設しました。相談の場では人が集まらないと考えて、うたごえ喫茶や健康体操等の楽しいプログラムを行う会場として活用されています。
- ・「ちょんてごカフェ」を開催したり、相談事を「安心生活応援隊」につないだり、地域

自主組織では解決が難しい場合は、雲南市の健康福祉部や医療介護連携室と連携して病院や社協につながる体制をとっています。

- ・趣味の集いに参加した福祉の活動ではひろいにくい若者やPTA等のつばやきを、地区内のイベント企画や子育て環境整備、防災防犯等の活動に反映しています。

カギとなるアセット

安心生活応援隊の協力員 地元の元看護師・現看護師 11支部の役員と自治会役員 交流センター職員 地域の人、地域の高齢者	雲南市交流センター指定管理料 地域づくり活動等交付金 水道メーター検針業務の収益(市委託) 会費
人	モノ・資金
鍋山交流センター 安らぎ広場[栗原分室](元農協の支店) 深谷温泉(令和3年~指定管理)	通勤圏にある病院(看護師が勤務) 雲南市立病院 雲南市役所関係部局
場	情報・ネットワーク

名称	鍋山交流センター	開設・営業開始	2005年4月
住所	島根県雲南市三刀屋町乙加宮1208-1 鍋山サブセンター内	運営体制	職員29名[事務局6名、安心生活応援隊24名(内、水道メーター検針員12名)] 協力員(ボランティア)44名。男性の定年退職者が中心、女性は7~8名。役員は会長と副会長3名、幹事長と監事2名で計7名。そこに、5部門の部長を加えて役員会を構成。
営業日時	月~土 8:30-17:00		
運営団体	地域自主組織 躍動と安らぎの里づくり鍋山		
代表	会長 秦美幸		

中野交流センター

[運営] 地域自主組織 中野の里づくり委員会

地域最後の店舗跡の使い方を住民主体で検討。
運営委員会形式で「笑んがわ市」を運営。

こんな居場所

- ▶料理上手な女性たちがつくるお茶のあてが並ぶ
- ▶お客さんは地域外からも訪れる



2020年は「笑んがわ市」を一時休止しましたが、しっかり対策をして再開しています。生産者の最高齢は93歳の女性。野菜づくりが生きがいになっているとのことでした。



現在の活動

(1) 福祉部の活動（地区福祉の事業全般）

①いきいきサロン事業、②介護予防はつらつ事業、③配食サービス事業、④高齢者交流事業、⑤子育て支援事業、⑥健康増進教室、⑦福祉講演会、⑧福祉委員研修会、⑨中野“長寿”体操。

(2) 給食班事業

社会福祉協議会の委託を受け、週7件（3名）の昼食をつくり、届けている（調理場所は隣のデイサービス）。

(3) ふるさと振興部の活動

①収益事業（なかのこんにやく製造販売）、②ふるさと応援団事業（ふるさと便年2回）、③やさいづくり講習会、その他地域にかかわる講習会の開催、④笑んがわ市運営事業、⑤視察研修実施。

(4) シニア部の活動

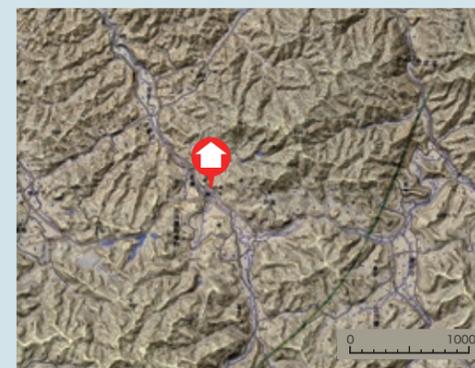
①高齢者学級事業（各種スポーツ）、②視察研修会の実施、③その他クラブ活動の開催、例）手芸クラブ活動（毎月1回）。

中野地区の概要

- ・住民人口：514人 181世帯
 - ・高齢化率：49.8%（252人）
 - ・自治会数：11
- ※以上は団体提供資料より。2020年3月現在。

市役所から約13km南にある高齢化と過疎化が進む中山間地域。

2010年10月に地域で最後の商店だったJA中野店舗が閉鎖。同年中野幼稚園が閉鎖。2013年3月に最後の学校施設中野小学校が138年の歴史に幕を閉じ、三刀屋小学校に統合されました。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

団体沿革

- 2005年(H17) 地域自主組織「中野の里づくり委員会」発足
- 2010年(H22) 中野交流センター発足
- 2011年(H23) 4月 旧JA中野店（2010年10月閉鎖）の空き店舗の活用を地域で検討するための第1回会議を実施
- 5月 第2回会議を実施。地域有志が「笑んがわ市運営委員会」を立ち上げ
- 6月 産直市とサロン機能のある「笑んがわ市」を開設（2013年度より、「笑んがわ市」は地域自主組織のふるさと振興部の活動になった）

居場所の多様な機能

[ここでは多様な機能の中から一部を記載します。]

居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

健康寿命をのばす

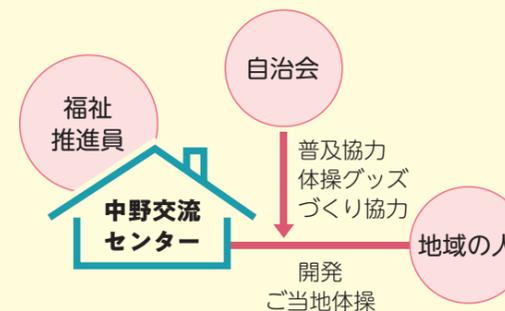
地域づくり

ご当地体操「すきすき中野“長寿”体操」

・福祉推進員が地域の中野小学校で歌われていた地元応援ソング「すきすき中野」に合わせた体操を思い立ちました。廃校による地域の喪失感を補い、愛着ある地域の応援ソングで健康体操を普及したいと考えました。

・パンフレットを全戸配布、自治会のサロン活動で活用されるようCDも配布し、買い物とお茶のついでに体操ができるようにしました。

・約5分の「すきすき中野体操」は手軽ですが運動量がすこし足りません。そのため、これを準備体操にして、おもりを使った筋肉体操と合わせて、ご当地体操「すきすき中野“長寿”体操」もできました。シニア部手芸クラブで手づくりしたおもりは、住民に愛着を持って使用されています。



地域の特徴

人口集中と都市化の進んだ地域

都市化が進んだ地域

その他の市街地及び郊外

農山村地域

高齢化が進んだ地域

新住民が多い地域

長く住んでいる人が多い地域

人が減っている地域

自治体

地域包括支援センター

社会福祉協議会

生活支援コーディネーター

中間支援NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

任意団体

認可地縁団体

NPO法人

社会福祉法人

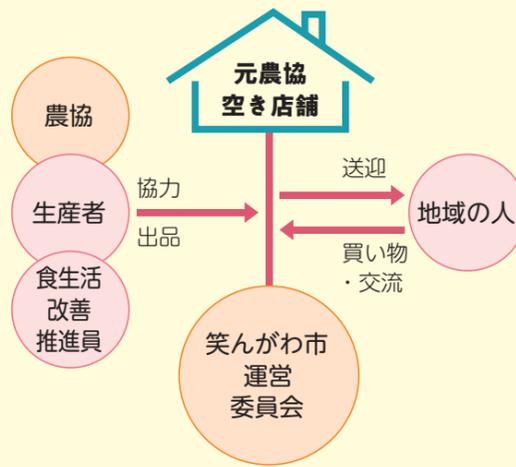
団体の法人格

交流

日常生活支援

「笑んがわ市」で産直市と交流の復活

- ・2010年（平成22）にJA中野が閉店し、地域に商店がなくなってしまいました。このまま地元を寂れさせてはいけないと立ち上がったのはふるさと振興部と食生活改善推進員の人たちです。元農協の空き店舗を使って、これまでつくってきたこんにやくや手づくりの保存食、地元生産者の農産物を扱う産直市と、休憩ができるお茶飲みスペースを開けば、買い物に不便をしている人々の助けになり、交流の機会もできると考えました。
- ・農協女性部や地元の協力者を募って「笑んがわ市運営委員会」を立ち上げ、出荷のルールづくり等の検討を重ね、2011年（平成23）6月、毎週木曜の産直市とお茶飲み広場「笑んがわ市」がオープンしました。
- ・利用者は買い物を済ませたら「お茶コーナー」で交流を楽しみます。漬物や煮染めをつまみながらのおしゃべりの時間は、高齢者の大切な交流機会となっています。営業日には地域内外から60人程度が訪れ大きな賑わいになっています。お茶コーナーも50人程度が利用しています。
- ・移動手段がない人に対して、地域から寄付された車両を使った送迎サービスを2016年（平成28）開始、現在8名が利用しています。



カギとなるアセット

自治会役員／食生活改善推進員 産直市出品者 シニア部手芸クラブ 交流センター職員 地域の人、地域の高齢者、 地域の子ども	雲南市交流センター指定管理料 地域づくり活動等交付金 車両の寄付（前会長より） 会費
人	モノ・資金
元農協店舗 中野交流センター 旧中野小学校体育館	笑んがわ市運営委員会 （農協女性部、地域の人等） 農事組合（笑んがわ市で産直販売） 生協（笑んがわ市開催にあわせて配達） 雲南市役所関係部局
場	情報・ネットワーク

名称	中野交流センター	開設・営業開始	中野交流センター：2010年4月 笑んがわ市：2011年6月
住所	島根県雲南市三刀屋町中野375-2	運営体制	会長、副会長、事務局長、生涯学習推進員、集落支援員、7つの部の各部長で地域自主組織の役員会を構成。各部に10名程の部員が所属。笑んがわ市は「ふるさと振興部」が主力を担っている。
営業日時	中野交流センター：月～金 8:30-17:15 笑んがわ市：毎木曜 10:00-12:00		
運営団体	地域自主組織 中野の里づくり委員会		
代表	会長 清水寛		

事例
13

波多交流センター・はたマーケット

〔運営〕地域自主組織 波多コミュニティ協議会

全日食チェーンに加盟し、旧小学校の一角で住民組織が食品雑貨店を営む。

こんな居場所

- ▶ 地域唯一の商店に喫茶スペースを併設
- ▶ 970品目の商品と地元の商材が並ぶ



自然豊かな山間に立派な校舎と小さな校庭がありました。校内には閉校の時の記念の寄せ書きがありました。



現在の活動

- はたマーケット**
 - ・地域で唯一の商店。利用客は1日平均30人。970品目を取り扱い、価格は市内中心部の大手スーパーと同程度。
- 地域内交通「たすけ愛号」**
 - ・波多地区内を無料送迎。1日の平均利用者数は5.2人[2018（平成30）年度]。
- 防災体制の整備**
 - ・「くらしの安心カード」を作成。「災害時連絡網」の整備。毎年の防災訓練を実施。
- 喫茶デー（毎週水曜日）**
 - ・ワンコインでお茶を飲んで歓談（2020年度は中止）。
- 温泉ほかほかわくわくサロン**
 - ・月2回、「満寿の湯」を利用し一緒に食事。
- さんさん教室**
 - ・月2回、「たすけ愛号」で送迎して、健康体操と保健師による体力測定を実施。
- 波多温泉「満寿の湯」運営**
 - ・雲南市からの指定管理を受け、パート職員10名を雇用している。
- EM石鯰づくり**
 - ・協議会女性部がつくった石鯰を、マーケットで販売している。
- 生涯学習活動（自然体験合宿）**
 - ・自然体験をしながら交流を深める。

地域の特徴

- 人口集中と都市化の進んだ地域
- 都市化が進んだ地域
- その他の市街地及び郊外
- 農山村地域
- 高齢化が進んだ地域
- 新住民が多い地域
- 長く住んでいる人が多い地域
- 人が減っている地域

立ち上げ期を支えた支援者

- 自治体
- 地域包括支援センター
- 社会福祉協議会
- 生活支援コーディネーター
- 中間支援NPO
- 町会・自治会
- 地域の有志

団体の法人格

- 任意団体
- 認可地縁団体
- NPO法人
- 社会福祉法人

波多地区の概要

- ・住民人口：287人 132世帯
- ・高齢化率：52.86% (152人)
- ・自治会数：16自治会
- ※以上は団体提供資料より。2020年5月現在。

雲南市掛合町の最西端にあり、市の中心部からは車で40分～1時間かかります。1954年波多村だった頃は1,400人だった人口は大きく減少し、高齢化も進みました。交流センターにある農協のATMの廃止が決まり、年金を引き出せる場所は地区内で郵便局1か所になります。豊かな自然(県立自然公園は老朽化のため休園中)や温泉が魅力です。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

団体沿革

- 1982年(S57) 波多小学校区で波多コミュニティ協議会を結成
- 2008年(H20) 波多小学校 閉校
- 2008～2010年度 「波多いんどりプロジェクト」に取り組む(H20～22年度)
- 2010年(H22)3月 旧波多小学校を拠点に「波多交流センター」開設
- 2014年(H26)3月 地区で唯一の個人商店が閉店
- 10月 波多交流センター内に「はたマーケット」開設

居場所の多様な機能

ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

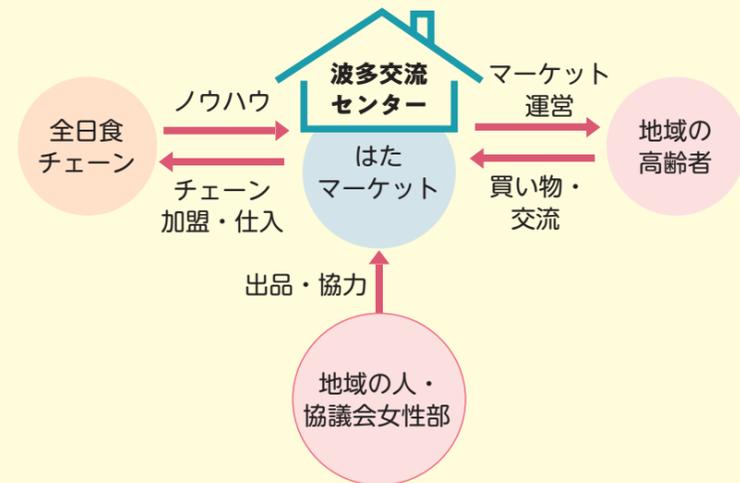
居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

日常生活支援

「はたマーケット」で買い物と交流の復活

- ・2014年(平成26) 地区で唯一の商店が閉店し、車を持たない高齢者の不安が高まりました。波多コミュニティ協議会は「福祉事業」と位置付けて交流センター内に店舗を設ける道を模索、全日食チェーンのマイクロスーパーを出店することが決まりました。
- ・全日食の店舗経営のノウハウに助けられていますが、チェーン加盟のためのコストが大きくなかなか利益は出ません。接客は交流センターの職員が業務の合間に行うことで人件費を抑え、市内中心部の大手スーパーと変わらない価格で日用品を提供しています。
- ・消費しきれない自家用の農作物や協議会女性部でつくっているEM石鹸も販売されています。
- ・店舗の横には喫茶スペースがあり、顔を合わせた利用者同士の交流の場になっています。

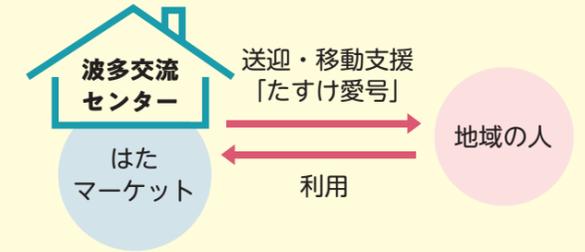


地域づくり

日常生活支援

地域内交通「たすけ愛号」

- ・はたマーケット開設後、高齢者等から「移動手段がないから買い物に行けない」との声があり、送迎支援の検討を開始しました。
- ・車両を取得するため、協議会は認可地縁団体として法人化しました。当初は有償送迎を試みましたが、有償運送法で定める距離や燃料代から輸送料の計算を行う人材を当てることができなかったことから無償運送に切り替え、2019年(平成21)度から波多地区内のみ運行可能なデマンド型乗合タクシー「たすけ愛号」を運行、運転は主に交流センター職員が担当しています。一日あたりの利用者は5.2人(平成30年度)。
- ・2013年度(平成25)の年間利用者は延511人でしたが、「はたマーケット」開設後の2017年度(平成29)は1,491人に増加しました。



地域づくり

地元を離れた応援者とつながる地域通信「はただより」

- ・遠隔地に住む波多小学校卒業生に閉校の記念誌を送ったことがきっかけで、新しいつながりができました。
- ・波多出身者約70名に、コミュニティ情報紙「はただより」を送付しています。豪雨災害があった際には寄付のお願いをしました。2台目の「たすけ愛号」は遠隔地に住む波多出身者からの寄付金で購入できました。

カギとなるアセット

町会役員 民生委員児童委員 野菜、EM石鹸出品者 交流センター職員 (はたマーケットの店員や送迎車の運転を兼務) 地域の人、地域の高齢者	人	雲南市交流センター指定管理料 地域づくり活動等交付金 はたマーケットでの販売収益 送迎用の車両(2台目は遠隔地に住む波多出身者の寄付で購入) 会費・寄付(遠隔地に住む波多出身者)	モノ・資金
波多交流センター(旧波多小学校) はたマーケットと喫茶スペース	場	全日食チェーン(店舗経営ノウハウ) 波多小学校卒業生 雲南市役所関係部局	情報・ネットワーク

名称	波多交流センター・はたマーケット	運営体制	1982年に地域の15の自治会の代表や地域の多様な関係者で発足させた住民発意の組織の体制をほぼそのまま活かして協議会を運営。交流センターには職員5名と施設管理を受託している波多温泉「満寿の湯」にはパートタイム職員10名。「はたマーケット」は交流センター職員が業務の合間に対応。
住所	島根県雲南市掛合町波多459-1		
営業日時	波多交流センター：月～土 8:30-17:00 はたマーケット： 波多交流センター開所時間中随時		
運営団体	地域自主組織 波多コミュニティ協議会(認可地縁団体)		
代表	会長 田原善明		
開設・営業開始	波多交流センター：2010年4月 はたマーケット：2014年10月		



雲南市地域自主組織とその可能性

立教大学コミュニティ福祉学部 原田晃樹

地域自主組織の仕組み

近年、平成の大合併によって大きくなりすぎた基礎自治体の内部に、コミュニティ活動の新しい単位を設ける動きがみられます。地方自治法や合併特例法には「地域自治区」や「合併特例区」等の制度が創設されていますが、自治体が条例を制定し、コミュニティの単位で住民活動の組織化を図っているところもあります。その一つが雲南市の地域自主組織です。

地域自主組織は、住民の主體的な活動の単位であり、従来の町内会等の地縁組織を基盤としつつ、消防団、営農組織、文化サークル、PTA、女性グループ、高齢者の会などを包摂した組織であり、コミュニティ活動の主体として市のまちづくり基本条例に規定されています。概ね小学校区を単位に地域の様々な組織・活動が包摂されているために小規模多機能自治ともいわれます。雲南市の各地域は程度の差はあれいずれも急激な人口減少の中で、従来の地縁・各種活動は担い手不足に陥る反面、自治会は世帯加入であったり、各種団体もその目的や性格によってメンバーが固定化されたりするなどの傾向があるため、役割が特定の人に偏り、かつその人の負担が高まるという弊害がありました。

これに対し、地域自主組織は「一人一票制」の原則の下、事業内容は総会で承認される計画に明記され、財務も透明化されています。また、基本的にやりたいと思う人が部会を通じて活動できるようになっています。地域の様々な人の力がより結集されやすくなったことで、事例10～13にみるように、様々な活動が生まれました。

地域自主組織の運営に必要な財源については、基本的に市の予算で確保されています。地域自主組織には、均等割に面積割・人口割・高齢化率等の基準を加味して「地域づくり活動交付金」が交付されます。全区の交付額は約2億9千万円ほど（1組織当たり900万円程度）となります。地域運営組織は、この財源によって交流センター職員や福祉推進員を自らの裁量で雇用することができます。また、交流センターは地域自主組織に指定管理されています（利用料金制が採られています）。これらの財源を基盤として、事例で掲げているような自主事業を行い収益が出た場合は地域自主組織の収入になります。

また、合併に伴い旧町村単位に置かれ、住民代表によって構成される「地域委員会」が2013年度に廃止され、代わりに「地域円卓会議」が導入されています。これは、地域の単位を地域自主組織に改めるものであるのと同時に、地域自主組織の代表者同士の横の関係を強化し、市の関係部局との協議を行う場です。これにより、よりきめ細かい地域の課題を市が認知するだけでなく、互いの取り組みを学び合う学習の場としても機能するようになっています。加えて、合併以来、支所に地域づくり担当職員が配置され、日常的な支援体制が確保されています。

最近の傾向として、一部の地域では他県出身者がインターンの形で地域自主組織の運営に関

わるケースがあったほか、大学のサークル・ゼミや専門家との交流も生まれています。地域自主組織を通じた地域づくりや地域活性化の取り組みは、関係人口を豊かにする効果もあるようです。

雲南市では、地域自主組織が「住民主体の居場所」をつくりだしている背景には、地域の実情や活動している住民の声に柔軟に対応しつつ、地域自主組織に対して金銭的・非金銭的支援を合併以来一貫して継続させている市の姿勢も大きいといえるでしょう。

過疎地における地域自主組織の可能性

地域自主組織は、住民自身の自主的な活動を前提とし、活動の送り手と担い手が分離せず、同じ立場でともにいられる場です。過疎化が進む地域において、このような住民主体の居場所はとても貴重です。では、地域自主組織のような取り組みを通じて、どうすればそうした居場所は成り立つのでしょうか。各地域の取り組みをみた時、共通する特徴として主に次の2点を指摘することができます。

第一に、地域自主組織が民主的な運営体制の下、様々な地縁組織・グループを包摂するだけでなく、これらとは一線を画した活動も取り込んでいることです。従来の自治会や各種活動は人口減少や高齢化によって担い手不足に陥っていますが、自治会等の地縁組織は世帯加入であり、各種団体もその目的や性格によってメンバーは固定化されているため、役割が特定の人に偏るといった弊害が生じがちでした。地域自主組織は、女性、若者、移住者等、これまで地縁活動の主要メンバーでなかった人たちの参加を促し、各々が対等な関係に立つことで、新しいコミュニティの創造に似た効果が生じているのです。

第二に、地域自主組織の活動を支える有給スタッフが、地域を支える公共人材として機能していることです。一般に、市町村合併は、長期的に圏域の行政職員数の大幅な削減につながるため、行政が現場の細かいところまで目配りすることは難しくなります。こうした中で、地域自主組織の有給スタッフは、住民の意向を踏まえながら地域活動を支える担い手として活動する顔とともに、交流センターの職員として、公的な責務を負って活動する顔も持ち合わせています。いくなれば、公務員がいなくなった地域において、「市民公務員」ともいえる立場で、地域を支える人材として活躍しているのです。

このように、地域自主組織は、新しい自治のしくみとして、これからの過疎地の持続可能性を高める核として機能することが期待されているといえます。

まちのお茶の間 アテラーノ旭

[運営] 特定非営利活動法人アテラーノ旭

生活すべての困りごとに寄りそってくれる、
365日休みなしのまちのお茶の間。

こんな居場所

- ▶戦火をまぬがれた昭和の木造住宅密集地
- ▶20代から70代まで多様な年代のスタッフ
- ▶壁一面を手芸品が彩る、明るい店内



黄色の
店舗テントが
南国の陽ざしのように
鮮やかで、
まるで陽だまりの様
でした。



お弁当を包む
カラフルな風呂敷が、
洗濯されて軒先に
はためいて
いました。



現在の活動

(1) まちのお茶の間

- ・食事と交流スペース提供。定食(550円)、一品物(300円~350円)、コーヒー(250円)、スモールコーヒー(130円)等。
- ・手芸品や絵画の展示、バザー用品や産直野菜の販売。

(2) 配食サービス

- ・弁当の配達(600円)。刻み食、玄米食、おかずのみもあり。
- ・高知市「在宅高齢者配食サービス」。

(3) やさしさのおたすけ

- ・掃除、洗濯、食事の介助、買い物代行、病院の付き添いや送迎等のサポート。1時間1,600円と交通費。

(4) 暮らしの相談

- ・各種手続き相談、育児相談。

(5) 安心して活力ある地域づくり

- ・季節のレクリエーション。
- ・いきいき百歳体操や節分。

「アテラーノ旭」ができるまで

・まちの銭湯がなくなっておきたできごと

2004年(平成16)ころ、高知市旭地域唯一の銭湯が施設の老朽化と利用者の減少により廃業することになりました。当時はまだ風呂がないアパートも多く、遠くの銭湯に通えない高齢者が問題になっていました。

解決策がない中、風呂がないアパートに住む高齢の男性が川で行水をしていたのを見て「放っておけん」と考えた人たちが署名活動を始めました。陳情の結果、高知市によって旭文化センターに入浴サービスが設置されました。

・もっとまちを元気にしたい！

旭区の中心である元町は昭和の時代には商店が続く賑わいがあった地域です。ここで共同保育所を30年以上経営してきた現代表の山中雅子さんを中心に、民生委員児童委員や町会長、診療所の事務長、介護福祉事業所等、一緒に風呂の陳情をしたメンバー10数人が集まり、「もっとまちを元気にしたい」、高齢化したまちでも、高齢者がそれまでの職歴や趣味や特技を活かせる場をつくろうと、話し合いを重ねました。

・地域の人に呼びかけて募金を集め、
空き店舗を改修して居場所をスタート

場所探しの末、ようやく見つかったのが旧街道筋にある、かつては家具の製造販売の店として使われていた古い空き店舗物件です。オーナーの女性は山中さんが運営していた保育所に子どもを預けていたという縁もあり、安い家賃で貸してもらえることになりましたが、居場所としての設備がありません。資金を自分たちで出し合い、足りない分は地域にも協力を呼び掛けて、食事の提供ができるよう水道やガスの設備を整えることができました。こうして2007年(平成19)に「まちのお茶の間アテラーノ旭」がオープンしました。

「アテラーノ」は土佐弁で「私たちの」という意味。食事したりお茶を飲みながら辛いことや嬉しかったことをおしゃべりしたり、ストレスを抱えた人がここに来ることで元気になってボランティアの仲間入りをしたり…まちのお茶の間として多様な人が訪れる場となり、地域に定着してきました。

■ アテラーノ旭の周辺地区の概要 ■

※拠点から半径500mの範囲

- ・住民人口：5,577人 2,784世帯
- ・高齢化率：35.7% (1,992人)
- ・15歳未満の子どもの数：529人
- ※以上は2015年国勢調査より。

高知市の西部にあり、市の中心部とは国道33号やJR四国、路面電車で結ばれる利便性の高い地区です。江戸時代からの街道が通る市街地で、戦火を免れたことから、昭和の面影が残る狭い路地や古い木造住宅が密集していて、少しずつ再開発が行われています。

居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域都市化が
進んだ地域その他の
市街地及び
郊外農山村
地域高齢化が
進んだ地域新住民が
多い地域長く住んで
いる人が
多い地域人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター社会福祉
協議会生活支援
コーディネーター中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

よる可
情報
相談

どんな相談も受け入れる

- 生活困窮やうつ等の精神障害、DV被害を受けた人等、様々な課題のある人の相談に対応しています。困りごとがある本人だけでなく、公的機関や地域の人々からの相談もあります。
- 給付金の受け方や育児に関する相談のほか、

暮らしに関する相談を、精神科クリニックや弁護士、地域包括支援センター、母子支援施設、高齢者介護事業所等と連携しながら一緒に解決策を考えます。

- 専門職からのアドバイスだけでなく、お茶の間で地域の人と交流しながらの情報収集も進めています。

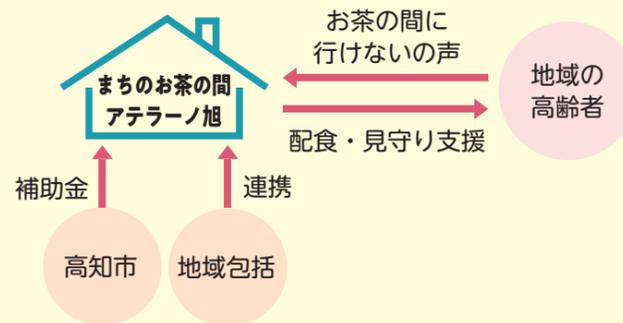
居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

日常
生活
支援

配食時の見守りや、お手紙によるつながりづくり

- 居場所の活動を通じて、生活上の様々な困難を持つ人との出会いがあり、お茶の間に来られない人たちのためにもなにかやりたいたいという声役員の中に出てきました。そんな折、国の緊急雇用対策事業の一環で高知市の「あったかふれあいセンター事業」の委託を受けることになり、2009年（平成21）に配食事業と日常生活支援事業がスタートしました。（あったかふれあいセンター事業は平成25年に終了）。

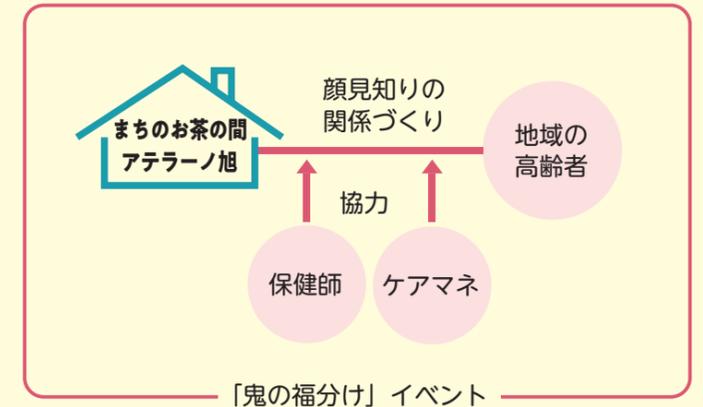


- 配食サービスは昼食夕食を年中無休で配達。元気高齢者を中心とした調理スタッフが栄養バランスを考えた家庭料理をつくっています。条件が合えば高知市在宅高齢者配食サービスが適用されます。配食サービスの利用者は、認知症や難聴、足腰が弱っている等見守りが必要な人が多く、利用する高齢者との関係を大切に、ケアマネジャーや包括支援センターと密に連携するためにも、配達エリアは旭区西部包括支援センター管轄に限定しています。
- 週に1回、献立表に季節折々の話題を手紙にして弁当と共に配達しています。調理スタッフや契約している米農家の話題もつづり、食べる人とつくる人のつながりができるように務めています。また単調になりがちな高齢者の生活に楽しい刺激になるよう、お正月やひな祭り等の行事食も大切にしています。

地域
づくり

地域の高齢者とつながる人気イベント「鬼の福分け」

- 困りごとがあっても、信頼できる人間関係がなければなかなか人には伝えられるものではありません。「助けて」を言える関係づくりのために考えたのが「鬼の福分け」。節分に鬼が福をまいて歩くというイベントです。
- 太鼓をたたきながら青鬼と赤鬼が地域を練り歩き、「誰々さんち福は内」と言いながら、ユーモアのあるメッセージを書いた御札を配ります。最初は200軒ぐらいの訪問でしたが、希望が増えて、今約1,200軒まわっています。
- こうして顔と顔がつながることで、困りごとがあった時にも相談しやすくなります。
- 規模が大きくなってきたこと、当初のスタッフが高齢化してきたことから、今はケアマネジャーや保健師が協力してくれるようになりました。



カギとなるアセット

元保育園を運営していた時に預けた母親や子ども 精神科クリニックの医師 弁護士 農家 ケアマネジャー 保健師 地域の人、地域の高齢者、 地域の子ども	配食サービスの収益 有志の寄付	人	モノ・資金
アテラーノ旭の食堂（元空き店舗）	地域包括支援センター 母子支援施設 高齢者会議事業所 高知市	場	情報・ネットワーク

名称	まちのお茶の間 アテラーノ旭	開設・営業開始	2007年11月
住所	高知県高知市元町44	運営体制	有給職員20名。1日の体制は、配食の調理3名、配達5名、食堂3名。
営業日時	9:00-17:00（日・祝祭日休日） 配食事業は365日無休		
運営団体	特定非営利活動法人 アテラーノ旭		
代表	理事長 山中雅子		

奈半利町あったかふれあいセンター

[運営] 奈半利町社会福祉協議会

地域毎に独自のサテライト居場所をつくりながら、
拠点の居場所とも連携して生活支援に取り組む社協運営の居場所。

こんな居場所

- ▶町の中心部にある「あったかふれあいセンター」
- ▶元デイサービスを居抜きで活用
- ▶顔なじみが集い楽しむ「サテライト」

和室もリビングも、
広々として、
高齢者と子どもが一緒でも、
ストレスなく
過ごせそうだと
感じました。



現在の活動

- ミニデイサービス（介護保険事業外）**
 - ・月曜～金曜 要介護度2の人まで利用可。介護予防の体操や音楽療法。
 - ・入浴サービス（入浴時の見守り支援として600円）、昼食代（400円）
 - ・必要な方への送迎
- サロン、交流**
 - ・わらびの会喫茶 / 脳卒中後遺症患者の集い 母子の集い / ビーズ教室 / リフォーム教室（全て週1回）
 - ・ウエルカムランチ（月1回）
- 配食サービス**
 - ・月曜～金曜の昼食、全町域が対象。20食程度。
- 訪問**
 - ・生活支援コーディネーターと生活支援員が訪問。
- 相談 随時**
- 生活支援事業**
 - ・買い物等の困りごとを支援。
- 地域でのサテライト型のサロン事業**
- 子どもの居場所**
 - ・乳幼児の一時預かり 予約制。1日3人まで（3時間まで500円、延長1時間100円）。

「あったかふれあいセンター」のサテライト展開

- ・2009年（平成21）、奈半利町保健福祉センターを拠点とした「あったかふれあい事業」が始まりました。「あったかふれあい事業」は過疎化・高齢化が進み資源が乏しい中山間地の地域の実情に合わせ、国の緊急雇用対策を活用して高知県が整備したものです。利用者を限定しない全世代対応で、高齢者・障害者・子どもや子育て中の親などが、センターで提供される日中の居場所や相談・生活支援サービスを利用しながら互いに交流し、新しい支え合いを形成していこうとする取り組みです。
- ・奈半利町社会福祉協議会が町から事業を受託し、「あったかふれあいセンター事業」と「生活支援体制整備事業」「生活困窮者自立支援事業」「日常生活自立支援事業」を連携させて事業を運営しています。
- ・町中心部のあったかふれあいセンターでミニデイサービス、サロン等の交流事業を行うとともに、町内の各地区には交流と介護予防を目的としたサテライト拠点を設けています。サテライト拠点は地域住民による運営で、ニーズの高い地域や運営を担える住民がいる地域から順次設置を進めていて、2020年（令和2）現在14のサテライト拠があります。

自分たちでつくる男の居場所（法恩寺地区サテライト）

法恩寺地区サテライトでは介護予防体操やお茶会が行われていましたが、センターのコーディネーターは男性の参加が少ないことを課題に感じていました。60代70代の定年退職後の男性に活動を盛り上げてもらうため、地域の見守りマップづくりへの参加に声をかけたり、中高生も参加する三世代大会の企画などで関係をつくる中で、男性の住民から「男性陣で料理をつくって高齢者や子どもにふるまいたい」という声上がり、男性グループが料理をつくり、高齢者・小学生・女性らが参加する「あったか法恩寺食堂」が始まりました。

あるもので地域の魅力づくり（平地区サテライト）

人口約50人の平地区は非常に深い山間部です。サテライトで行う介護予防体操に来ていた利用者から「体操以外のことをしてみたい」と希望があったことがきっかけで、「かかしの里」で有名な隣の北川村へかかしづくりを習いに行くことになりました。

みんなで作ったたくさんのかかしを収穫後の田畑で育てたコスモスの中に配置したところその景観が「平のかかし」として話題になり、見に来る観光客もありました。かかしづくりを楽しみながら地域の魅力を発信するやりがいにつながっています。

■ 奈半利町の概要 ■

- ・住民人口：3,137人 1,693世帯
- ・高齢化率：44.2%（1,387人）
- ・15歳未満の子どもの数：269人
※以上は住民基本台帳より。2020年1月現在。
- ・学校施設：中学校1、小学校1、認定こども園1

高知県の東部にあり、南西部は太平洋に面して、北東部は四国山地につながり、起伏に富んだ地形が特徴です。「土佐日記」に記されたり、約1,300年前につくられたという「野根山街道」があり、古くは海路と陸路、両方の交通の要所でした。現在の主な産業は製材、農業、漁業です。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域都市化が
進んだ地域その他の
市街地及び
郊外農山村
地域高齢化が
進んだ地域新住民が
多い地域長く住んで
いる人が
多い地域人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター社会福祉
協議会生活支援
コーディネーター中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

交流

多世代で行う防災訓練 (法恩寺地区サテライト)

・サテライトの活動を通して普段は交流が少ない高齢者と子どもたちの関係ができ、住民が意欲的になりました。「子どもと一緒にやるなら」と地域の60代70代の男性が主体となって防災訓練を年5回開催しています。

・奈半利町は南海トラフ地震で大きな津波被害が予測されています。住民、町役場、地域包括支援センターと連携して災害時要配慮者の避難訓練を行い、避難路の見直しも住民が主体的に行うようになりました。
・避難訓練に参加することで日頃の体力づくりの大切さに気付く人も多く、介護予防体操への参加が増えることにもつながっています。

居場所から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

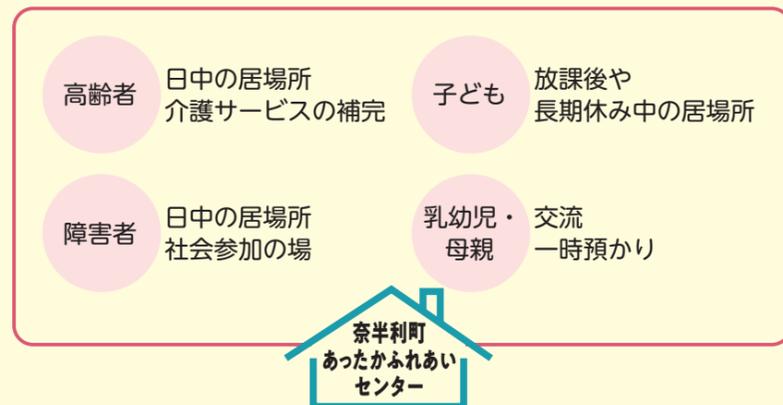
日常生活支援

必要な人が利用できる 地域ぐるみの介護・子育て

・センターは、平日の朝10時から午後3時まで、要介護2までの高齢者を受け入れています。高齢者は健康体操、食事、入浴等で一日を過ごします。(食事400円、風呂600円：入浴介助なし)。利用には町役場でのアセスメントが必要ですが、介護保険の通所介護サービスとの併用・適用外の人、若年性認知症で行き場所の無い人、生活困窮の人など多様な人が利用しています。現在、利用者は1日15～17人程度。必要な人は送迎し、拠点利用のついでに買い物にも応じるなど、山間部で移動困難地域だから

こそ必要な対応もしています。障害があり日中見守りが必要な人や制度のすき間にある人も日常生活自立支援の支援員と密接に連携して受け入れています。

・配食サービスは1食400円で、町内全域で20食程の昼食を配っています。買い物困難な地域では、1食の弁当を2回に分けて食べる高齢者もいてニーズが高いサービスになっています。
・障害のある人や子育て中の母親のためのサロン等の交流会は、地域の誰でも利用できます。ミニデイサービスのスペースは放課後や長期休み中の小学生の居場所や乳幼児の一時預かりにも利用されます。

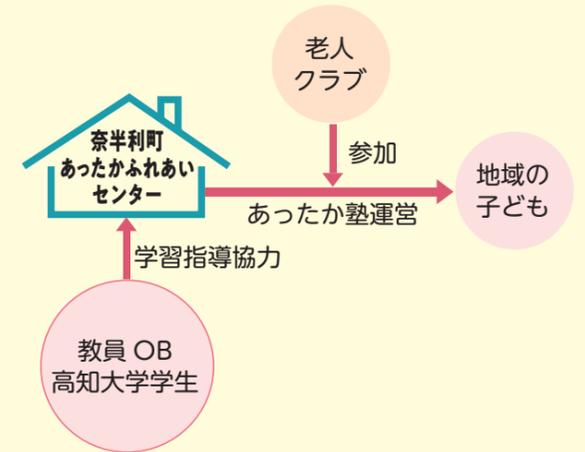


日常生活支援

不登校の子どもや、高校の中退防止支援「あったか塾」

・奈半利町には不登校の子どもが多く、高校に進学できなかったりすぐに辞めてしまう子どももいます。センターでは子どもが安心して過ごせる居場所「あったか塾」を設け、月2回(第2・第4土曜)子ども食堂と学習支援を行っています。保護者同伴の幼児から高校生まで1回約20人の子どもが参加しています。

・学習支援に高知県立大学の学生2名と教員OB1名が協力し、宿題をみたりプリントを出したりしています。学習支援への参加は高知県立大学の単位取得の対象になっていて、学生は高い意欲をもち活動に参加しています。学生の発案で始めた「屋台村」は子どもも盛り上がるプログラムになっています。
・地域ボランティアの参加もあります。老人クラブの会員とセンターの農園で育てた芋で焼き芋をしたり、老人クラブのスポーツ教室に子どもたちが混じることも。また、お金を学ぶ「お小遣いゲーム」のプログラム実施に高知生協が協力をしています。
・生活保護世帯、母子・父子家庭、発達障害の子どもが過半数以上で、学校や保健師と連携を取りながら居場所として見守りをしています。今後は不登校の子どもへの働きかけや、中退防止、貧困の連鎖の防止のための取り組みを強化したいと考えています。



カギとなるアセット

町会役員/老人クラブ 民生委員児童委員 高知県立大学(子どもの学習支援) 地域の人、地域の高齢者、地域の子ども 60代70代の男性 若年性認知症の人、生活困窮者、生活保護世帯、母子父子家庭、発達障害のある子ども 乳幼児と保護者	人	高知県あったかふれあいセンター事業費補助金	モノ・資金
奈半利あったかふれあいセンターのミニデイスペース 敷地内にある農園 各地区のサテライト	場	地域包括支援センター 町役場 小中高校(子どもの見守り、情報交換)	情報・ネットワーク

名称	奈半利町あったかふれあいセンター	運営体制	コーディネーター1名、サロン担当3名、サテライト・訪問担当3名、看護師1名、配食サービス担当1名、パート職員(配食サービス)1名。社会福祉協議会のスタッフ全員で週に1回ミーティングを行い、あったかふれあいセンターのコーディネーターと生活支援コーディネーターがそれぞれ気づいたことを共有している。
住所	高知県安芸郡奈半利町乙1269-1		
営業日時	月～金 9:00-17:00 サテライトは各集会所で週1～2回開催		
運営団体	社会福祉法人 奈半利町社会福祉協議会		
代表	会長 中島二男		
開設・営業開始	2009年7月		

農村交流施設 森の巣箱

[運営] 森の巣箱運営委員会

廃校になった小・中学校を地域おこしの核として甦らせた、
山間集落の宿泊型交流拠点

こんな居場所

- ▶ 小さな木造の校舎が丸ごと居場所
- ▶ 商店の奥に居酒屋風交流スペース
- ▶ 地域外からの宿泊者で、予想外に賑わう



山道を登っていき
トンネルを抜けると、
緑の中に校舎が現れ、
テラスで待っていていた
施設長が手を振って
くれました。

現在の活動

(1) 見守り活動

- ・住民の情報を記載した「お守りカード＝緊急連絡カード」を作成。一人暮らしの人は、家族の連絡先や、集落の人で気にかける人等を記載。

(2) 買い物支援

- ・拠点でコンビニエンスストアを運営。

(3) 交流

- ・拠点で居酒屋と食堂を運営。

(4) 宿泊施設

- ・拠点で宿泊施設を運営。

(5) 仕事の創出

- ・シシトウの選果パック詰め作業を、高齢者の仕事として行っている。通称「かせぐデイサービス」。
- ・居場所の宿泊や食事づくりのスタッフも有償。

(6) ホール運営

- ・昔の講堂「やまがらホール」は、現在、結婚式場、合宿所として活用。県外から5組が結婚式を挙げている。
- ・日常的に介護予防体操を実施。

(7) イベント運営

- ・季節毎のイベントを運営。県外からの観光客だけでなく、集落の人の交流の場にもなっている。

(8) 介護予防体操

- ・社協の支援で、生き生き体操実施。

(9) 環境整備

- ・県道の清掃業務の受託。
- ・果樹木の植樹。

「森の巣箱」ができるまで

・人口減で集落が消滅してしまうのではないか、という危機感

「森の巣箱」がある高知県津野町はかつて林業で栄えましたが、斜陽に伴い人口減が続きました。1983年（昭和58）には村唯一の小・中学校が廃校、その後、唯一の商店がなくなり、地域の活気は失われていきました。「このままでは集落が消滅してしまう」という危機感から「できることからやろうぜよ」と、道路周辺を覆っている支障木を伐採。山林所有者との交渉から伐採まで全て自分たちの手で行い、明るくなった集落に「自分たちにもできる」という自信が芽生えました。

1999年（平成11）、15人ほどのメンバーで床鍋地区開発検討会発足。「主人公は住民」「行政はサポート」と二人三脚が始まりました。

・店が欲しい、仲間と一緒に飲む場所が欲しい

翌年、若いメンバーを中心とした「床鍋とことん会」を発足し、ワークショップで意見を出しあいました。ここでまとめた基本計画が、廃校舎を活用した取り組みに実を結ぶこととなります。

それまでの一番の困りごとは「店がない」こと。買い物には一番近い須崎市の店まで車で30分かけて行く必要がありました。仲間が集まっても飲む場所もありませんでした。計画策定にあたり宿泊施設も盛り込みました。観光客を呼び込むめばしい観光資源はないものの、都会に出た人が帰省した時に泊まる宿になればという思いからです。

小・中学校が廃校になってから約20年校舎は使われないままでしたが、ここにコンビニエンスストアがあったら、居酒屋があったら、大勢の人が交流していきいきと暮らすきっかけになると考えました。

・建物改装は行政、運用は住民みんなで支えるしくみで交流拠点が誕生

旧床鍋小中学校は県補助金と葉山村（当時）が改築費を負担し農村交流施設「森の巣箱」に生まれ変わりました。運営は集落からなる「森の巣箱運営委員会」が行うことになりましたが、施設を運営するための備品整備にかかる費用を試算すると、400万円が必要でした。集落の全世帯に出資を呼びかけ、また継続的に運営するために、世帯毎に最低購入金額を自己申告してもらって購買協定を結び、全40戸で120万円程度の売上が確保できると計算しました。

こうして「森の巣箱」は集落コンビニ・居酒屋・宿泊施設を持つ地域拠点として、2003年（平成15）にオープンしました。

■ 床鍋地区の概要 ■

- ・住民人口：89人 40世帯
- ・高齢化率：44.9%（40人）
- ・15歳未満の子どもの数：7人
- ※以上は2015年国勢調査より。

津野町は高知県の中西部に位置し、2005年に葉山村と東津野村の合併で誕生しました。面積の90%が山林で四万十川の源流があります。床鍋地区は町役場のある中心部からさらに約5km山間部に入った集落で、かつては林業で栄え、1960年代には300人以上が暮らしていましたが、2020年現在は75人にまで減少しています。



居場所周辺の環境マップ
(国土地理院、カシミール3D)

地域の特徴

人口集中と
都市化の
進んだ地域都市化が
進んだ地域その他の
市街地及び
郊外農山村
地域高齢化が
進んだ地域新住民が
多い地域長く住んで
いる人が
多い地域人が減って
いる地域

自治体

地域包括
支援センター社会福祉
協議会生活支援
コーディネーター中間支援
NPO

町会・自治会

地域の有志

立ち上げ期を支えた支援者

団体の法人格

任意団体

認可地縁
団体

NPO法人

社会福祉
法人

居場所の多様な機能 ここでは多様な機能の中から一部を記載します。

居場所 で ～ニーズをみつけてつなげる～

「お困りごと」「やってみたいこと」のニーズをみつけて、解決につなげています。

地域づくり 誰にでも役割がある、全住民が支える地域づくり

・森の巣箱は集落で運営する施設です。また、集落住民全員がオーナーです。運営体制は会長、営業部、業務部の三役の下に、居酒屋部、環境部、温泉部、応援部、体験部、調理部が組織され、部長は地区で選任した役員があ

たっています。コンビニ、調理の職員として常時2、3名の住民がパートで雇用されています。

・集落に住む全員が参画しないと意味がないと考えています。「もう年だから」という高齢者には、応援部に入ってもらっています。

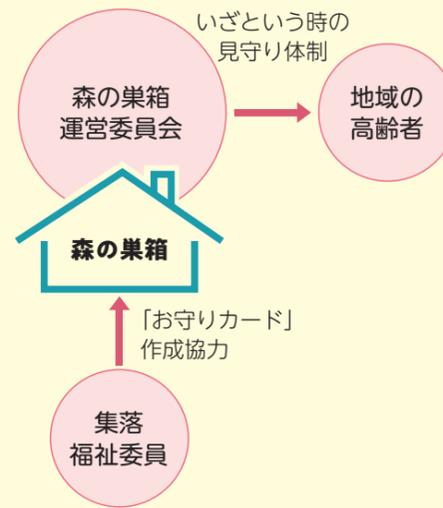
居場所 から 新しい事業やしくみの創出 ～地域資源とつながり生み出す～

地域資源とつながることで、新しい活動が生みだされています。

健康寿命をのばす 緊急連絡先を記載した「お守りカード」で見守り

・森の巣箱のオープンから10年がたち、これまでの活動を検証するため、集落福祉委員の応援を得て聞き取り調査をしたところ、隣近所とさえ話さなくなり「なんだかいつも不安」という一人暮らしの高齢者の声があがってきました。

・求められているのは「緩やかな見守りと、いざという時の安心」だと気づかされ、「お守りカード＝緊急連絡カード」を作成することになりました。世帯毎に個人情報に記載したもので、一人暮らしの場合は親族の連絡先のほか、集落内で気にかける人も決めました。森の巣箱運営委員会がカードの管理を行い、いざという時に役立てています。



出番としごと 稼げるデイサービス シシトウ選果

・施設長の 大崎 登さんは元農協勤務の関係から、農協がシシトウのパック詰め作業をする人を探していることを知りました。

・大崎さんは常々、高齢者はサービスを受けるだけでなく、最後まで役立つ存在として、豊富な経験や知恵を活かせる環境づくりが大切と考えていました。

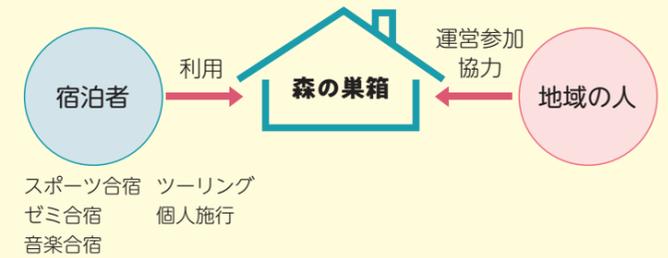
・「『普通のデイサービス』と『稼げるデイサービス』どちらが良いですか」と高齢者に聞いたところ、「稼げる方がいい」との返事でした。

・集会所を選果場にしてスタート。シシトウは通年収穫ができるので、安定した仕事となっています。



交流 合宿やツーリングの宿泊客で賑わう宿泊所の運営

・帰省者が宿泊することを想定していた宿泊施設ですが、オープン早々、高校野球部の合宿が入りました。当初の事業計画では寝具の購入等は念頭に入れておらず、スタッフが各家から客用布団を持ちこむことで準備を進めました。



・自然豊かな環境と廃校舎を利用した趣のある施設は、スポーツ合宿やオートバイツーリングでの宿泊者等呼び込み、年間600～1000人が利用するまでになりました。ここで結婚式を挙げるカップルもあり、利用は多岐にわたっています。住民の発案で始まった「ホテルまつり」も大勢の来場者を集めています。



・また、音を気にしなくて良い環境であるため、楽器の合宿に利用する音楽家もいて、最終日には住民も参加するコンサートが恒例となっています。

カギとなるアセット

集落住民 パートスタッフ 集落福祉委員 一人暮らしの高齢者、気にかける人 地域の人、地域の高齢者、地域の子ども	森の巣箱宿泊料収益 集落コンビニ シシトウ選果パック詰め作業の収益 (農協より受注)	人	モノ・資金
森の巣箱 (廃校になった小中学校。県補助金で建物改装) 森の巣箱のコンビニ、飲食・宿泊スペース (集落の人、宿泊客) 集会所 (シシトウ選果パック詰め作業) やまがらホール (元講堂。宿泊客の結婚式、健康体操)	津野町社会福祉協議会 津野町役場 高知県	場	情報・ネットワーク

名称	農村交流施設「森の巣箱」	開設・営業開始	2003年4月
住所	高知県高岡郡津野町床鍋85	運営体制	床鍋地区住民の全員がオーナー。役員は地区から選任。2名が常駐体制で、食事づくりは地域の女性がローテーションで担当。
営業日時	毎日 10:00-18:00		
運営団体	森の巣箱運営委員会		
代表	施設長 大崎登		



あったかふれあいセンター／集落活動センター

立教大学コミュニティ福祉学部 原田晃樹

あったか ふれあい センター

あったかふれあいセンターとは、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もが気軽に集い、必要なサービスを受けることができる地域福祉の拠点です。その目的は、地域ニーズの把握や課題に対応した小規模多機能支援拠点としての活動を推進することと、要配慮者の見守りや生活課題に対応した支え合い活動などを行う地域福祉活動を推進することです。中山間地では採算が採れないために全国一律の基準による福祉制度サービスが参入しにくいことも、本事業が構想されたきっかけでした。

高知県が2009年度に国の「ふるさと雇用再生特別交付金」を活用して事業化し、国の交付金事業終了後の2012年度以降は県独自の補助事業として継続しています。県が経費の2分の1を市町村に補助し、残りを市町村が負担し、市町村が事業者同事業を委託します（市町村事業として実施）。県の補助金交付の対象は、①コーディネーターとスタッフの person 費（コーディネーター1人につき580万円以内、スタッフ1人につき310万円以内）、②その他の経費（主に運営経費として person 費上限額合計の25%以内）です。配置される人員は、コーディネーター1人とスタッフの2人が基本とされています。

あったかふれあいセンターは、主に次の3つの機能を果たすことが求められています。

第一に、インフォーマルサービスの提供です。誰もが自由に過ごすことができる場づくりを基本としつつ、見守りが必要な人の一時預かり、拠点を訪れる人の送迎、就労支援や生きがいがづくり活動などを行います。

第二に、地域の見守りネットワークの構築です。相談・訪問活動を通じて地域の要支援者を早期に発見して早期に必要なサービスにつなぐ活動です。

第三に、生活支援活動です。何らかの生活支援が必要な人に対して、移動手段の確保や配食等の必要な支援を行うほか、地域の生活課題やニーズに応じた生活支援サービスのしくみづくりやコーディネート、地域での支え合いのしくみづくりなどを行います。

2019年6月現在、31市町村で50の事業所が開所しています。実際の活動は地域の特性を反映してバラエティに富んでいますが、いずれにも共通するのは、どの地区のコーディネーターも、高齢者だけでなく、多世代の居場所としての性格を持たせようと様々な工夫を施していることです。コーディネーターが苦勞して地域のネットワークをつくり上げてきた結果といえますが、今後は、こうした有能な人材をいかに地域につなぎ止められるかが課題といえそうです。

集落 活動 センター

高知県は中山間地が9割を超え、深刻な人口減少に直面しています。そうした中で、県は集落機能の維持や地域活動の担い手確保等の課題を抱える集落の維持・再生や活性化を目的として、2012年度より集落活動センター推進事業に取り組んでいます。

集落活動センターとは、人口減や高齢化が進む集落を維持するために廃校等を生活支援拠点として整備するもので、地元の自治組織、社会福祉法人、NPO法人等が運営主体となります。運営組織には、廃校等の改修費や設備費等初期投資を含め、立ち上げから最初の3年間で最大6千万円が、4～6年目についても年1千万円を上限に補助金が交付されます。県と市町村がそれぞれ2分の1ずつ負担します。集落機能の維持が目的ならば助成金の使途に制限はなく、センターの施設整備のほか、高齢者の見守りサービス、食料品の店舗運営・移動販売、高齢者宅への食料品宅配、有償運送、農地や山林の共同管理、地元の産品を使った特産品づくり、防災訓練等も対象になります。

これらの活動については運営主体が住民の意見を聞きながら自主的に企画・実施します。行政側から事業について指示されることはありません。その代わりに、県は産業振興と連動した中山間地域振興を全県で実施する「地域支援企画員」を市町村に常駐させ、集落活動センターの立ち上げ・運営等の取り組みへの支援を行う体制を整備しています。2018年度には7ブロックに副部長級7人、課長補佐級17人が配置されるとともに、市町村に駐在する地域支援企画員40名が配置されています。

さらに、センターの運営を担う人材を「高知ふるさと応援隊」と名付けて県内外から広く募集しています。高知ふるさと応援隊とは、大都市の住民を市町村が臨時雇用する国の「地域おこし協力隊」の“高知県版”で、県は一部の経費について財政支援を行っています。集落活動センターの運営を仕事として担う人材を外部から募ることにより、新しい地域の担い手を確保・育成しようとしているのです。

2000年4月現在61もの集落活動センターが開所しています。県は将来的にその数を150ほどに増やす方針です。この事業で特筆すべきは県の力強い支援体制のもとに成り立っていることです。中山間地を多く抱え、過疎化に悩む地域の多くは、地域の力だけではどうにもならないところにまで追い詰められています。高知県では県職員が自ら地域に入り、地域の目線で住民の主體的な活動を後押ししつつ、広域的な視野に立って施策化を推進するという役割を担っています。これからの県が果たすべき役割を考える上でも貴重な事例といえるでしょう。

参考 地域特性の考え方

① 「居場所のある地域」の指す範囲について

本誌での「居場所のある地域」についての考え方は、以下の3通りになりました。

①自治会・町会、地区社協と関係の強い居場所、又は、居場所設置時に行政区画を意識した等の居場所については、当該地区を「居場所のある地域」として扱いました。

※おおよその住所を使用しているため、自治会区域の境界によって必ずしも自治会・町会のエリアと一致しない部分もあります。

(本誌での呼び方)

地域食堂ゆめみ〜る	幌別鉄南地区連合町内会のエリア(登別市)	幸町、幌別町	幌別鉄南地区
美まもりカフェ	新代田地区(世田谷区北沢地域)	代田(4~6丁目)、羽根木、大原	新代田地区
ほっとさこんやま	左近山連合自治会のエリア(横浜市旭区)	左近山	左近山地区
実家の茶の間・紫竹	紫竹地区(新潟市東区と中央区にかかる)	東区紫竹(2~7丁目) 中央区紫竹	紫竹地区
にしかんの茶の間	巻地区(新潟市西蒲区)	巻甲、巻乙、堀山新田	巻地区
新市交流センター	新市地区(雲南市木次町)	木次町新市	新市地区
鍋山交流センター	鍋山地区(雲南市三刀屋町)	乙加宮、根波別所、里坊、殿河内	鍋山地区
中野交流センター	中野地区(雲南市三刀屋町)	神代、六重、中野、須所、坂本	中野地区
波多交流センター	波多地区(雲南市掛合町)	波多	波多地区
奈半利町あったかふれあいセンター	奈半利町(高知県)	奈半利町	奈半利町
森の巣箱	床鍋地区(高知県津野町)	貝ノ川床鍋	床鍋地区

②テーマ型NPOが運営する居場所については、居場所から半径0.5kmの円内を「居場所のある地域」として扱いました。

(本誌での呼び方)

ふれあいサロン・あかねサロン	あかねサロンから半径0.5kmの範囲(仙台市若林区)	あかねサロン 周辺地区
ユニバーサル・ステーション	ユニバーサル・ステーションから半径0.5kmの範囲(荒川区)	ユニバーサルステーション 周辺地区
東灘こどもカフェ「こもれど」	東灘こどもカフェ「こもれど」から半径0.5kmの範囲(神戸市東灘区)	東灘こどもカフェ 周辺地区
まちのお茶の間 アテラーノ旭	まちのお茶の間 アテラーノ旭から半径0.5kmの範囲(高知市)	アテラーノ旭 周辺地区

③運営団体はテーマ型NPOですが、居場所が運営団体の所有する施設「かじまちの家」内にあり、「鍛冶町」と通称される地域との関係性から、本誌では鍛冶町と呼ばれる住所を「鍛冶町地区」として扱いました。

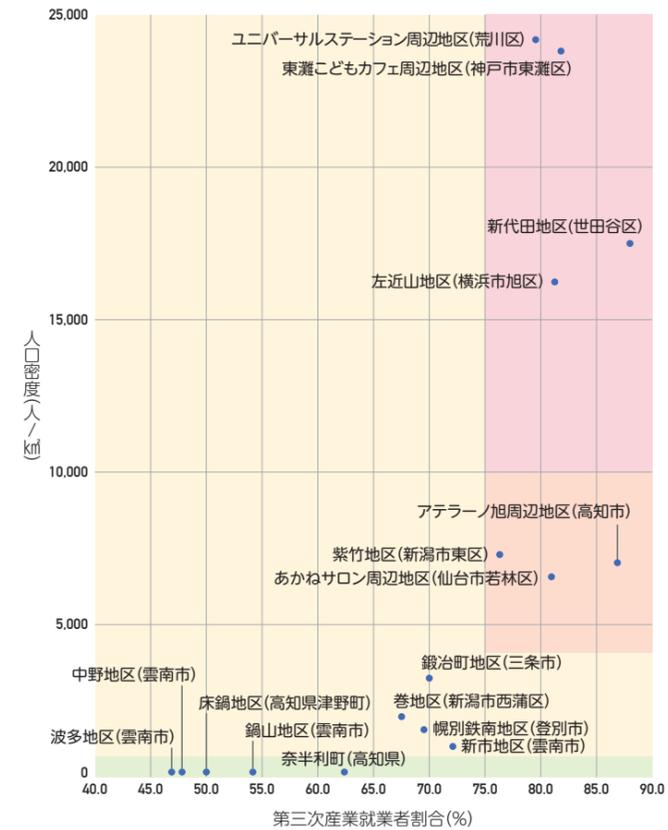
(本誌での呼び方)

コミュニティカフェ・ふらっと	鍛冶町(三条市)	本町5丁目、6丁目	鍛冶町地区
----------------	----------	-----------	-------

② 「都市的」と「農村的」(本誌での考え方)

地域特性を知るために、地域に住む人の第三次産業就業者割合と人口密度を指標に分けることを試みました。

本誌における4つの分け方(P8も参照ください)



第三次産業(商業、飲食、金融等)で働く人が多い地域ほど「都市的」な地域で、それ以外の産業(製造業、農業、林業、漁業など)で働く人の割合が増えて、人がまばらになる地域ほど「農村的」という整理をしました。

グラフの右上にいくほど「都市的」で左下にいくほど「農村的」な地域という見方です。

- ①人口集中と都市化の進んだ地域
人口密度が10,000人/km以上で第三次産業就業者割合が75%以上の地域。
- ②都市化の進んだ地域
人口密度が4,000人/km以上10,000人/km未満で第三次産業就業者割合が75%以上の地域。*1
- ③その他の市街地及び郊外
①と②に含まれる場合を除く、人口密度が500人/km以上の地域。*2
- ④農山村地域
人口密度500人/km未満の地域。本誌であてはまる5地域はいずれも特定農山村法の「特定農山村地域」に含まれるので、農山村地域としました。

*1 都市的地域を定めるDID(人口集中地域)の定義が、人口密度が4,000人/km以上の国勢調査基本単位数が互いに隣接してそれらの隣接した地域の人口が5000人以上になる地区であることを参考にしました。
*2 農林水産省による農業地域類型の定義において「人口密度500人/km以上」を「都市的地域」の要素としていることを参考にしました。

居場所名	地域	第三次産業就業者割合(%)	人口密度(人/km)	住民人口(人)	面積(km)
地域食堂ゆめみ〜る	幌別鉄南地区	69.7	1,313	2,195	1.67
ふれあいサロン・あかねサロン	あかねサロン周辺地区	81.4	6,758	5,308	0.79
美まもりカフェ	新代田地区	87.7	17,597	25,132	1.43
ユニバーサルステーション	ユニバーサルステーション周辺地区	79.7	24,239	19,037	0.79
ほっとさこんやま	左近山地区	81.2	16,265	8,719	0.54
実家の茶の間・紫竹	紫竹地区	76.2	7,231	6,649	0.92
にしかんの茶の間	巻地区	67.8	1,833	12,023	6.56
コミュニティカフェ・ふらっと	鍛冶町地区	70.0	3,159	613	0.19
東灘こどもカフェ「こもれど」	東灘こどもカフェ周辺地区	82.2	24,137	18,957	0.79
新市交流センター	新市地区	72.2	728	533	0.73
鍋山交流センター	鍋山地区	54.4	52	1,258	24.24
中野交流センター	中野地区	48.2	29	671	23.33
波多交流センター	波多地区	47.3	11	317	28.30
まちのお茶の間 アテラーノ旭	アテラーノ旭周辺地区	86.6	7,101	5,577	0.79
奈半利町あったかふれあいセンター	奈半利町	62.7	117	3,326	28.37
森の巣箱	床鍋地区	50.0	11	89	8.08

※2015年国勢調査小地域統計を参照して作成。事例ページの記載とは一致していない場合があります。

参考 地域特性の考え方

③ 高齢化

地域の高齢者数、高齢化率、後期高齢者が住民全体に占める比率を考えました。

居場所名	居場所のある地域	高齢化		高齢化と世帯			
		高齢化率	後期高齢者比率	三世同居世帯割合	高齢者のいる世帯割合	高齢者のみの世帯割合	独居高齢者世帯割合
地域食堂ゆめみ〜	幌別鉄南地区	34.3	15.8	2.5	51.7	34.8	20.9
ふれあいサロン・あかねサロン	あかねサロン周辺地区	22.0	11.2	—	34.0	—	—
美まもりカフェ	新代田地区	21.8	10.9	0.7	22.9	14.2	7.5
ユニバーサルステーション	ユニバーサルステーション周辺地区	27.1	13.3	—	38.8	—	—
ほっとさこんやま	左近山地区	44.1	21.2	1.3	60.9	41.6	21.6
実家の茶の間・紫竹	紫竹地区	23.7	11.4	5.6	34.5	17.1	9.0
にしかんの茶の間	巻地区	31.8	17.1	12.8	52.6	22.8	11.9
コミュニティカフェ・ふらっと	鍛冶町地区	39.5	22.4	20.3	70.8	31.1	14.2
東灘こどもカフェ「こもれど」	東灘こどもカフェ周辺地区	19.4	8.3	—	29.6	—	—
新市交流センター	新市地区	39.0	23.1	25.1	76.0	26.9	7.6
鍋山交流センター	鍋山地区	41.3	26.1	27.9	81.5	26.0	11.3
中野交流センター	中野地区	39.9	22.7	23.8	80.2	27.8	13.2
波多交流センター	波多地区	52.4	39.1	10.8	79.9	45.3	25.2
まちのお茶の間 アテラーノ旭	アテラーノ旭周辺地区	35.7	19.5	—	49.2	—	—
奈半利町あったかふれあいセンター	奈半利町	42.9	25.5	3.2	59.4	38.0	23.5
森の巣箱	床鍋地区	44.9	31.5	12.5	80.0	40.0	27.5

(数値は全て2015年国勢調査小地域統計を参照)

高齢化

「高齢化が進んでいる地域」のインデックス

- 高年齢化率が35%以上の地域
- 高年齢化率が40%以上の地域
- 後期高齢者が全体に占める比率が25%以上の地域 (4人に1人以上が後期高齢者)

高齢者と世帯

- 高齢者のいる世帯が50%以上の地域 (2軒に1軒以上に高齢者)
- 高齢者のみの世帯が33.3%以上の地域 (3軒に1軒以上が高齢者のみ)
- 高齢者のみの世帯が20%以上の地域 (5軒に1軒以上が高齢者の独り暮らし)

高齢化率が高くても三世同居世帯が多くて独居高齢者は比較的少なかったり、高齢化率も独居高齢者世帯数もどちらも高かったり、地域の様子は様々です。

④ 定住性と人口減少

同じ市町に住んで5年未満の人の数から「新住民が多い地域」を、20年以上又は生まれた時から住んでいる人の数から「長く住んでいる人が多い地域」を考えました。また、2005年から2015年の10年間でどのように人の数が変わったかをみました。

居場所名	居場所のある地域	定住性		人口減少		
		同自治体に住んで5年未満の人口割合 (5歳未満人口も含む)	「同自治体に住んで20年以上の人口」及び「出生時から住んでいる人口」の合計が占める割合	2005年を1としたときの2015年の増減率 (▲はマイナス)	2015年の人口	2005年の人口
地域食堂ゆめみ〜	幌別鉄南地区	17.1	50.0	▲0.16	2,195	2,604
ふれあいサロン・あかねサロン	あかねサロン周辺地区	※33.0	※33.9	▲0.08	5,308	5,758
美まもりカフェ	新代田地区	31.2	38.8	▲0.01	25,132	25,398
ユニバーサルステーション	ユニバーサルステーション周辺地区	※26.2	※39.0	0.01	19,037	18,895
ほっとさこんやま	左近山地区	15.7	53.9	▲0.17	8,719	10,550
実家の茶の間・紫竹	紫竹地区	29.4	42.9	▲0.04	6,649	6,958
にしかんの茶の間	巻地区	20.2	57.0	▲0.04	12,023	12,583
コミュニティカフェ・ふらっと	鍛冶町地区	11.9	73.0	▲0.21	774	613
東灘こどもカフェ「こもれど」	東灘こどもカフェ周辺地区	※28.6	※31.2	0.12	18,957	16,988
新市交流センター	新市地区	17.7	64.8	▲0.11	533	602
鍋山交流センター	鍋山地区	8.6	78.5	▲0.17	1,258	1,508
中野交流センター	中野地区	5.1	83.6	▲0.21	671	851
波多交流センター	波多地区	4.4	85.8	▲0.33	317	475
まちのお茶の間 アテラーノ旭	アテラーノ旭周辺地区	※24.2	※44.1	▲0.11	5,577	6,287
奈半利町あったかふれあいセンター	奈半利町	17.7	56.9	▲0.11	3,326	3,727
森の巣箱	床鍋地区	1.1	83.0	▲0.26	89	121

※は基礎自治体の数値を使用しました。(数値は全て2015年国勢調査小地域統計を参照)

定住性

「新住民が多い地域」のインデックス

- 同自治体に住んで5年未満の人口が4分の1以上を占める地域

「長く住んでいる人が多い地域」のインデックス

- 6割以上の方が同自治体に20年以上または生まれた時から住んでいる地域
- 8割以上の方が同自治体に20年以上または生まれた時から住んでいる地域

人口減少

「人が減っている地域」のインデックス

- 2005年から2015年の10年で1割以上の人口が減った地域
- 2005年から2015年の10年で2割以上の人口が減った地域

地域特性を踏まえた生活支援ニーズへの対応及び 地域活動の継続に係る調査研究事業

委員構成

研究委員会

(委員長)

内藤 佳津雄 日本大学文理学部 教授

(委員)

秋山 由美子 特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所 理事

石田 惇子 一般社団法人全国食支援活動協力会 代表理事

石橋 智昭 公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員

日下 直和 社会福祉法人香川県社会福祉協議会 事務局長

隅田 耕史 特定非営利活動法人フェリスモンテ 事務局長

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

祐成 保志 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 准教授

高橋 良太 社会福祉法人全国社会福祉協議会 地域福祉部長

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

中野 智夫 長久手市 暮らし文化部次長 兼 悩みごと相談室長

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

平野 覚治 一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事

福田 めぐみ 社会福祉法人荒川区社会福祉協議会 地域ネットワーク課長

ワーキング部会

(部会長)

平野覚治 一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事

(委員)

清水 洋行 千葉大学大学院人文科学研究院 教授

祐成 保志 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 准教授

中島 智人 産業能率大学経営学部 教授

原田 晃樹 立教大学コミュニティ福祉学部 教授

福田 めぐみ 社会福祉法人荒川区社会福祉協議会 地域ネットワーク課長

令和2年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
地域特性を踏まえた生活支援ニーズへの対応及び
地域活動の継続に係る調査研究事業



ここがあるので地域が豊かになる 住民主体の居場所ガイドブック

一般社団法人 全国食支援活動協力会 編

ガイドブック編集チーム

伊藤浩巳・前川典子(一般社団法人 全国食支援活動協力会)
宮地成子(場所づくり研究所 有限会社プレイス)

デザイン カタヤナギユウイチ
イラスト 梶原香央里

一般社団法人 全国食支援活動協力会

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21
TEL 03-5426-2547 <https://www.mow.jp/>

発行日 2021年3月30日

